

読書悠々日記

(2014年)

久恒啓一

目次

2014年1月	6
五木寛之「下山の思想」(幻冬舎新書)	6
司馬遼太郎「故郷忘じがたく候」(文春文庫)	6
田母神俊雄「田母神塾—これが誇りある日本の教科書だ」(双葉社)	6
三浦展「データでわかる2030年の日本」(洋泉社)	7
岡崎嘉平太「中国問題への道」(春秋社)	7
飯島勲「政治の急所」(文春新書)	8
産経新聞社「新聞記者 司馬遼太郎」(文藝春秋)	9
司馬遼太郎「ペルシヤの幻術師」(文藝春秋)	10
2014年2月	10
米国国家情報会議,谷町真珠「2030年 世界はこう変わる」(講談社)	10
童門冬二「小説・小栗上野介」(集英社)	12
市川宏雄「リニアが日本を改造する本当の理由」(メディアファクトリー新書)	13
安藤百福発明記念館「転んでもただでは起きるな! 定本・安藤百福」(中央公論新社)	13
木内昇「櫛挽道守」(集英社)	15
芦崎笙「スクールの夜」(日本経済新聞出版社)	16
磯田道史「江戸の備忘録」(文藝春秋)	17
イケダハヤト「なぜ僕は「炎上」を恐れないのか—年間500万円稼ぐブロガーの仕事術」(光文社新書)	18
行徳哲男「随所に主となる」(致知出版社)	18
2014年3月	19
原田曜平「ヤンキー経済—消費の主役・新保守層の正体」(幻冬舎)	19
侯野成敏「プロフェッショナルサラリーマン — 「リストラ予備軍」から「最年少役員」に這い上がった男の仕事術」 「プロフェッショナルサラリーマン 実践Q&A編」(プレジデント社)	19
幸田文「きもの」(新潮社)	20
岸田劉生著・酒井忠康編「摘録・劉生日記」(岩波文庫)	20
司馬遼太郎「台湾紀行」(朝日新聞出版)	21
金田博之「アジアの非ネイティブに学ぶビジネス語」(日経BP社)	22
2014年4月	22
小林弘人「ウェブとはすなわち現実世界の未来図である」(PHP研究所)	22
熊代亨『『若作りうつ』社会』(講談社現代新書)	23
吉村昭「彦九郎山河」(文藝春秋社)	25
高任和夫「依願退職」(講談社)	26
国立編訳館,蔡易達,永山英樹「台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る」(雄山閣出版)	27

古川勝三「台湾を愛した日本人—土木技師・八田與一の生涯」(創風社出版)	28
伊藤潔「台湾—四百年の歴史と展望」(中央公論社)	29
田中光顕「最後の志士が語る 維新風雲回顧録」(河出書房新社)	30
紀田順一郎「書物との出会い」(玉川大学出版部)	31
佐々木実「市場と権力「改革」に憑かれた経済学者の肖像」(講談社)	32
古市憲寿「だから日本はズレている」(新潮新書)	33
沖大幹「東大教授」(新潮新書)	34
加瀬英明「日本と台湾—なぜ両国は運命共同体なのか」(祥伝社新書)	35
宇都宮靖「鳶の笛—黒田官兵衛と宇都宮一族との戦い」(粹書院)	36
カズオ・イシグロ,ダロン・アセモグル,クレイトン・クリステンセン,リチャード・フロリダ,フランシス・フクヤマ,クリス・アンダーソン,シーナ・アイエンガー,大野和基「知の最先端」(PHP 研究所)	37
2014年5月	38
百田尚樹「プリズム」(幻冬舎文庫)	38
後藤正治「清冽—詩人茨木のり子の肖像」(中央公論新社)	39
江南「蔣経国伝」(同成社)	39
伊藤潔「台湾—400年の歴史と展望」(中公新書)	40
佐藤愛子「スニヨンの一生」(文藝春秋)	41
上沼八郎「伊沢修二」(吉川弘文館)	42
笹本恒子「お待ちになって、元帥閣下 自伝 笹本恒子の97年」(毎日新聞社)	43
宮崎義憲「太ももを強くすると「太らない」「超健康」になる」(プレジデント社)	43
呉濁流「泥濘に生きる」(社会思想社)	44
2014年6月	45
谷口正和「幸福の風景」(ライフデザインブックス)	45
むのたけじ「99歳 一日一言」(岩波新書)	45
ハインリッヒ・シュリーマン,石井和子「シュリーマン旅行記 清国・日本」(講談社)	46
高木桂蔵「客家 中国の内なる異邦人」(講談社現代新書)	47
ビル・カポダイ,リン・ジャクソン,早野依子「ピクサー成功の魔法—大ヒットを連発する革新的ビジネスモデル」(PHP 研究所)	48
PHP 研究所編「ウォルト・ディズニー—すべては夢みることから始まる」(PHP 研究所)	50
川勝三「台湾を愛した日本人—土木技師・八田與一の生涯」(創風出版)	50
井上勝志「近松門左衛門『国性爺合戦』」(角川学芸出版)	53
リチャード・ニクソン 徳岡孝夫訳「指導者とは」(文藝春秋)	53
服部龍二「大平正芳 理念と外交」(岩波現代全書)	55
村田裕之「成功するシニアビジネスの教科書」(日経新聞出版社)	57
2014年7月	58
岸信介・矢次一夫・伊藤隆「岸信介の回想」(文藝春秋社)	58

川勝平太編「海から見た歴史—ブローデル「地中海」を読む」(藤原書店).....	59
辛基秀「朝鮮通信使の旅日記—ソウルから江戸「誠信の道」を訊ねて」(PHP研究所).....	60
映像文化協会編「江戸時代の朝鮮通信使」(1979年刊)(毎日新聞社).....	62
鶴田啓「対馬からみた日朝関係」(日本史リブレット)(山川出版社).....	62
申維翰, 姜在彦訳注「海遊録—朝鮮通信使の日本紀行」(平凡社東洋文庫).....	63
三浦雄一郎「65歳から始める健康法」(致知出版社).....	65
2014年8月.....	65
竹下登「政治とは何か—竹下登回顧録」(講談社).....	65
田中角栄「大臣日記」(新潟日報事業社).....	66
岸信介, 福田赳夫, 後藤田正晴, 中曽根康弘, 田中角栄, 河野一郎「保守政権の担い手—私の履歴書」(日経ビジネス人文庫).....	67
伊藤昌哉「池田勇人 その生と死」(至誠堂).....	69
鳩山一郎「鳩山一郎回顧録」(kindle版).....	71
佐々木俊尚「自分でつくるセーフティネット」(大和書房).....	72
斎藤清明「今西錦司伝」ミネルヴァ書房.....	73
佐藤雅美「知の巨人—荻生徂徠伝」(角川書店).....	75
2014年9月.....	76
青木雄二「ゼニの人間学」(ロングセラーズ).....	76
青木雄二「青木雄二金言集—ゼニー日一言 365日」(廣済堂出版).....	76
森光子「人生はロングラン—私の履歴書」(日本経済新聞出版社).....	76
池井戸潤「銀翼のイカロス」(ダイヤモンド社).....	77
麻生晴一郎「反日、暴動、バブル—新聞・テレビが報じない中国」(光文社).....	78
麻生晴一郎「北京芸術村—抵抗と自由の日々」(社会評論社).....	81
水野和夫「資本主義の終焉と歴史の危機」(集英社文庫).....	81
2014年10月.....	82
アラン「幸福論」(岩波書店).....	82
バートランド・ラッセル「幸福論」(岩波書店).....	83
ヒルティ「幸福論」(岩波文庫) 三部作.....	84
曾野綾子「辛口・幸福論」(新講社).....	88
川村元気「仕事。」(集英社).....	88
渡辺京二「無名の人生」(文藝春秋).....	89
伊集院静「ノボさん 小説・正岡子規と夏目漱石」(講談社).....	90
東浩紀「弱いつながり—検索ワードを探す旅」(幻冬舎).....	91
中村修二「考える力、やり抜く力 私の方法」(三笠書房).....	92
中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社).....	93
河合敦「豪商列伝—なぜ彼らは一代で成り上がったのか」(PHP研究所).....	94

2014年11月	95
李御寧「縮み志向の日本人」(講談社)	95
石川文洋「日本縦断 徒歩の旅」(岩波書店)	96
桐島洋子「人生はまだ旅の途中」(大和書房)	96
星浩「官房長官 側近の政治学」(朝日新聞出版)	97
太田昌克「日米(核)同盟一原爆、核の傘、フクシマ」(岩波新書)	97
向田邦子「思い出ランプ」(新潮社)	98
岡田斗司夫「僕たちは就職しなくてもいいのかもしれない」(PHP研究所)	98
富岡幸雄「税金を払わない巨大企業」(文藝春秋)	99
夏目漱石「吾輩は猫である」(角川書店)	100
内田樹「街場の憂国論」(晶文社)	101
2014年12月	102
田中康二「本居宣長」(中央公論新社)	102
夏目漱石「こころ」(集英社)	103
水上勉「作家の自伝(74)(シリーズ・人間図書館)「冬日の道・わが六道の闇夜」(日本図書センター)	104
荒又宏「すごい人のすごい話」(イースト・プレス)	105
堤未果「沈みゆく大国 アメリカ」(集英社)	105
山本兼一「利休にたずねよ」(PHP 研究所)	107
北大路魯山人「春夏秋冬 料理王国」(筑摩書房)	108
池波正太郎「日曜日の万年筆」(新潮文庫)	109

2014年1月

五木寛之「下山の思想」(幻冬舎新書)

五木寛之「下山の思想」(幻冬舎新書)を読了。

司馬遼太郎「故郷忘じがたく候」(文春文庫)

16世紀末の秀吉の朝鮮出兵で、薩摩軍によって日本へ拉致された数十人の朝鮮の民があった。

その後、400年にわたって望郷の念を抱きながら、朝鮮の苗字を維持したまま作陶の技術をもって異国の薩摩に旧士族として暮らし続けた「沈寿官」家の生き方を綴った物語。

朝鮮の特色である白を使って進化させた磁器は、白薩摩と呼ばれ、国内はもちろん海外でも貴重品として扱われた。大日本帝国最後の外務大臣・東郷茂徳が、この村の出身で朝鮮姓は朴である。

ソウル大学での講演で、「これは申し上げていいかどうか」と前置きして次のように言っている。この言葉が日本人によって語られるとすれば聴衆は黙っていなかったかもしれない。

「それを言い過ぎることは若い韓国にとってどうであろう。言うことはよくても言いすぎるとなると、そのときの心情はすでに後ろむきである。あたらしい国家は前へ前へと進まなければならないというのに、この心情はどうであろう」

最後に、「あなた方が36年をいうなら」「私は370年をいわねばならない」と結んだ。重い言葉である。

このエッセイのようなミニ小説のような不思議な書物について、司馬遼太郎は次のよう語って、書き始めている。

「このことをまがりなりにも整理するには小説に書いてしずめてしまうよりほかはないが、しかしいま小説に書くには気持ちの醇熟が足らず、気持ちのなかから沸き立ってくるあわつぶがすこし多すぎるようにおもわれる。以下、なにをどこから書くべきであろう。」

興奮、疑問、感銘、、、こういったものを鎮めるために、司馬遼太郎は小説を書いていたということがわかった。整理して自分なりに納得できるようにする手段が小説を書く推進力だったのだ。

田母神俊雄「田母神塾--これが誇りある日本の教科書だ」(双葉社)

田母神俊雄「田母神塾--これが誇りある日本の教科書だ」を読了。

三浦展「データでわかる 2030 年の日本」(洋泉社)

- ・ 2040 年まで東京都と神奈川県は人口はあまり減らない。地方の人口は 2 割から 3 割減る。
- ・ 2030 年の高齢化率は 31.6%。(21%以上は超高齢社会)
- ・ 日本の出生数は 100 万台。2030 年は 75 万人
- ・ 大型高等教育機関の 25 歳以上の割合は日本 2.0%。OECD 平均 21.1%。30% 台は、アイスランド、ポルトガル、ニュージーランド、スウェーデン。
- ・ 社会保障給付費は 2012 年は 109.5 兆円(年金 54 兆、医療 35 兆、介護福祉 21 兆)。2025 年に 151 兆円。

岡崎嘉平太「中国問題への道」(春秋社)

発刊は 1971 年 3 月。1969 年に書いた文章も入っている。これから 45 年後が、2014 年だ。

岡崎嘉平太(1886 年-1989 年)は、日銀を経て、大東亜省参事官、上海在勤日本大使館参事官。戦後、池谷鉄工、丸善石油、全日空の社長を歴任。日中覚書貿易事務所代表。81 歳、勲一等瑞宝章。92 歳、戦後 100 回目の訪中、没。

「これからの外交の行き方は、隣国とともに生きるということにあると思う」

「アヘン戦争以来、中国が苦しんだもろもろの何代を、孫文、黄興、蒋介石と三代を経て共産党政権がこれを一举に解決した」

「8 月 15 日に蒋介石がだした布告文「仇に報いるに徳をもってせよ」。憎い日本ではあるけれども、アジアの守り神であったといえるよ」

「気宇が大きい、、」

「だれも中共に行き、あるいは人と交わって身をもって研究している様子がない」

「実に遠大な計画です。それがいちばんよくわかるのが植林、治水です。黄河ひとつみましても、五千年来の念願だった治水をついやってしまった。」

「周恩来。わが国は大変な損害を受けている。しかし、八十年は、日中二千年の交わりに比べれば僅かな時間だ。」

1969 年といえば、私の大学入学の年になる。そのときに、以下の考えを発表していたのには驚いた。

中国の今日あるを予測し、日本への米軍駐留への警鐘、日本の安全保障も柔軟に考えていることに感銘を受けた。

- ・ あと 30 年たったら、世界における今の中国というのは、えらいものになる。おそらく、ソ連は追い越し、アメリカにも追いつくだろう、、、そういうときが来たときに、

もし、日本民族と中国民族との間に、不信感があったとしたら、息苦しいのは日本じゃなかろうかと思います。

- ・ 基地については、外国の軍隊が今後二十年、三十年、五十年にわたって日本に駐留し、日本が実際の自己防衛を行わないという状態がつづけば、日本民族はおそらく骨抜きになるだろうと私は心配する。そこで、日本民族が生きるバックボーンをもつために、基地は漸次、できるだけ早く撤去しなければならない
- ・ 日米安保条約だけに固執せず、より広い視野からアジアの安全を考える必要があると思う。また、日本の安全は日本人自らが守るのだという気概をつくりあげてゆくことが必要なのではないだろうか。

郷里の岡山県に岡崎嘉平太記念館がある。ここには訪問したい。

飯島勲「政治の急所」(文春新書)

2006 年に出た「小泉官邸秘録」(飯島勲・日本経済新聞社)を読んだことがある。5 年 5 ヶ月という歴史的な長期政権だった小泉政権の首席総理秘書官の回顧録だ。

その本の中では、「総論でタガをはめ、大臣を押さえ、官僚組織のトップを押さえることで各論での「骨抜き」「逃げ」を許さない」やり方で政策を推進したということが印象に残っている。

今は安倍政権の参与という立場。こういう玄人が官邸にいるのは心強い。

この本でも政治のカンドコロ、急所を押さえているので、読み応えがある。

今後の政局を占う発言をみてみよう。

- ・ 実務の頂点の官房長官は危険だから、強くなってきたらすぐさま代えるべきだ。
- ・ 東京五輪のトップはトヨタ自動車の豊田章男社長がベスト。
- ・ 日本に在日米軍基地はいらない。地上軍を送る前にミサイル攻撃になるから基地を置く必要は薄い。
- ・ 維新の会は東京と大阪に分裂する。
- ・ 安倍政権は長期政権になる。
- ・ 日朝間の実務者協議は終わっている。米朝が進めば時間はかからない。横田めぐみさんと有本恵子さんは生きている。
- ・ 日露関係は、1855 年の択捉島とウルップ島の間に関境線を引いた日露通交条約に戻る。返還の前に四島が日本固有の領土だという帰属の確認をとる。これで 100 点満点。
- ・ 習近平体勢になって、中国最高指導部から靖国に行くなという発言は出ていない。だから大丈夫。
- ・ 韓国との関係は心配ない。製品の 6 割の部品は日本製。放っておけば向こうから頭を下げてくる。

- ・ アメリカの次期大統領はヒラリー・クリントン。
- ・ 時代に流れは多党化。
- ・ 日本が抱える諸問題は 2020 年頃に一気に顕在化してくる。
- ・ 政治家の仕事は、決断すること、その決断に責任を持つこと。官僚に目標を示すこと。

産経新聞社「新聞記者 司馬遼太郎」(文藝春秋)

司馬遼太郎が、直木賞を受賞したときの新聞に載せるプロフィールは自分で書いた。こういった例は初めて。

司馬自身が、自分をどうみているかがわかり、そしてユーモアも漂う見事な紹介だ。

「小説より歴史がすき、歴史よりも新聞記者がすき、新聞記者よりもあそぶのがすき」という新聞記者歴 13 年で現在産経新聞(大阪本社)文化部長をしている。

少年のころから、万里の長城にあくなくないピストン侵略を加えつづけてついに砂漠の底に没しきった東洋史上のオアシス国家の運命に執ような興味を持っている。もともと、ロマンを書くより、ロマンを行動しようと思って、外語蒙古語科のころは本気で馬賊になろうと思っていたそうだ。こうした豪放さは、その後もこの作家の血のなかに息づいている異様な主題のひとつだろう。

仏教的美意識が強く、とくに原始仏教がもっていたダイナミックな空想力と、アクの強い人間探求に執着をもっている。、「ペルシャの幻術師」(第 8 回講談社倶楽部賞)、直木賞受賞作の「梟の城」(講談社刊)などの作品のほか「大坂侍」(東方社刊)た「週刊コウロン」連載の「上方武士道」のように江戸時代町人の共和国である「大坂」にすんでいたほんの一つまみの武士の存在におかしみを感じ、かれらが町人に複雑なコンプレックスをいだきつつ市民生活をしたことを支点に、いくつかの人間喜劇も書いている。

青年のころ司馬遷の「史記」をよんではじめて人生を見たという。ちなみにペンネームの由来は「司馬よりも遼(はるかに遠い)」という所からつけた。ただし司馬遷の悲劇的な運命まではあやかりたくないそうだ。本名福田定一。36 歳

「一日に 5 時間の読書を日課にしている」(新聞記者時代)

「百科事典を読んでいた。百科事典は戦前のものが断然いい」

「小説を書くのは、自宅に帰って、だいたい夜の 11 時過ぎからであった。寝床に入り、うつ伏せになって原稿用紙に向かう。3 枚から 4 枚ほど書くと、眠気がさしてきて、ペンを置く。翌朝、目を覚まして読み直す。そこで前夜の前稿に手を入れる。、、」

「ぼくは人間が好きだし、歴史上の人物なら、その完結した人生を見わたせるんだから、どんな角度からも近づける」

「取材とは、ものごとを知りたいということではなくて、自分のイメージーションに刺激

を与えるものである、、、行くと、何か変なことが起こりますね、心のなかに」。

「新聞記者は観念的な事も含めて広く考え、広く耕す、実にいい仕事です。だから頼まれたわけでもないのに、これだけ、いつも公の事を考えている人種は他にいないのではないか。」

「地名事典を持ち歩く」

司馬遼太郎は、直木賞をとった1年後に産経新聞を退社し、作家生活に入る。新聞記者時代は、司馬遼太郎の孵化期間だった。二足の草鞋の期間の過ごし方も興味深かった。

「おっさん、やっぱり内職はあかんぜ」と悪態をつかれると、「それをいうな。これも勉強だ」と、怒ったようにやり返したそう。

この作家の年譜をみると、大正12年生まれだった。ということは私の父と同じ年ということだ。1996年に73歳で没している。そういう時代の人の空気はわかる気がする。

司馬遼太郎「ペルシャの幻術師」(文藝春秋)

司馬遼太郎がこのペンネームで最初に書いた短編小説「ペルシャの幻術師」を読んだ。

昭和31年の講談社倶楽部賞の受賞作品。

蒙古のフラグの第四子ボルトルと幻術師アッサムと王女ナンの幻想的な物語。

この蒙古軍のなかに「バートル」という武将がでてくる。

次に書いた「伐壁(ゴビ)の匈奴」という短編も読んだ。

鉄木真(テムジン)、後のチンギスハンの物語。チンギスとは強大を意味する異称。

蒙古人は、性欲と好戦欲と略奪欲の激しい民族。ゴビ砂漠を20日間の日数で越える。6日間の絶食に耐える得意な胃袋。一昼夜騎走千キロ以上。わずか400万人。名はあるが姓はない。

最初の作品を選考委員として受賞作として強く押した海音寺潮五郎は、二作目は選考委員であった直木賞の受賞作になると確信したが、舞台と主人公が日本と日本人でなく好まれないと考え推薦を見送った。

海音寺潮五郎が、司馬遼太郎の発見者だった。

2014年2月

米国国家情報会議、谷町真珠「2030年 世界はこう変わる」(講談社)

2014年の約15年後は2030年になる。

この 15 年で日本と世界はどう変わるだろうか。

「2030 年 世界はこう変わる」(講談社)という本を読了した。米国国家情報会議編のこの書物は、アメリカの国家戦略を策定する者、関心を持つ者が頭に置いておくべき近未来のトレンドが書かれている。以下、まとめ。

- ・ 4 つのメガトレンド(構造変化)のキーワードは、個人、分散、人口、連鎖である。
 - ・ 極度の品構想は 5 割減少。東アジア、特に中国で。
 - ・ 世界の間所得層は 10 億人から 20 億人超になる。特にアジア。インドの間所得層が中国を上回る成長。
 - ・ 一人あたり GDP が 1.5 万ドルを超えると民主主義が定着。
 - ・ アジアは北米と欧州の合計を上回る。中国は米国を抜き世界一。2030 年は中国とインドがスーパースター。アフリカではエジプトとエチオピアとナイジェリア。ラテンアメリカではブラジル。
 - ・ 覇権国家がない状態で、国際社会は不安定化。
 - ・ 2030 年の世界人口は 83 億人。平均年齢が上昇。日本は 45 歳から 52 歳。若者社会国家は政情不安定。
 - ・ 都市人口比率は 6 割の 49 億人。
 - ・ 世界的食糧不足は対処可能。食料インフレが深刻。エネルギー不足懸念は後退。米国はエネルギー独立を実現。
- ・ 世界の流れを変える 6 つの要素は、世界経済、統治力、衝突、地域紛争、技術、米国、である。
 - ・ インドは中国と米国に次ぐ経済大国。中国とインドの合計は米国と EU のご受けの 2 倍。
 - ・ 長期的には中国は安定した政治制度づくりに成功。
 - ・ 国内紛争の解決には 6 年、国家間紛争は 2 年で収束。
 - ・ サウジアラビアは 2037 年に原油輸入国に。
 - ・ パレスティナ問題は解決しない。
 - ・ 情報(IT)分野。データ処理、ソーシャルネットワーク、スマートシティ。
 - ・ 自動運転技術。3D プリンター。遺伝子組み換え食物。精密農業。マイクロ灌漑。病気管理。能力強化。
 - ・ 米国は覇権国からトップ集団の 1 位に。
- ・ 4 つのシナリオ。欧米没落型、米中協調型、格差支配型、非政府主導、である。
 - ・ 欧米没落型: 欧米は内向き、グローバル化は停止。米中協力型に比べ 27 兆円も低下。自由貿易圏は消える。
 - ・ 米中協力型: 世界経済は現在の 2 倍。新興国、先進国とも成長。中国の民主化

が進む。

- ・ 格差支配型: 国内・国際で経済格差。勝ち組と負け組。
- ・ 非政府主導型: 政府以外の機関や人々が世界をリード。エリート層と中間所得層が増加。

童門冬二「小説・小栗上野介」(集英社)

童門冬二「小説・小栗上野介 日本の近代化を仕掛けた男」を読了。

卓越した先見性と構想力を持ち、激動の幕末に外国奉行・勘定奉行・軍艦奉行等を歴任し、徳川幕府の存続に力を尽くした三河譜代の気骨あふれる武士・小栗上野介(1827-1868年)の物語。

著者の童門冬二は 1927 年生まれだから、ちょうど 100 年はやく生まれたのが小栗だ。

小栗は近代日本の設計者だが、その設計図を明治の新政権が実行した。

「廃藩置県に切り換え、幕府を中央集権政府とし、その主宰者お権限を拡大する」という小栗の新日本構想を明治政府が実行した。

著者は小栗の「混濁した世の中で貫く人間としての潔さと誠意」に興味を持ってこの小説を書いている。組織と人間というテーマを持つ著者の関心を引いた人物なのだろう。

幕府を代表する傑物、4 歳上の勝海舟と小栗上野介の二人のライバルを対比しながら、幕末の様子を幕府側の視点で描いている。

ポーハタン号(2400トン)でアメリカに渡った正副使節の目付が小栗で、もう1隻の威臨丸(300-400トン)の艦長が勝であった。一行はアメリカ西海岸、東海岸、アフリカ、喜望峯、ジャワ、バタビア、香港を経て、品川に上陸している。世界一周をしている。小栗は「最も日本人らしい威厳と落ち着きを備え、その容姿が端麗でスマートだった」と言われている。

与えられた状況の中で精一杯力を尽くし、沈みゆく船を必死に持ちこたえさせようとする頑固で優秀な行政官僚の姿は清々しい。小栗を登用したのは井伊直弼で、小栗が最後に仕えたのは徳川慶喜である。

「お役替わり 70 数度」と言われるほど、人事異動が多かった。能力の高いマルチ人間だった。外務大臣、大蔵大臣(4度)、陸軍大臣、海軍大臣、東京都知事、、、。

小栗の最大の業績と言われているのは、「徳川幕府軍のフランス式改良。その指導にあたるフランスからの指導教官の招聘。横須賀造船所の建設」である。

横須賀造船所は、仮に幕府が倒れても、新しい持ち主は「土蔵付き売家を買ったことになる」と小栗は言った。日本へのプレゼントである。

世界に肩を並べるには、日本の海軍力・海軍力整備が急務という考えから、資金難

を乗り越えて、実行した。この製鉄所には、フランス人 25 人、日本の判任管 72 人、等外吏 121 人、番人 20 人、筆算雇 27 人、職工 1344 人、請負職工等 100 ないし 450 人を抱えていた。明治政府の殖産興業・富国強兵の模範だった。

明治政府時代には小栗の評価は低かったが、造船と修理にあたった横須賀製鉄所建設の功績は大きく、司馬遼太郎は小栗を「明治の父」と記している。

後年日露戦争の英雄東郷平八郎は、「日本海海戦に勝利できたのは製鉄所、造船所を建設した小栗氏のお陰であることが大きい」とし、地方の山村に隠棲していた遺族を捜し出し礼を述べた。

大隈重信が後年、「明治政府の近代化政策は、小栗忠順の模倣にすぎない」と発言したほどの人物だった。

1868 年に江戸城大会議において主戦論を展開し、役職のすべてを免ぜられ隠退知行国である権太村東善寺に落ち着く。東山道先鋒総督府が追悼令を発し、捕縛され、斬首される。享年 42 歳。

斬首の地に建つ顕彰慰霊碑の碑文には「偉人小栗上野介 罪なくして此所に斬らる」と記されている。

群馬県高崎市の東善寺を訪ねたい。

市川宏雄 「リニアが日本を改造する本当の理由」 (メディアファクトリー新書)

関東・中京・関西の一体化。7300 万人の東海道スーパーメガロポリス。新日本列島改造論だ。

安藤百福発明記念館 「転んでもただでは起きるな！ 定本・安藤百福」 (中央公論新社)

安藤百福のエピソード

- ・ ハレー彗星が見えた年に誕生。「世の中に幸せをいっぱいもたらすような人間になって欲しい」との重いから「百福」と命名された。
- ・ 日清食品: 日々清らかに豊かな味をつくりたい、という願いが社名になった。
- ・ 総合商社の事業分野の広さを「ラーメンからミサイルまで」というキャッチフレーズが使われた。安藤は不満で「ミサイルからラーメンまで」にして欲しかったそう。ラーメンは平和産業。
- ・ 1971 年の浅間山荘事件で機動隊がカップヌードルを食べる映像で大ブームとなった。

安藤百福の言葉は実にいい。

- ・ 人生に遅すぎるといことはない。
- ・ 創業とは一粒の種を撒くことである。
- ・ どんなに優れた思いつきでも、時代が求めていなければ、人の役に立つことはできない。
- ・ 人の集まる場所には、需要が暗示されている。
- ・ 創業者には定年がない。
- ・ 発明はひらめきから。ひらめきは執念から。執念暗なきものに発明はない。
- ・ 子どものように、いつも「なぜ？」と疑問を発しなさい。
- ・ 開発とは時代を読む作業である。
- ・ 時代に変化に対応するのではなく、変化をつくり出せ。
- ・ 不即不離の付き合いが長続きする。
- ・ 企業力とは、問題が生じた場合、一丸となってことにあたる仕組みにほかならない。
- ・ 一時的なヒット商品よりも、新しい市場を創造していく商品を作れ。
- ・ インスタント食品とは時間を大切に作る食品ということになる。
- ・ 社員はもとより、社会全体がトップの姿勢を見ている。社長の座は十字架を背負っているようなものだ。
- ・ 社長とは権力ではない。責任の所在を示している。
- ・ 社員の結束を図るために、トップは先頭に立って旗印をかかげる必要がある。
- ・ 事業はすべて、進むより退く方が難しい。
- ・ 仕事をするのは組織ではなく人である。
- ・ 人のやらないことをやれ。やれそうもないことを成し遂げるのが仕事というものである。
- ・ 興味をもって取り組んだ仕事には疲労がない。
- ・ 余人をもって代えがたい人になりなさい。
- ・ 自らの足で歩き、自らの目で確認しなさい。そうでなければあなたの話には重みも説得力もない。
- ・ 時計の針は時間を刻んでいるのではない。自分の命を刻んでいるのだ。
- ・ 食の仕事は聖職です。
- ・ 食べれないものを食べられるようにするおが料理というものである。
- ・ 味に国境はない。
- ・ 人類は麺類だ。
- ・ 「？」は、「！」のモト。
- ・ 「気宇壮大 心眼千里」「体力智力 気力全力」「企業在人 成業在天」「入心入魂 自立自進」

木内昇「櫛挽道守」(集英社)

櫛職人の深い世界。

木内昇(のぼり)という女性作家に注目している。

1967年生れ。出版社勤務を経て2004年に小説家デビュー。2011年、「漂砂のうたう」で直木賞。

江戸時代、幕末を描く作品が多い。庶民が主役の作品。

「ある男」に続き、「櫛挽道守」(集英社)を読み終わった。

中山道の木曾路の小さな村に住む「お六櫛」という名品をつくる職人一家が暮らす物語。

この小さな保守的な村にも幕末の波が押し寄せる。櫛職人の家族を題材にしているが、普遍的な職人の世界を描き切っている。櫛職人というテーマを深く掘り下げた名作だ。「ある男」もそうだったが、世の中を変えようとする無名の庶民の生きざまには読後に静かな感動を覚える。

この作者の人々を見つめ描く腕もただものではない。

- ・ 吾助はなにも教えぬ代わりに弟子が学ぼうとするのを咎めもしなかった。
- ・ 二度としくじりをせぬよう、戒めのため目につくところに飾ってあるのだ
- ・ 慣れる。道具をわがものにしなければ。あとはわれで工夫する。
- ・ 引くのと押すのとで微妙に力加減を変えていたのである。
- ・ 一向に飽きのこない面白さと、一生を掛けるだけの深みと、それを抜き出した技量でものにしている父への尊崇
- ・ 道具というのは職人の命です。
- ・ 作るいうより、もともとあるべき形を導き出しとるような気さえますんや
- ・ 江戸では、、仕事を高めていけるのだ。
- ・ 己の足どりを乱してはなんね。他人の歩調に引っ張られては、己の仕事はできんだで
- ・ 自分の手でありながら誰かに操られているような不思議を覚えながら一枚を挽き終える。
- ・ わしはここを動かずに、わしという櫛師を知らしめたる、そうやってしがらみだらけの世を変えたと決めたんや
- ・ なんともいえねえ味があるで、風格、いうたらええじゃろうか。一朝一夕では出ねえ味だ。
- ・ うまぐいっとるところは大概、考えずともできるとこだ。そごを解き明かすとかえってぎこちなくなる。だで、考えるな。むしろ、悪いところ、うまぐいがんとところから目を逸らしてはなんね
- ・ 先代、先々代からずっと受け継いできたものだけ。おらのこの身が生きとる間、

ただ借り取る技だ。んだで、おらの技というこどではねえんだ

- ・ 一日挽かねばそれだけ勘が鈍る。勘を取り戻すには、鋸を持たなかった日の倍の日数がかかる。
- ・ 腕は立っても、心棒がないやね。それをこれから己の手で掴まなあかん

小説のストーリーも上手く出来ていて素晴らしいが、櫛職人の発する叡智を以上ピックアップしてみた。

なにごとにも通じる真理だと思う。

司馬遼太郎や藤沢周平亡き後は、歴史小説はこの作家の作品を愉しむことにしようか。

芦崎笙「スクール之夜」(日本経済新聞出版社)

「スクール之夜」(芦崎笙)を読了。第5回日経小説大賞受賞作品。著者は50代の財務省大臣官房参事官。

「組織はきれいごとでは動かない。女性の出世は逆差別か? そして、仕事は自己実現たりえるか——日本社会「中枢」のダイナミズムを、第一線で活躍する女性を通して、懐深く細やかにからめ取るまったく新しい経済小説」。

「平成元年に東大法学部を卒業、都市銀行トップの帝都銀行に女性総合職一期生として入行した吉沢環が女性初の本店管理職に抜擢された。担当任務は、総会屋・暴力団への利益供与や不祥事隠しの役割を担ってきた子会社の解体と退職勧奨の陣頭指揮。保守的な企業風土による女性への偏見や差別に耐えての昇進を意気を感じ、荒療治に乗り出すが、周囲の感情的な反発を招き、経営幹部の派閥抗争に巻き込まれていく。」

女性主人公が銀行入行後20年の40代に入り、「綺麗事ではすまない厳しい現実には叱咤されるかのように、もう一度自分の属する組織において死物狂いで働いて見ようと思いはじめていた。」というところで、この小説は終わる。

企業は人生の学校である、と改めて思う。

矛盾と葛藤しながら、組織と折り合いをつけながら戦っていく道程が仕事の歴史だ。その道程がキャリアである。この著者の官僚も、毎日そういう状況の中で歯を食いしばりながら、組織と自分の間合いを測りながら仕事をしていると思う。困難な仕事に立ち向かおうという宣言だろう。

読後には、組織と個人の折り合い、仕事の意味、正義感、人事、役職、、、こういうテーマで企業小説を書いてみたいと思った。

磯田道史「江戸の備忘録」(文藝春秋)

「武士の家計簿」を書いた磯田道史さんの所論に興味がある。

「近世大名家臣団の社会構造」とは対になっている。以上の 2 冊を読めば、江戸時代の武士社会の仕組みがわかる。

本日は「江戸時代の備忘録」というこぼれ話をつづった軽い文庫をざっと読む。

家康「大将のつとめは、逃げる事」だから、剣術には冷淡で、騎馬と水泳に力を入れた。

太田垣蓮月の「あだ味方 勝つも負くるも 哀れなり 同じ御国の 人と思へば」という歌で、西郷の江戸攻めを回避した。

江戸の教育事情もわかって面白い。一両は30万円。

寺子屋に子供をやると、親は今の金で年間 10 万円程の学費を払った。入学金(束脩)、授業料(謝儀)2 万を5回。

上級武士は家柄で高禄が保証されているが、下級武士は計算などができなければ仕事にありつけなかった。

武士には「侍」「徒士」という「士分」と、「足軽、中間以下」の段階があり、大きな隔りがあった。

明治維新の立役者は、大隈・板垣・陸奥・高杉・桂・井上以外は、ほとんどが中級以下の「下級武士」であった。

西郷・大久保・黒田・勝・江藤・副島・福沢は、徒士層であり、山形・伊藤は中間層であった。

「侍」は身分があがるほど、領主に近くなる。下がるほど「官僚」的色彩が強くなる。

「徒士」は官僚なので実務、事務的実力が必要だった。家督相続時には筆跡と算盤の試験があった。組織の命運は自家の存亡にかかわる。藩校などで必死に勉強したのは、徒士の師弟だった。役付にならなければ収入が増えないからだ。

「日露戦争までの日本人は偉かった」というが、その中核を担った乃木・大山・児玉・秋山兄弟らは「徒士」として育った人たちだった。「明治の人は偉かった」という述懐は、そういう人たちが、各界にいたということだろう。

1800 年ころから武士の教育に力を入れた藩は幕末には雄藩となり、明治維新を経て 1904 年の日露戦争のまでの間に、多くの人材を輩出した。この間、100 年の歳月が流れている。教育は国家百年の計なのだ。

藩校システムは近代化の準備として有効だったが、人間を均質化した面もある。儒教、特に朱子学は観念的にすぎる傾向がある。

経験談中心の「夜話」や、薩摩藩の「郷中教育」での思考訓練など。師と弟子の対面学習、とことん面倒を見るという文化。、、

マンツーマン教育は多様な人材を育てる。近世以前の武士教育は、実践的でリアルスティックだった。

現代の教育現場で格闘している者にとって、ヒントになる。

イケダハヤト 「なぜ僕は「炎上」を恐れないのか一年間 500 万円稼ぐブロガーの仕事術」(光文社新書)

「炎上」を逆手にとって進んでいく、ストレスフリーな生き方を目指す覚悟の書。

「みんなもっと炎上しようぜ!」「ぼくは空気を読みません」「いいたいことがいえる地位を築き、環境をまず変えること」「炎上することで燃やし尽くしてしまえ」、とまえがきにあるように挑戦的な姿勢で書き始めている。

そして、あとがきには「ぼくは「こう」してきました。あなたはこれから「どう」しますか?、」と読者に語りかけている。

1986 年生まれの著者はまだ 27 歳。今年度の春学期には多摩大で最も若い非常勤講師として学生たちに向き合ってもらったが、共感者が多くとても人気があった。

「年収 150 万円で僕らは自由に生きていく」(星海社新書)は、ほんの少し前の出版だったが、もう年収も 500 万円に届いているようだ。

新しい価値観を提示し、エッジを効かせて、フリーランスで生きていこうとする若者の、これからの「自由」への旅に注目していきたい。

行徳哲男 「随所に主となる」(致知出版社)

「いま ここ 自分」「玄妙即凡」「意中、」人あり。腹中、書あり」「武という字は、戈を止めるという意味」

「人間ぬくぬくとし始めると、ろくな仕事はせん。追いつめられと、竜が玉を吐くように命を吐く」(紀野一義)

「一生燃焼、一生感動、一生不悟」(相田みつを)

「もう否定の哲学は終わった。これからは肯定の哲学をそう構築するかだ」(シャルダン)

「もし梅園に出会わなかったら、私はノーベル賞をもらえなかつただろう」(湯川秀樹)

「師友会」(安岡生篤)は「師恩と友益」(吉田松陰「徳を成し、材を達するには、師恩友益おおきに居る」から)。

「現象としての人間」(シャルダン)を取り寄せたい。

2014年3月

原田曜平「ヤンキー経済——消費の主役・新保守層の正体」(幻冬舎)

原田さんの本職は、博報堂ブランドデザイン若者研究所リーダーで、日本・アジア各国で若者へのマーケティングや若者向け商品開発を行っている。

1980年代頃の不良・ツッパリというイメージのヤンキー(自己表現)、90年代からゼロ年代前半の金髪・茶髪のヤンキー(自分探し)、そしてゼロ年代後半の反抗心のないマイルドヤンキー(低い自己顕示欲)というように世代を分けている。主眼は、ゼロ年代後半に増加した新しい若者のタイプの流れの説明である。

中学時代と地続きの居心地のよい生活。現状維持、楽であることが最上位概念。上京志向のなさ。生活に対する高い満足度。ほどほど感。内向的。低いITスキル。低位安定。地元が好き。大学生はバイトで勉強が犠牲。EXILEが人気。仲間主義・家族主義。旧来型ヤンキーのモデル・安室奈美恵と浜崎あゆみ。達観。宅飲みに近い自由でゆるい集まり。スマホ率は高い(iPhone)がガラケー並みの使い方。LINE。電車嫌い。ハズレ感のないディズニーが好き。

こういう新しい若者がこれからの消費の主役になるとして様々の商品の提案を行っている。

「らくらくホン」。ブランド子供服。大型ミニバン。子供仕様。格安型サービス。同級生割引。限度額の低いカード。、、、。

確かに学生と接触していると、腑に落ちるところがある。

この本は、売れる。

侯野成敏「プロフェッショナルサラリーマン — 「リストラ予備軍」から「最年少役員」に這い上がった男の仕事術」 「プロフェッショナルサラリーマン 実践 Q&A 編」(プレジデント社)

侯野成敏さんからいただいた本を数冊読み終える。

シチズンに入社後、半世紀ぶりの赤字で30歳にしてリストラ候補となり、一念発起して在庫処分を担うメーカー直販店を社内起業し成功。2年後に33歳でグループ企業最年少役員に抜擢される。40歳で本体の上級顧問に就任。2012年に独立。

2012年より著書を数多く出版している。

この人は「プロフェッショナルサラリーマン」というキーワードでデビューしているが、内容は企業の中でたたかき生き抜く仕事術と人間関係術が中心だ。20年近くの企業勤務経験から繰り出されるアドバイスやヒントには同じような経験をした身には共鳴できる部分が多い。若いサラリーマンが注目するのはよく理解できる。

会社を辞めずに、サラリーマンであることの特権を120%生かして自分の仕事にやり

がいを持つビジネスパーソンをサラリーマンのプロフェッショナルと定義している。

相当な量の本を読み込んだ上で、咀嚼して自分なりの違うこなれた表現で語っている。

「プロは配属に文句を言わない」「プロは花形部門の行列に並ばない」「プロは意味のない作業を自ら葬り去る」「プロは人に関わる分野を効率化しない」「プロはダメ上司の3つの特徴を知っている」「プロは仕事の受け取り方がうまい」「プロは上司にとっての近所のコンビニであれ」「プロは事後報告を上手に行う」「プロとはくじを引き続けることのできる人である」「プロはルールからはみだす」「プロの仕事の報酬は仕事である」「プロは会議の書記を自ら引き受ける」「プロは〇〇長になる前からそれらしくふるまう」「プロは安全地帯から飛び出す」、。。。

「小さい組織でのリーダーになることが成長の近道」「余裕がない人には仕事はこない」「上司の依頼にはプラスアルファをつけてかえそう」

組織の中で成長していくための心構えとノウハウが書かれてある。

まさに「企業は学校である」。

幸田文「きもの」(新潮社)

幸田文「きもの」(新潮文庫)読了。

岸田劉生著・酒井忠康編「摘録・劉生日記」(岩波文庫)

38歳で亡くなった岸田劉生の30歳の正月から5年間の毎日の日記である。

この人の全集は全十巻なのだが、二期は全五巻であるから、文章もうまかった画家の代表書籍といってもよい。

自分が描いた挿絵もうまい。友人たちと自宅に作った土俵でよく相撲をとっている。

武者小路実篤、木村莊八、志賀直哉、梅原龍三郎、中川一政、山本鼎、倉田百三、など同時代の友人たちの名前が頻繁に登場する。

娘の麗子ことこの記述も多い。代表作品「麗子像」のモデルである。

関東大震災の様子も生々しい。「ああ何たる事かと胸もはりさけるようである。家はもうその時はひどくかさいでしまった。もう鶺鴒沼にもいられないと思ったが、これでは東京も駄目か、。。。。つなみの不安でともかくも海岸から遠いところへ逃れようと、。。」

- ・ 全力を尽くさなくてはならぬ、芸術の神の前にのみ自らの画を見せることを思え。

- ・ 他人に何と思われても自分は自分の仕事の世界をのこせばこれ以上の誇りはない。

「これからずっと続けたく思う。一冊、一年中の事がこの日記に記されたら不思議な味の本になる。」と日記を書く事にした決心を語っている。その通りの味のある本に結実している。

司馬遼太郎「台湾紀行」(朝日新聞出版)

6月の台湾出張に備えて本を揃えている。

まず、司馬遼太郎「街道をゆく」シリーズの「台湾紀行」(朝日文庫)を読了。

台湾を中心に大陸と日本、オランダなどとの関係がみえてくる司馬遼の名紀行だ。

この素晴らしい紀行は、膨大な読書の上に構築されている。司馬は正月から4月まで、毎日、台湾の本を読んでいる。

「フォルモサとよばれたこの島の大航海時代の記録からオランダ時代、鄭成功時代、清朝のころの渡来民による西部平野の開拓、また斐漢民族についての考古学、文化人類学の本、さらには日本統治時代のこと、製糖業のこと、風俗誌、考古学の報告書、台北帝大に関する本、各中学校の同窓会誌、孫文伝、蒋介石伝、蔣経国伝、中華民國の到来とその戒厳令下のことも、また自費出版の自伝や手記のたぐいまで読んだ。」

司馬遼太郎の「台湾紀行」を紀行してみたいと思い、文中にでてくる本を注文した。これらを読んだ上で、台北、台中、台南、高雄などを巡ってみたい。さっそく、以下を注文した。

- ・ 楊威理「ある台湾知識人の悲劇---中国と日本のはざままで 葉盛吉伝」(岩波書店)
- ・ 川上奈穂訳「蔣経国伝」(同成社)
- ・ 古川勝三「台湾を愛した日本人---嘉南大しゅうの父 八田與一の生涯」(青葉図書)
- ・ 「都市の医師 浜野弥四郎」(水道産業新聞社)
- ・ 高木桂蔵「客家」(講談社現代新書)
- ・ 「台湾監獄島」
- ・ 上沼八郎「伊沢修二」(吉川好文館)
- ・ 福住信邦「鄭成功の母」(講談社サービスセンター)
- ・ 伊藤潔「台湾」(中公新書)
- ・ 「台湾考古誌」(法政大学出版会)

- ・ 佐藤愛子「スニョンの一生」(文藝春秋社)
- ・ 「証言 霧社事件」(草風缶)
- ・ 呉濁流「泥寧に生きる」(社会思想社)

台湾で馬英九総統と学生たちの対立が報道されている。それも関心をもってみたい。

金田博之「アジアの非ネイティブに学ぶビジネス語」(日経 BP 社)

先日知り合った金田さんの新著。外資系の SAP ジャパンで活躍し、大手メーカーのミスミに転職し経営の中枢に参画。メディアにも登場し、著書も多い。実用的であり、「アジアの非ネイティブに学ぶ」という着眼が秀逸だ。

この本は、ノンネイティブのアジアの英語学習を盗もうという提案が主張。

そして漫然と英語を学ぶのではなく、自分に必要な仕事のシーンを限定し、徹底的に反復トレーニングをすすめる。

目的をはっきりし必要最低限の英語を勉強すればいい。

グローバルビジネスの現場では、中国人や韓国人との会話が多いからカッコいい英語は必要ない。

オンライン英会話学校:Englishtown:6900 円から。24 時間サービス。

具体策は、やはりネットを使うのがいいということだ。いくつかさっそく試してみようか。

- ・ ツイッター:ゴガクル英語。RNN 時事英語辞典。毎日英語でつぶやく。
- ・ YouTube で著名人の講演を聞く。
- ・ Business English Pod:30 分
- ・ TED
- ・ ポッドキャスト:Business English Pod。English News-NHK WORLD RADIO JAPAN

2014 年 4 月

小林弘人「ウェブとはすなわち現実世界の未来図である」(PHP 研究所)

以下、ポイントをピックアップ。

- ・ ウェブ 1.0 は双方向受発信による「中抜き力」(2000 年から)。ウェブ 2.0 は検索とブログによる「共有力」。次は SNS(ツイッター・フェイスブック)の台頭による他人の力を活用する「ソーシャル力」の時代。

- ・ 情報は露出量から FB の登場で強弱へ変化。友人たちのネットワークのデザインが問われる時代。そしてテクノロジーは文脈理解の方向へ。(方針)
- ・ FB 広告: 共感を引き出せるか。属性選別広告が可能。(SNS 偏差値)
- ・ 文脈を紡ぐ仕事が重要になる。断片化したコンテンツに意味やストーリーをという文脈を与える。(つながり、関係)
- ・ エッツイー、ザッポス、エアビーアンドビー、ゴープル・コム、マイシェフ、ザ・ハブ、タスクラビット、ゾーパ、アクシュ、キックスターター、キャンプファイヤー、ネイバーグッズ、カウチサーフィン、多手山プロジェクト、ローカル・モーターズ、FACTORY SAGA、(英文サイトにも着目)
- ・ 次の勝者は多くをつなげてしまった人。プラットフォームを握る。人間中心に考える。
- ・ あらゆる産業にウェブを加えることで地理的・空間的制約がなくなり、ビジネスとして進化。
- ・ 組織のマネジメントの問題。
- ・ 使い勝手。
- ・ 社内がオープンでないと世の中のオープンに対応できない。ウェブ的視座。部署や人を接合していく人物。ヒューマンハブ。さまざまな動向に敏感で文脈を編む役割。
- ・ 人間中心の大きなデザイン。
- ・ 高度な分業からテクノロジーは全人格化している。万能化。アマチュアには勝てない時代。
- ・ 教育。高齢化ソリューション。
- ・ スローウェブ。コンフォート。
- ・ 水に飛び込む。コツコツ改修。マッシュアップ(違うものをくつつける)
- ・ ブログを書き、リアルへも発信。足跡をオープンに。
- ・ リアル社会の課題解決のためにテクノロジーとネットワークを買うよう。リアルとウェブを織り交ぜたビジネスモデルが主軸。
- ・ のめり込み、理解し、利用できた者だけが次のステージに進める。理解、習熟、経験。
- ・ 製品・サービスコミュニケーションの組み合わせ。

個人的にも、仕事の面でも、ヒントが多くあった。

熊代亨 『若作りうつ』社会』(講談社現代新書)

1975 年生まれの若い精神科医による「年のとり方」を考える話題の本。

- ・ 世の中はどこもかしこも若さ志向になってきた。
- ・ 年長者のアドバンテージが減ってきた。IT 時代の到来による「使えない年長者」と家事の自動化による「おばあちゃんの知恵袋」の役割の希薄化。
- ・ 戦後世代は親の世代はロールモデルではなくなった。民主社会のシニアモデルは世界でも欠落。
- ・ 成人、厄年、還暦などの通過儀礼は地域社会の中で意味があったが、現代の生活環境では機能しなくなった。
- ・ 人生の始めと終わりが病院になった。生や死が意識されなくなった。
- ・ 死や病の淵にある人に寄り添うべき医師は、病の克服に役割がシフトしてきた。
- ・ 年のとり方がわからない社会ができあがった。
- ・ 生物学的加齢と社会加齢のバランスが崩れやすく「若作りうつ」と背中合わせの社会になった。
- ・ ポケモン、ハオローキティ、アニメ、漫画などのクールジャパンは、換骨奪胎されたアニミズムの産物。日本は未熟社会の先頭を走っている。
- ・ 職業や居住地が自由になり、「私はこういう人間である」というアイデンティティが決まらなくなった。
- ・ 父親不在と緊密な母子関係による過干渉な家庭(母親的規範意識による抑圧)で育って、積極性や自己主張を培うコミュニケーション体験は不足している。
- ・ 持てるもの同士の強いつながりと、持てないもの同士は連帯できず、孤独の度をふかめていく。
- ・ 社会的加齢を進めるための、年長者と年少者が接点を持つ機会がなくなった。
- ・ 「若作りうつ」社会や「個人の自己実現」人生とう社会は、「年功序列」人生や「家や国のための人生」と同じくおかしい。「老いることも人土」であり、「後進の成長も喜び」であるはずだ。

どのように年をとるべきか、その提言。

- ・ 年をとるごとに少しずつ、自分の年齢感覚やライフスタイルをずらしていく心持ちをもっておきたい。
- ・ 単一解を規範とするのではなく、誰の何を足し、誰の何を引いていくのかを考えていくと理想像がみえてくるはずだ。
- ・ 身近な年長者・年少者とのコミュニケーションを大切にし、学びあっていくことがいちばん有効な処方箋かもしれない。世代間コミュニケーションを大切にする人を少しでも増やすと、社会全体の年のとり方も変わってくる。世代間コミュニケーションに希望や可能性がある。

吉村昭「彦九郎山河」(文藝春秋社)

吉村昭は、前野良沢を描いた「冬の鷹」という逸書を書いた折に、親しかった高山彦九郎(1747-1793年)を知った。

「高山彦九郎日記」全五巻を参考に書いたのが「彦九郎山河」(文藝春秋社)である。

細井平洲を師と仰ぐ高山彦九郎は、足利幕府以来の武断政治を仮の姿とし、朝廷による文治政治が日本本来の政治の姿であるとの確信を持っていた。

そのことは徳川幕府に対する疑念となっており、反幕の思想であった。

この考え方は日本国内に深く浸透し「尊王攘夷」という思想を産んだ。それが明治維新に連なっていく。

この反幕の思想家は幕府の追求にあって、最後は自刃で命を断つ。

彦九郎は、自らの天命を背負って、日本中の同学の徒を訪ねる旅に暮らす。

蝦夷地に入ろうとしたが果たせなかったが(司馬遼太郎は松前に渡ったとしている)、北は津軽から、南は薩摩まで恐るべき健脚をもってくまなく歩き続けている。

この旅は風呂敷の中に筆立て、硯、手ぬぐい、半日の食料などが入っているだけであつた。

「彦九郎山河」は、その足跡を丹念に負った書物だ。

当時、東海道五十三次は15日、ゆっくりいくと一ヶ月かかった。九州までは二ヶ月近くかかった時代だ。

歩いた距離と、会った人の数、そしてほとんどの人が彼の人柄と学問に魅せられていることが描かれている。

先日訪ねた高山彦九郎記念館では「高山彦九郎 五千人の交遊録」という企画展をやっており、公家、儒学者、無名の人々などその交遊の広さに驚いた。高山は今で言うネットワークカーだったのだ。ネットワークをつくり、つなげながら、自らの思想を練り上げ、日本の中に伝播していった人である。知的武者修行でもある。

この本の中では、江戸中期の東北の姿が克明に描かれている。

浅間山の爆発以降に襲った天明の飢饉の惨状が凄まじい。

津軽領では男女8万7千2百人が餓死。その数は領民の3分の一。それどころか半ばは飢え死にした。

青森では4千軒あつたが、火災と飢饉で千軒にみたぬ家数になった。

内真部という村ではひとり残らず死に絶えた。

ついには人に肉を食うまでになった。親は子を、子は親を。人肉にまさる味はない。墓地を掘り起こしたあと。

こういった惨状は、武断政治の結果であると彦九郎は思う。

京都では、幕府におびえる公家たちを励まし、王政復古に向けて強い刺激を与える。彦九郎は彼らの思想を指導する立場になっていく。

光格天皇が父・展仁親王に譲位後の称号である上皇の号を贈ろうと考えた。このときの幕府は松平定信が老中だったが、それを認めない。

この尊号問題は朝廷と幕府のどちらも譲れない大きな問題となっていた。

これに薩摩藩の力を借りようとして彦九郎が旅をする。厳しく検問する薩摩にはなんとか入れたが、二分する藩論の中で目的を果たせなかった彦九郎は九州を彷徨う。そして最後は久留米で自刃して果てる。

「朽ちはてて身は土となり墓なくも 心は国を守らんものを」

この旅の途中に、豊前中津藩で長く滞在している。12月28日から3月19日まで3ヶ月近い逗留だった。

土地の歴史。そこで善行をした人の魂を認め、褒め、それを書き残す。

その土地の優れた人を掘り起こす。親の敵を討った人、農業のやり方を発明した人、洪水を防ごうと工事をした人。神社の歴史。

高山彦九郎は質問し、その土地のよいところを引き出す人だった。だから誰もが彼を信頼する。

それが同志のネットワークとなって、影響を与えていった。

朝廷が王政復古を宣言したのは、自刃後74年後だった。彦九郎の種が花開いた。

高任和夫「依願退職」(講談社)

この人は私より4つほど上で、東北大法学部を出て、三井物産に入社。作家とサラリーマンの二足のわらじを履き、50歳で27年勤めた企業を退職し作家活動に専念というキャリアだ。

39歳で最初の本、42歳で2冊目の本、、、。

私のキャリアにも似ているので親近感をもっている。私のビジネスマン向けの本を新聞で取り上げてくれ、共感したと書いてくれたこともある。

以下、共感できるところと私の感想。

- ・ サラリーマンが上司に恵まれるのは、一生を通じて2割か3割。(その通り！上司は悪いのが普通と思うべきだ。よければ幸運ということ。)
- ・ 私の会社生活は、さまざまなものを蓄積しながら、自分が本当にやりたいものはなにかを探しつつ生きてきた人生のようだ。(企業は学校だ！)
- ・ 人事は業病。(人事をやれる立場になったら、邪念を捨てて権力を行使しなければならない。)
- ・ 出ない杭は腐る。(打たれるか、腐るか。どの選択をするか。)
- ・ 会社は、意欲ある人にとっては、孵卵器の役割を果たす時代になった。(会社と

いうのは実務で学びながら起業・転職などの準備ができるありがたい組織だ。)

コラムを書くことになって困ったのはネタを拾うことであったようだ。メモ帳にヒントをメモする。そうすると、それまでまともにモノを見ていなかったことに気づく。ぼんやりと生活していたということだ。見る、聞く、感じる、考える、書く、、、。

私も日経ビジネスの編集者が当時住んでいた仙台に来て「図解コミュニケーション」をテーマとした連載を依頼され1年半ほど続けたことがある。月1回だが、常にネタを考えていた記憶がある。気合を入れて毎回書き続けたら、それを読んだ単行本の編集者から執筆を勧められた。

その年配の編集者は「あなたは、本当に書くべきことをまだ書いていない。図解の本質は考えることだよ。そこを書きなさい」と言われた。その通りだった。ど真ん中に球を投げ込まれた感じがした。そして取り組んだ結果が「図で考える人は仕事ができる」(日経)だった。そこから私の人生は一変したのだ。今でもその日経の名編集者には感謝している。

この本の最後に同じく作家の江波戸哲夫さんの解説が載っている。

この人も会社を辞めて作家になった人だが、「辞めてよし、辞めなくてよし」と言っている。

同じようなキャリアをたどった人のエッセイは共感に満ちている。

国立編訳館,蔡易達,永山英樹「台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る」(雄山閣出版)

最近入手した「台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る」の83ページから84ページにかけて八田與一の名前が出ている。

農業改革の項で、「水利工事を行い、耕地灌漑面積を大きく増加させた。その中でも有名なのが、八田與一が設計、建造した嘉南大?で、灌漑面積は15万甲に達した。」と讃えている。

そして「嘉南大?の水源基地工事図」として写真を載せている。

以下、参考情報。

- ・ ダムの送水駅の脇に「八田技師記念室」が平成12年に開館。
- ・ 金沢市ふるさと偉人記念館に八田與一技師を顕彰する常設展示コーナーが平成16年に開設。
- ・ 台湾の人のいう日本精神。「今日の台湾の発展は日本精神のおかげです」。嘘をつかない。不正なお金は受け取らない。失敗しても他人のせいにはしない。与えられた仕事に最善を尽くす。

古川勝三「台湾を愛した日本人―土木技師・八田與一の生涯」(創風社出版)

若干 32 歳の若き技術者が今日の金額で五千億円の巨額工事「東洋一の巨大ダム建設」を指揮した物語。

台湾における唯一の日本人の銅像が建っている。

著者は 1944 年生まれ。愛媛大卒業後、教職の道を歩む。36 歳から 3 年間台湾省高雄日本人学校に勤務。

このとき八田與一を知る。47 歳、「台湾を愛した日本人」で土木学会著作賞を受賞。松山市の中学校校長を歴任した後、定年退職。今は「台湾を愛した日本人?―蓬莱米の父・磯永吉 蓬莱米の母・末永仁を取材中。

一つの峰を越えて、次のテーマが浮上した人の軌跡がここにある。

台湾はもともと無主の土地であった。

- ・ オランダ人が日本、中国、バタビアの中継貿易基地として、1624 年にゼーランド城とプロビデント城を建設し、以後 37 年間の植民地支配を行う。
- ・ 1661 年、鄭成功が清朝打倒の基地として台湾に侵攻しオランダ人を降伏させる。子孫による支配は 22 年間。
- ・ 清朝は 212 年間にわたり台湾を支配する。
- ・ 1894 年、日清戦争で勝利した日本は下関条約により台湾と澎湖諸島を譲り受け、日本初の植民地となる。
- ・ 1945 年、第二次大戦で日本敗北。中国共産党から追われた国民党が台湾に上陸し中華民国台湾省となる。

日本植民地時代の台湾は、当初は土匪との戦いに明け暮れたが、第 4 代総督・児玉源太郎と後藤新平民政長官時代に、大成功をおさめ、以後台湾は急速に近代化する。

その台湾近代化の過程での一人の若い人物が、大きな仕事をする。それが東洋一のダムをつくった八田與一である。

このダムによって洪水と干ばつと塩害の三重苦にさいなまれていた不毛の大地嘉南平原は緑の沃地に変わり、台湾最大の穀倉地帯となった。香川県に匹敵する感慨面積である。

この工事は 1920 年に開始され、1930 年に完了する。10 年の歳月を要した。総工費は現在の価値で 5000 億円以上。

計画時 32 歳だった八田與一はこのとき 44 歳になっていた。

農民の収入が増え、生活が豊かになり、粗末な家がレンガ造りになるなど衣食住は急速に改善された・

人造湖・珊瑚潭を見下ろす丘に八田與一の銅像が建っている。物思いにふける座った像である。

中華民国が支配することになった台湾では、日本人の銅像の類は撤去されたが、この八田與一だけはかろうじて残った。今残る唯一の日本人の銅像である。

八田與一は 1942 年にフィリピンに向かう途中アメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、東シナ海で死亡。享年 56 歳。その 3 年後、妻の外代樹がダムの放水路に投身自殺。夫婦の墓がある。

中国に「飲水思源」という言葉がある。水を飲む時には井戸を掘った人のことを思い感謝して飲むという意味だ。

まさに台湾に人にとって、八田與一は井戸を掘った人となった。

- ・ 人類のためになる仕事をし、後の世の人々に多くの恩恵をもたらすような仕事をした。
- ・ 大きな仕事は、30 代か 40 代までに行わなくては駄目だ。
- ・ 過去の文献や事例を徹底的に調べ上げ、それをもとに現場に合う合理的な方法を組み立てていく。

1998 年、台湾の歴史教科書「認識台湾」に八田技師が取り上げられる

2000 年、烏山頭ダムに八田技師記念室が開館

2001 年、「台湾を愛した日本人」の台湾語版が出版

2004 年、金沢市ふるさと偉人館に常設展示コーナー

3・11東日本大震災の時に、台湾からは 200 億円を超える義捐金が届いた。この額は世界最大だった。

その陰には、八田與一のような素晴らしい日本人の貢献の蓄積の歴史があったのだ。

伊藤潔「台湾一四百年の歴史と展望」(中央公論社)

1971 年ニクソン大統領訪中後に、台湾は国連脱退。1979 年台米断交。同年台湾関係法成立。

1988 年蔣経国総統・国民党主席死亡。憲法の規定で李登輝副総統が総統に昇格。台湾人で初めて国家元首に。

蔣経国は李登輝を後継者と考えてはいなかった。お飾りの副総統だったが、国民党は主席に選出した。

李登輝は 1923 年生まれ。旧制台北高校、京都帝大、在学中に学徒出陣、台湾大

学卒。米国アイオワ大学で修士、コーネル大学で博士。1972 年行政院政務委員(国務大臣)、1978 年台北市長、1981 年台湾省政府主席。1984 年副総統、総統就任は 65 歳。

李登輝は台湾人の絶大な支持と期待を支えに権力を掌握していく。二期目には蒋介石の次男・蔣緯国の副総統就任を強硬に阻む。党、特(情報)、軍、そして連戦を行政院長に起用し政も掌握した。

李登輝の民主化改革

- ・ 党が国家の上位であってはならない。
- ・ 軍は国家の軍でなければならない
- ・ 一党独裁であってはならない
- ・ 実務外交を推進すべきである
- ・ 中国政府・中共政権と対立してはならない
- ・ 政治犯の存在は民主国家の恥辱である

1992 年の初めての総選挙で李登輝率いる外来政権の国民党は、初めて台湾統治の正当性を得た。

田中光顕「最後の志士が語る 維新風雲回顧録」(河出書房新社)

この本の冒頭に司馬遼太郎が「歴史の証言」というタイトルで短い文章を書いている。

幕末には長州の高杉晋作、その後は土佐の中岡慎太郎、維新後は長州系の傍役として数々の要職についたと書き「いわば典型的な二流志士」であるとした。それゆえに西郷、木戸、大久保、坂本など一流の志士とはべつな視点を持ったとしている。

この本自体は、語り下ろしのような筆致で維新までの動乱を事件と人物をたどりながらの体験談という形になっている。尊王攘夷という思想的な話題はなく、もっぱら事件史である。

この本の中で興味深かったのは、高杉晋作、坂本龍馬などの英雄の実像とその人物の活写である。

最も心酔していた高杉に関する言葉。

- ・ 「兵に臨んでまどわず、機をみて動き、奇をもって人に勝つものは、高杉東行、これまた西の一奇才」と後に陸援隊を率いた中岡慎太郎が語っている。
- ・ 「孫子に、大将巖を先とすとある、、」と高杉は奇兵隊を率いた考えを述べている。

高杉は王陽明全集を読んでおり、王陽明の詩を田中に紹介した。

- ・ 「四十余年、舜夢の中。而今、酔眼、始めて朦朧。知らず、日はすでに亭午を過

ぎしを 起って高樓に向かって、暁鐘を鐘く」

- ・ 「おおよそ英雄というものは、変なき時は、非人乞食となってかくれ、変ある時に及んで、竜のごとくに振舞わねばならない」
- ・ 「男子というものは、困ったということは、決していうものじゃない。、、、平生はむろん、死地に入り難局に処しても、困ったという一言だけは断じていうなかれ」と堅くいましめられたそうだ。田中の孫の田中光孝が「やかましくいわれたことに「困った」という言葉を決して使ってはならない、ということがありあす」とも書いているから、座右の心構えであったのだろう。

木戸孝允の「世の中は桜の下の相撲かな」という言葉も含蓄がある。

桜の下の相撲では、勝ったものには花が見えない。仰向けに倒れたものは花をみることができる。

国事に奔走したものはこの倒れたものなのだとことだろうか。

85歳の光顕は「幸いにして生きながらえている私どもの事業としては、国家の犠牲となって倒れたこれら殉難志士の流風余韻を顕揚することにつとめねば相成らぬと深く考えている」と書いて終わっている。

昭和43年(1968年)の日付で孫によれば、田中は志士たちの遺墨、遺品、写真などを収集し、各命日にはその遺墨を出して香をたき、冥福を祈っている。それらが散逸しないように、高知の佐川文庫、大洗の常陽明治記念館、東京都北多摩郡桜ヶ丘の多摩聖蹟記念館に寄贈したのである。

「二流の志士、そして最後の志士」の視点と人生観が興味深い。

紀田順一郎「書物との出会い」(玉川大学出版部)

先日、神保町の古本屋街で買った本。

1976年発行の本だから著書の紀田先生も41歳の頃。確かに本に出ている写真は随分と若い。

紀田順一郎先生を新百合ヶ丘のご自宅に取材したのは、1980年過ぎだった。当時は老成していると思ったが、先生はまだ40代の半ばであったということになる。商社在職中の本を読んだり、書いたりする様子を興味深く聞いた記憶がある。

- ・ 選択眼を養うことだ。そのためには回り道のようなのだが、読んだら必ず読書録をつけることである。一冊の本について、あくまで自分の関心を大切に、その線に沿って評価をくださうにする。(ブログに書くという習慣を大事にしている)
- ・ タテに並べたその前方に、数冊ずつ横に積みあげる方法をとることだ。(すでにやっている方法だが有効)
- ・ つねに探求書が十冊も二十冊もあって、手帳などにリストアップされているというところに、読書に最も必要とされる「関心の持続」と「ユニークな問題意識の展開」

が保証される。つまり、主体的な読書の姿勢がつくられる。(手元には常に読みたい本が用意している)

- ・ 過去の人物の体温にふれ、肉声に声を傾ける。これが歴史の読み方である。、、、すぐれた通史、時代史、史伝、回想録に接するのが、歴史そのものを学ぶ近道であろう。(できるだけ自伝、回想録、伝記、日記などを読むことにしている)
- ・ 自分の関心領域やテーマを持っている人は、およそ退屈ということを知らない。(読むべき本がだんだん多くなって時間が足りない)

佐々木実「市場と権力「改革」に憑かれた経済学者の肖像」(講談社)

小泉政権で構造改革に突進し、第二次安倍政権で復活を目指す竹中平蔵という人物を分析した好著。

第12回新潮ドキュメント賞受賞作品。

「自分の思想と他人から受けついで知識との区別は無神経」「人のものを取り込んでいく」仕掛け人・オルガナイザー・エディターとしての腕前」「シンクタンクという装置は、政治に近づくための手段であり、大きな報酬を受けるための収入源だった。」「税疑惑、4年間住民税を払わなかった。」「自民党と民主党の両方のブレーンを組織して、どちらに転んでも経済政策が自分の手に落ちるよう細工」、、、、。

不良債権処理。

- ・ 三井住友銀行の大規模増資を行ったゴールドマンサックス。ゴールドマンサックスとの特異な契約。竹中の金融行政はゴールドマンサックスを日本に呼び込むことだった。
- ・ りそな銀行の経営破綻。繰延税金資産問題で監査法人を使って銀行を破綻させ、2兆円の公的資金投入。自民党への融資の増大がおこった。
- ・ 盟友・木村剛は論功行賞で新設の日本振興銀行を手に入れる。その銀行の破綻時に木村は自分自身の財産だけを守る。
- ・ 東京地検特捜部を使って、資料隠しという些細な理由でUFJ銀行を巨額赤字に追い込み、東京三菱銀行に吸収合併させ消滅させる。
- ・ りそな破綻で生じた利益は竹中グループで山わけされている。

郵政民営化。

- ・ 財政投融资制度の弊害である資金運用部への預託はなくなっており、民営化する必要はなかった。
- ・ 350兆円の郵政マネー。金融(郵貯と簡保)の分離で市場に売却。
- ・ 自民党政府はマッキンゼーとコンサル契約を結んでいた。

- ・ 「かんぽの宿」の売却先は宮内義彦のオリックス不動産。1000 億円異以上の実勢価格を 109 億円。

改革利権。

- ・ 大量のアメリカ国債購入でイラク戦争のブッシュ政権の戦時経済を支えた。-
- ・ 産業競争力会議で労働市場の規制緩和を主張。竹中はパソナの会長。
- ・ ミサワホームをトヨタホームに変えて、実兄の竹中宣雄を社長に抜擢。

以下、登場人物。

佐貫利雄。井上宗迪。ケント・カルダー。榊原英資。長富祐一郎。宇沢弘文。高橋伸彰。鈴木和彦。植田和男。ローレンス・サマーズ。ジェフリー・サックス。本間正明。浜田宏一。伊藤隆敏。船橋洋一。香西泰三。加藤寛。加藤紘一。藤田田。笹川陽平。吉田和男。伊藤元重。大田弘子。堺屋太一。中谷巖。竹内佐和子。樋口廣太郎。日下公人。牛尾治朗。中川秀直。リン・ウィリアムズ。ローラ・タイソン。鳩山由起夫。島田晴雄。八代尚宏。北岡伸一。島聡。宮内義彦。リチャード・カップ。グレン・ハバード。木村剛。岸博幸。前田晃伸。西川善文。川本裕子。歳川隆雄。高橋洋一。ポール・クルーグマン。村上世彰。三澤千代治。竹中宣雄。三木谷浩史。南部靖之。、、、。

古市憲寿「だから日本はズレている」(新潮新書)

29 歳の社会学者の新刊。

この本でいちばん面白かったのは「2040 年の日本」だ。

相対的貧困率は 40%だが、人々は幸せそうだ。階級社会は満足度を上昇させた最低賃金法の撤廃、公的年金の廃止の強行採決時の反対運動に 97 歳の田原総一郎が満足。「ハッピーサプリ」は移民相当職の労働者に配られる。富裕層はスマートドラッグを服用し脳が若々しい。人口は 1 億人を割った。中流層の日本脱出が始まっている。まともな仕事が減ってきたからだ。中国では安全なトリウム原発によって電力は安定供給されている。これはメルトダウンが原理上起きない新世代原発だ。没落した中国は首都を上海に移し都市国家連合として再興を目指している。千葉農業都市が注目されている。地方のコンパクトシティを一步出ると荒野が広がっている。東京は活気にあふれているがほとんどが老人だ。平成生まれ初の都知事の朝井リュウの「何者(老人編)」。団塊世代は 90 歳超。救急車や消防車はお金を払わないとこない。公立学校からは体育や音楽が姿を消した。一番売れた本は三浦知良の「死なないよ」。

こういうストーリーで小説仕立てにして書いてもらいたいものだ。

- ・ ソーシャルメディアを活用した企業バッシングにおびえることはない。この共感
は冷めやすい。ソーシャルメディアはガス抜き装置となって、大規模な不買運動

の可能性は抑圧されている。

- ・ 今の 20 代は豊かな時代の落し子だ。ハングリー精神はないようにみえるが、社会に対する関心は高い。
- ・ 「ノマド」は日本で働く会社員の見果てぬ夢だ。
- ・ 天は人の上下を造らないが、学問が人の上に人を造る。
- ・ 中小企業の有効求人倍率は 3.27 倍。欧州に比べたら日本は若者に優しい社会だ。
- ・ 若者は格差社会の当事者、つまり弱者であるとは思っていない。貧困は未来の問題である。
- ・ 若者は忙しい。暇な高齢者は社会運動にはまりやすい。その典型が原発問題だ。それは新しい悲劇で、一種のお祭りである。
- ・ 若者の静かな変革に注目。大きなことを言わないが、粛々と身の回りの 100 人、1000 人を確実に幸せにする。フローレンスやマザーハウス、。
- ・ 若者の生き方を具現化したのがシェアハウス。家賃 3 万で生活費は 5 万。仕事を辞めて月に数回日雇い労働するだけであとは自分の好きなことをしながら暮らす。固定費を減らし、家にいる友達といつでも遊べる。しかし格差によるフィルタリングはある。シェアハウスは注目を集めていくだろう。
- ・ コンサマトリー（自己充足的）。「今、ここ」にある身近な幸せを大切にする感性。手段的な行動をしない。20 代の生活満足度は 78.4% と高い。
- ・ 社会のために役にたちたいと考える 20 代は 66%。1975 年以来最高の数値。
- ・ 「今、ここ」にいる自分や仲間を大切にする。生きやすい環境をつくる、それが社会をよくすることになる。優しい革命。

沖大幹「東大教授」(新潮新書)

現役の東大教授が書いた東大教授論。生産技術研究所。専門は水文学。1964 年生まれ。

年収、学歴、適性、勤務、専門、キャリア、入試、教育、研究、出世、論文、会議、交際、政府とマスコミ、、、などをわかりやすく説明している。

- ・ 1300 人の教授の年収はひと声 1000 万。総長は 2 倍、理事は 6 割増し。組織の長は理事並み。
- ・ 資格は、その専門分野で、日本でリーダーとなれる人物。
- ・ 身分が保証された自由人。目先の利害や権力動向に左右される必要がない。話を聞いてくれる人がたくさんいる。
- ・ 非常に優秀な学生と常に接してられるのが得がたい特権。

「東大教授」を一般的な大学教授に置き換えてもあまり違和感がなくさらっと読めた。

加瀬英明 「日本と台湾—なぜ両国は運命共同体なのか」 (祥伝社新書)

外交評論家で、福田・中曽根内閣で首相特別顧問で対米交渉にあたった加瀬英明の 2013 年の著書

1936 年生まれの加瀬は台湾を「もうひとつの日本」と呼ぶ日本随一の知台派で豊富な人脈の持ち主。

- ・ 台湾は中国大陸から 150 キロの東シナ海にある。面積は九州の 85%。1960 年代まではポルトガル語の「美しい島」という意味のフォルモサと呼ばれていた。1624 年にオランダ人が城塞を築いた時に、先住民の部族名か地名である「タイユアン」がなまって台湾となったという説がある。
- ・ 牡丹社事件を機に 1874 年に清国が琉球の日本帰属を認めるのと引き換えに台湾が清国に属することを日本は認めた。この事件で清国は日本に 50 万両の賠償金を支払った。その 20 年後の日清戦争で台湾は日本領になった。日本統治は 50 年に及んだ。
- ・ 台湾で「日本式」といえば、律儀、約束を守る、騙さない、信用できる、マナーが正しい、という意味である。
- ・ 本省人とは台湾人、外省人とは中国人。
- ・ 中華民国は人口 2100 万人。GNP 世界 20 位。外貨保有は世界二位。
- ・ 八田與一は東洋一のダムをつくり嘉南平野の土地を肥沃に、100 万人の農家の暮らしを豊かにした。
- ・ 台湾の近代化に尽力した 10 人の日本人。後藤新平、新渡戸稲造、八田與一(台湾外務省に銅像)、羽鳥又男(オランダ時代の遺跡を修復)、浜野弥四郎(近代水道を敷設した都市の医師)、新井耕四郎(紅茶産業の織や、鳥居信平(干害)、松本幹一(電力事業の父)、磯永吉・末永仁(蓬莱米)
- ・ Z 旗とは、船舶信号の A-Z の最後の文字。もう後がない、という意味で東郷長官が使った。
- ・ 「犬が去って、豚が来た。犬は安全を守ってくれた」。犬は日本、豚は中国。
- ・ 1947 年の「二・二八事件」。国民党軍が 2 万 8 千人を殺害。
- ・ 1950 年の朝鮮戦争の勃発で台湾がアメリカの極東における防衛戦に組み入れられた。不沈空母(トルーマン大統領)。蒋介石は救われた。
- ・ 中国の龍の爪は 5 本。朝鮮とベトナムは 4 本。日本は 3 本。
- ・ 「中国の夢」は世界の悪夢。
- ・ アメリカが中国に憧れてきた理由は、巨大な市場とキリスト教の処女地だったか

- ら。
- ・ 1978 年トウ小平来日「尖閣は 1972 年の合意に基づき棚上げ」と提案し、そのような了解はないと否定すべきだったが、受け入れた。1992 年に中国は「領海法」を定め尖閣を自国領土とし「棚上げ」を反故にした。2012 年に野田内閣が尖閣を国有化宣言し、反日暴動が起こる。
 - ・ 南京大虐殺。30 万人という数字があるが、検証の結果最大でも2－3万人。
 - ・ 馬英九総統は2008年に勝利、2016年までの8年間で任期。中国への融和策。台湾が独立したら、国土の60%を占めている少数民族が分離独立を求め、中国は解体する。
 - ・ 2300 万人の人口のうち、200 万人以上の台湾人と家族が、台湾企業が中国に投資して設立した会社で働き、生活。
 - ・ 李登輝政権は、国民中学校の国語教科書で「私たちはみな台湾人だ」と書き改めた。元は中国人となっていた。
 - ・ 中華人民共和国の国旗・五星紅旗は、大きな黄色い星が漢族。4 つの小さな星が満蒙回蔵。回はウイグル。蔵はチベット。
 - ・ 馬英九政権は、ECTA(兩岸經濟協力枠組協議)を進めている。自由貿易協定である。2013 年 6 月、金融、医療、電子商取引などの分野で市場開放する「サービス貿易協定」に調印した。台中經濟の統合という危ない橋を渡っている。しかし8割以上が中台統一を欲していない。
 - ・ 2013 年4月、日台漁業協定が締結された。尖閣諸島周辺の日本の排他的經濟水域の一部で、台湾漁船の操業を認めた。

宇都宮靖 「鳶の笛―黒田官兵衛と宇都宮一族との戦い」(梓書院)

中津の黒田官兵衛資料館で購入した本。母の「邪馬台」同人仲間であった宇都宮先生の著書である。

官兵衛は謀をもって宇都宮一族を滅ぼし、豊前の領主となった。この宇都宮一族の末裔がこの著者だ。

秀吉の九州征伐に官兵衛は軍艦として参戦し平定する。

秀吉は官兵衛に豊前国を賜った。この豊前には鎌倉時代から 400 年にわたりこの地を治めてきた宇都宮一族がおり、その代表が宇都宮鎮房であった。

宇都宮は四国今治に 12 万国賜ったが、最終的に秀吉の命に従わず、一揆を起こす。

官兵衛の子の黒田長政は官兵衛不在のまま、この一揆と戦うが手痛い敗戦をする。

官兵衛は秀吉により「奸計をもって謀を考えよ」との下知を受ける。宇都宮との講和をはかり長政と鶴姫との縁組を企画した。

その祝宴のため、宇都宮一行は一部を合元寺に残し、中津城内に 15 人程が入った。

その酒宴中に黒田方の野村太郎兵衛が宇都宮鎮房に斬りかかった。長政は刀を抜き切りつけた。

場内は乱戦となった。合元寺まで逃れた侍たちは、黒田方に切り殺された。この血はこの寺の壁に飛び散り、何度塗り替えても血がにじみ出てくる。

そこで赤く塗られた。この合元寺は赤壁寺の別名がある。豊前地方誌によると、合計 20 名が死んでいる。子の朝房も肥後で殺害されている。

宇都宮氏は深く地方の民心を得ていた。人々は異口同音に黒田氏を恨みその家の断絶を祈った。その呪詛の祭りは福沢諭吉の時代まで 200 年以上、1 年も欠かさず行われた。

百年規模の祭りは大規模で、明治年間に 300 年祭、1982 年(昭和 62 年)には鎮房の 400 年祭と遠祖信房の 800 年祭が同時開催された。

黒田家では、長政のひ孫の後には後継男子が生れず養子に頼った。また 6 代連続で後継者が若死にするなど、黒田家に後嗣が生まれることはなかった。人々は崇りだとうわさした。

カズオ・イシグロ,ダロン・アセモグル,クレイトン・クリステンセン,リチャード・フロリダ,フランシス・フクヤマ,クリス・アンダーソン,シーナ・アイエンガー,大野和基 「知の最先端」(PHP 研究所)

レゴのブロックをつなぎあわせ、あるイメージをかたちづくっていく。それが世界を創造する力である。そうした能力は真の知性だ。「知の体系」を身につけるには「知の最先端」という高みに立つ人々に触れるのが最短距離だという考え方で、彼らにインタビューしまとめたのが本書。

- ・ フランシス・フクヤマ
中国は時間がたつにつれて正統性の危機に直面する。
- ・ ダロン・アセモグル
中国にイノベーションは起こせない。先進国の後追いはどこかで必ず行き詰まる。
- ・ クリス・アンダーソン
いまの企業にもっとも必要なのは、コミュニティ。大切なのは注目度と評判という非金銭的な指標。人々が望む情報を望ましい形式で提供できるかが重要。
- ・ リチャード・フロリダ
クリエイティブ・クラスとは、科学者、エンジニア、建築家、デザイナー、教育者、アーティスト、ミュージシャン、そしてビジネス、金融、法律、医療などの分野で

独自の判断に基づいて複雑な問題の解決に取り組む知識労働者。彼らが脱工業化した都市において経済成長の推進力となる。ハーバード卒業生の進路が金融から、医療・バイオに移っている。グローバルシティの勃興現象。英語が世界の中心。

- ・ クレイトン・クリステンセン

持続的イノベーション。世界観を枠組み化するのは、共通の言語・方法論の構築が不可欠。

- ・ カズオ・シグロ

村上春樹、世界中の人が彼を日本人と考えることができない。彼はリアリズムの外側で書いている。彼のスタイルが世界中で受け入れられている。私のプロジェクトは、自分の日本が脳裏から消える前に、小説に安定的に書き留めておくというものです。

2014年5月

百田尚樹「プリズム」(幻冬舎文庫)

久しぶりの百田尚樹ワールドを楽しむ。

「プリズム」(幻冬舎文庫)を読了。

毎回全く異なった作品を創作するという志をもったこの作家は、今回は「多重人格」をテーマとした。

光には色はないが、プリズムを通すと、屈折率の違いから虹のように様々な色に別れる。人間の性格も、光のようなものかもしれない。

普通は様々な面を持ちつつも人格は統一されているが、なにかの原因(この場合は異常な虐待)で様々な異なった人格がひとりの人間の中に出現する。

ひとりの人間の肉体をかわるがわる支配する。異なった人格同士は互いに知っていたり、知らなかったりする。多重人格の病名は解離性同一性障害だ。

32歳の既婚の女性主人公はその中の完璧な理想の男性と恋をする。彼は実際には存在しない男である。報われるはずのない恋である。最後は統一された人格の中にその相手は吸収されていく。報われたのか、報われなかったのかは判然としない。

一つの肉体の中に宿るいくつもの人格の生成と消滅が深い共感とともに描かれている不思議な物語である。

この本の末尾に「参考文献」が並んでいる。ここに創作のヒントがある。

多重人格に関する本が20冊と、早川書房のミステリー小説7冊である。

本文中の多重人格(解離性同一障害)に関する登場人物による的確な説明は、20冊の本に依っている。

また、物語自体はミステリー小説をヒントにしていると思われる。

「24 人のビリー・ミリガン」「ジェニーのなかの 400 人」「17 人のわたし ある多重人格女性の記録」「私」が、わたしでない人たち」「記憶を書きかえる—多重人格と心のメカニズム」「シビル—私のなかの 16 人」「ボックス！」「影法師」「モンスター」など、この作家のエンターテインメント性の濃い未読作品を読んでいきたい。

後藤正治「清冽—詩人茨木のり子の肖像」(中央公論新社)

茨木のり子は凜とした人だった。「後藤正治「清冽—詩人・茨木のり子の肖像」から、以下、関係した人たちの茨木のり子の人物評をピックアップしてみる。

「宝塚の男役のごとく」「背筋の伸びた、凜々とした風情のなかにまたふんわりとした感触があって、素敵な人だな」「あまりにも、ちゃんと生きていこうとする日人である」「男運に恵まれた人だった」「古代ローマのギリシャ彫刻を見るような」「ずばっと決断し、立つときは独り立つ。潔さ」人としての度量があって、女性にみられがちなネチネチしたところがない。気性は男性的でスカッとしている」「背筋が伸びて立ち居振る舞いは凜としている。文は人なり、であった」

江南「蔣経国伝」(同成社)

江南「蔣経国伝」を毎日少しずつ読みすすみやっと読み終わった。

約 30 年前の 1983 年現在で、台湾の中国国民党の初代総統を長い間つとめた蒋介石(1887-1975 年)の伝記は台湾内外で 9 冊にのぼったが、後を継いだ息子の蔣経国(1910-1988 年)の伝記はこの本 1 冊しか出ていない。

大陸で毛沢東(1893-1976 年)の中国共産党に破れた蒋介石は、大陸反攻が叶わず 1972 年に台湾で、89 歳で没した。

蔣経国の最初の総統の任期 6 年を経た段階で、台湾経済は発展し、民生も改善され、台湾の民主化も漸進した。政治はともかく二期目も経済は順調であり、中華民国を韓国・シンガポール・香港と並ぶ「アジア四小龍の一つ」と言われるまでになった。そして経国は 1988 年に没した。

副総統であった本省人(台湾人)・李登輝が後を継ぎ、2000 年までの二期 12 年の任期中に台湾経済は大いに発展を続けた。そして現在の馬英九総統の時代となっている。

台湾の台湾化を目指した蔣経国は、二期目の副総統に台湾人の李登輝を選んでいる。李は温厚で敵をつくらぬ性格であったことが選定の理由だった。経国が病没した場合の後継者として都合がよいという判断だった。この判断が難しい舵取りを要求される激動の国際政治情勢の中で、台湾がまとまって生き残っていく方向を決定づけ

た。

この大著「蔣経国伝」の著者・江南は、1984年に政治的トラブルに巻き込まれてサンフランシスコで暗殺されている。この後、蔣経国は「蔣家から後継者を出さない」「軍事統制をしない」と宣言し、それを実行した。戒厳令を解除し、独裁制度、報道規制を解除し、台湾の民主政治を軌道に乗せたのである。

この伝記を読むと、中国時代、台湾時代を通じて、権力闘争に明け暮れた生涯だったことがわかる。

ソ連での学習期間を経て、中国共産党との戦いの時代、台湾での権力を握るための党内闘争の時代など、常に父・蒋介石とともに戦いの日々を送っている。

伊藤潔「台湾—400年の歴史と展望」(中公新書)

司馬遼太郎から好著といわれた本である。

50年に及ぶ日本の植民地時代で19人の総督が赴任した。第4代総督の児玉源太郎と後藤新平民政長官が赴任した1898年から1905年度にかけて、台湾の財政独立を実現した功績は大きい。歴代総督には、乃木希典、樺山資紀(白洲正子の祖父)、明石元二郎、田健次郎(田英夫の孫)らの名前がみえる。

日本の台湾統治の最大の遺産は、教育であった。1944年時点の児童就学率は92.5%であり、帝国大学が設立され、化学分野のノーベル賞受賞者も出しており、医学分野の世界レベルである。

戦時下では、1944年に台湾でも徴兵制が敷かれた。戦争に従事した台湾人は20万7183名で、戦死・病死者は3万304名である。当時の台湾人口が600万人だったことを考えると大きな数字である。軍人、軍属、軍夫は、戦後には日本国籍を失ったことが理由で、補償は一切なかった。これは今尚問題として残っている。このあたりのことは、佐藤愛子「スニョンの一生」(文春文庫)を読むことにしたい。

「蔣経国伝」を書いた江南は1984年にサンフランシスコ郊外の自宅でこの出版をめぐり殺害される。蔣経国の次男・蔣孝武の命令で国防部軍事情報局が派遣した台湾のヤクザ組織の犯行であった。

1988年に蔣経国相当が死亡し、副総統の李登輝が昇格する。蔣経国は李登輝を後継者とまでは考えていなかった。「真面目で誠実」な人柄の安全度を買われたのであるが、蒋介石の次男・蔣緯国らの登用を場阻むなど改革を行い、着々と「特」「党」「軍」「政」の実験を掌握していく。1992年の総選挙で台湾史上初の外来政権である国民党政権に正統性が与えられた。李登輝政権は1996年まで続き台湾の民主化と「台湾化」を推し進めた。

今後の台湾の生存に関わる重要問題は以下のとおり。1993年の執筆当時。

中国との関係。国際社会での孤立の打開。国民党の一党独大と党営企業の解消。

国民党保守派への対応。産業動力の確保と公害問題の調和。

著者は1937年に台湾で生まれ「とう小平伝」「李登輝伝」などを書いている学者である。台湾を故郷とする人間として台湾が永遠に存在することを願い、「終章」を設けていない。そういう出自からくる思いの深さが全編にみなぎっている。

佐藤愛子「スニヨンの一生」(文藝春秋)

著者の佐藤愛子は1923年生まれ(大正12年)というから私の父と同じ年。この本は1987年に第1刷とあるから著者64歳の時の作品である。

「スニヨン」というのは、1918年台湾生まれの高砂族の名前である。

日本が台湾を植民地していた時代に彼は25歳の時に志願兵として日本兵になった。そのときにつけられたのは「中村輝男夫」という名前であった。

中村輝男は日本陸軍の南方作戦で高砂義勇隊一等兵としてモロタイ島で戦った。

日本の敗戦時に、台湾の国民政府は戸籍整理を行い、本人が知らないまま「李光輝」と名付けられた。そのとき28歳だった。

29年以上、モロタイ島の密林の奥で逃亡生活を送り、ついに発見された時、彼は57歳になっていた。

故郷の台湾に戻った時、10年待った妻・李蘭英(日本名・中村正子)は生活のために51歳の農夫と再婚していた。三角婚姻である。その第二夫(黄金木)、そして子供たちとの葛藤の後に、彼は妻と子供たちと一緒に暮らすことになった。

すでに日本人ではなくなっていたので、日本からの補償はなかった。わずか6万8千円を手にした。グアム島から帰った横井軍曹は政府と民間から2400万円、ルバング島から帰った小野田少尉は手記その他で3500万円ほどを手にした。

故郷では、古い友だちや訪問客の相手をして酒を飲み、タバコを吸って豊かな日々をおくった。蔣経国の総統就任式にアミ族の祝賀隊の先頭にもたった。

1979年に61歳で、スニヨン、中村輝夫、李光輝という3つの名前を余儀なくされた彼は肺がんでなくなった。

「後書き」で著者が書いているように、「彼はかく生きた」ということの記録になった。結果的に中村輝夫とその背後にいるすべての台湾元日本兵の鎮魂の書になった。丹念な資料の読み込みと関係者への直接取材で、中村輝夫の像をつくっていった。戦争がもたらした罪と翻弄された台湾人の軌跡が過不足なく描かれており、資料的価値は高い。

このところ、おおづかみの台湾の歴史、為政者の伝記という上からの目線で台湾に関する本を読んできたが、この書は一人の末端の人がその時代をどのような困難に向き合って生きたかを教えてくれた。時代に翻弄された人の生き方に深く考えさせられる。

上沼八郎「伊沢修二」(吉川弘文館)

台湾での教育に絶大な実績をあげた伊沢修二(1851-1917 年)という人物の伝記を読み終わった。

伊沢は明治初年の「師範教育、音楽教育、体操教育、聾啞教育、植民教育、国家教育、吃音矯正等」、各種教育事業のすべての単独で創立したか、深く関係しているという、独創的な教育実践家であった。

台湾では日本語がいまなお盛んであるのも、伊沢修二の計画と実践の賜物だったのである。

東京高等師範学校校長。体操伝習所主幹。東京音楽学校初代校長。文部省編纂局長。東京聾啞学校校長。国家教育社社長。台湾総督府民政局学務部長。貴族院議員。楽石社社長。

こういう経歴をあげてみると、一人のとは思えないほどの領域で創業にあたったことに驚きを覚える。

信州高遠藩の下級武士の家に生まれた伊沢は出郷にあたって「万難千苦を嘗め尽くし、業若し成らずんば、異郷に客死するもうらむべきにあらず」と志を父に向かって述べている。

15年間にわたって師範教育の開拓者であり、ブルドーザーであった伊沢は、師範教育の目的を知識の獲得と知識の伝達にあると考えて、組織を改変している。

「智戦力闘の処世に要用なる、あたかも車の両輪の如く」不可欠であり、体育は「全国の元気を振作せんことをこいねが」い、体操伝習所を設立した。

音楽教育の面では、「君が代」、蛍の光、「蝶々」などの唱歌を定めた。「てふてふ、菜のはなにとまれ、、、」で始まる「蝶々」については歌詞にも関与している。音楽は児童の身体健康と徳育上の効果が大きいことを強調し、音楽教育を独力でもって設計し、構築した。

31 歳で文部省に戻った伊沢は森有礼大臣のもとで標準的な教科書の編纂にあたる。

聾啞教育に関与した伊沢は、研究を重ね、聾啞者の矯正に成功し、神業と言われる。

文部省内の意見不統一を公開の席であばいたという理由で非職となった伊沢は、国家教育者で時流をつくっていく。「優勝劣敗の世界において、各国互に相戦ふ武器は教育より外にない」とした。

清国から割譲された台湾において伊沢は「外形を征服すると同時に、別に其精神を征服し、、、日本化せしめるべからず」とし、国家教育を輸出する。台湾における教育は日本語によっておこなうという基本原則を採用した。台湾の日本化は、「教育者が万

斛の精神を費し、数千の骨を埋めて、始めて其实効を奏すべき」とし、土匪の脅威に立ち向かっていく。混和主義による弾力的な現実主義であった。命我見お仕事であった。

貴族院議員になった伊沢は、67歳で没するまで20年間を廟議の人として過ごす。学制研究会を組織し、清国賠償金から教育費として1千万円を獲得する。

伊沢は再び東京高師の勅任校長となるが、激務の中で病に倒れ、やむなく辞職する。時に50歳。

「凡そ天地間に無用の者を助けて置く理由は無い。、然らば生きてをるといふには其れだけ任務、則ち大命といふものがある筈である。、唯此大命に従って生活すべし」として伊沢は信仰の人となった。

その伊沢は吃音矯正事業に取り組み楽石社を設立する。没した翌年に開かれた創立15周年記念会では、矯正者総数は5367名に及んだと報告されている。中国での事業も成功し、「神か仙かほとんど人に非ず」とまで激賞された。

強靱な体力、不屈の意志、異常な才幹、緻密な頭脳の独創の人であった。

台湾総督をつとめた弟の多喜男は「精力絶倫の兄は、ほとんど3-4時間しか睡眠をとらず、次から次へと前人未到の境地を切り拓いて行った」とその超人ぶりを語っている。

67歳で没した伊沢の葬儀には2000人の会葬者があった。

教育に関するパイオニアではあったが、性格が強く、対立を起こし、途中で後任に仕事を託し、自らは新しい課題に挑戦していった。後に大臣にも大学総長にもならなかったのは性格の故だと記されている。

笹本恒子「お待ちになって、元帥閣下 自伝 笹本恒子の97年」(毎日新聞社)

「自伝 笹本恒子の97年--お待ちになって、元帥閣下」を読んでみた。

「人生は不思議なもので、開くドアを一つ違えるだけで、その先がまるで変わってしまいます。」という「96歳の転機」のなかの言葉にうなずいた。

「100歳のファインダー(東京新聞)」の中でむのたけじとの対談の中の言葉。

「気持ちの底では、戦争はダメ、そうだよなー、そうだよなー」と思いながら戦前、戦中を通し、日本人は暮らしてきたと思います。

宮崎義憲「太ももを強くすると「太らない」「超健康」になる」(プレジデント社)

池淵さんに勧められて、「太ももを強くすると「太らない」「超健康」になる」(プレジデント社)を読了。

全身の筋肉の3分の2は下半身にあり、そのポイントは「太ももとふくらはぎ」である。

中高年が重点的に鍛えるべきは「遅筋(赤い筋肉)」である。この筋肉は、血液を心臓に戻す役割を担っており、第二の心臓。

- ・ 反復つま先立ち運動:30秒。30秒休み。これを5セット。かかとのあげおろし20回を3セット、3分の休憩。片足のかかと上げ。
- ・ つま先歩き:20歩を一日3セット。
- ・ 腹式呼吸:へこませる(口からはく)、下腹を膨らませたり(鼻からすう)。
- ・ 貧乏ゆすり:寝る前
- ・ 空中バタ足体操:うつぶせ
- ・ かかとの上げ下げ運動:10秒。20回。一日2セット。
- ・ 後ろ歩き
- ・ 太もも上げ運動:一日30秒。
- ・ 速足歩き:30分。ウォーキングはマッサージ。
- ・ けり出し歩き:つま先でけり、かかとで着地。歩幅を広く。
- ・ 水平足ふみ運動:床と太ももを平行に。
- ・ ダンベル速歩:腹式呼吸。
- ・ 階段のぼり:エスカレーター、エレベーターを使わない。
- ・ 良い姿勢を保つ:背筋をピンと伸ばす意識の習慣化。肩こりの人は猫背。
- ・ 速足歩き+つま先歩き:腰痛対策。
- ・ 寝ながら体操:股関節。膝を抱ええるストレッチ。差中の足裏を合わせるストレッチ。体前屈。空中バタ足運動。ぐうたら足上げ運動。
- ・ おもり入りベルト(ウェイトベルト)ウォーキング。

こういうことを真面目に楽しんでやれば大丈夫だろうということはわかる。

腹式呼吸、けり出しウォーキング、階段のぼり、姿勢を意識、、などから始めようか。

呉濁流「泥濘に生きる」(社会思想社)

呉濁流の小品「陳大人」と「ポツダム科長」を読了。

副題は「苦悩する台湾の民」。

両作品ともに、日本の植民地統治下における被害者としての台湾民衆の姿を描いている。

加害者は日本というよりも、同じ民族である中国人の寄生者による被害である。

いずれもあくどい買弁、寄生者、手先を生むにいたる植民地機構に対する告発となっている。

「陳大人」は、傍若無人に振舞った巡查補の絶頂から没落までの物語。

「ポツダム科長」は、大陸からきた汚職官吏が逮捕されるまでの物語。

植民地体制は、その下に置かれた人間関係をいかに歪めるかを教えてくれる。

著者の呉濁流は 1900 年台湾生れ。台北師範を卒業後、21 年間にわたり各地の公学校で教員をする。1940 年、日本人教員の台湾人教員に対するいわれなき差別に憤り教壇を去る。その後、新聞記者となるが、小説を書くようになった。

2014 年 6 月

谷口正和「幸福の風景」(ライフデザインブックス)

哲学の時代。幸福は変化の中にある。前進する自分。生涯かけて打ち込むべきこと、それを社会との関わりの中で考えると仕事になる。他社貢献の視野を次の世代にまで広げて考えて生きることが良い生き方。小さな変化を受信し続けることが幸福。優れた編集には優れた創作と同等の価値がある。10 年かけなければ成し遂げられらいようなものはあるブレイクスルーを起こす。自分の部屋を幸福な風景をデザインすること。互いに差異を認め合うインターナショナルリズムの心。奉仕と貢献の精神をもって自らの領域でいつまでも役に立つように生きようという生涯現役の精神。影響力が重要。自分の最も好奇心の高い領域でその専門性をもって他者の役に立つ。

むのたけじ「99 歳 一日一言」(岩波新書)

1915 年生れ。朝日新聞を、戦争責任をとる形で退社。秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊したジャーナリスト。

自分が燃えて人々の心を燃えさせる。自分とはことん燃えて燃え尽きる。それが、たいまつ。

「反骨のジャーナリスト」というのは二重形容だというむのたけじは、本当のジャーナリスト。

- ・ 幸福は去って実感する。
- ・ 夜明けの歌を歌うだけでは、世の中は明るくならない。生活の現場から暗いものをひとつずつ取り除こう。
- ・ すぐそばの人に最も心を用いよ。隣人は最大の敵にも最強の友にもなり得る。
- ・ 仲間は集めるものではない。集まるものだ。
- ・ 人の仕事は 12 割の努力で 10 割が完結する。
- ・ 若者を友とする老人はよく笑う。老人を友とする若者はよく考える。
- ・ 脱皮しない蛇は死ぬ。
- ・ 相手に責任を持たせない。責任はすべて担う。この決意が「愛する」の心棒だ。

- ・ 自分が燃えて人々の心を燃えさせる。自分ほとことん燃えて燃え尽きる。それが、たいまつ。

ハインリッヒ・シュリーマン、石井和子「シュリーマン旅行記 清国・日本」(講談社)

1865年6月1日から7月4日までの約一ヶ月間、トロイの発掘で著名なシュリーマン(1822-1890)は日本に滞在した。明治維新の3年前である。

シュリーマンは大商人となったが、41歳ですべての商業活動を停止し、少年時代からの夢であったトロイの発掘の準備にかかる。

このためまず43歳で世界漫遊の旅に出る。この旅行記がこの処女作「シナと日本」である。

44歳、パリで考古学を学ぶ。46歳、博士号を取得、ギリシャ・トルコ旅行。47歳、アテナイで二度目の結婚、「シナと日本」をパリで刊行。

そして49歳でトロイアを発掘。54歳、ミケナイ発掘。59歳、シュリーマンの館完成、トロイアの発掘品をドイツに寄贈。62歳、ティリマチス発掘。63歳、エジプト旅行。67歳、トロイアで第1回国際会議。68歳、ナポリで急死。

シュリーマンは館の書斎には多くの格言を掲げていた。ソクラテスも同様であったそう。自分に言い聞かせていた言葉だろうか。

「汝自身を知れ」「精神の浄化」「何事も中庸が肝心である」「教養がないということは深刻な問題である」「勉学は非常に重要である」「何事も適切な時に行うべきである」「休養は次の仕事に大切。しかし寝すぎないように」「よい子はよい家庭で育つ」。

健康第一であったシュリーマンは海水浴を唯一の健康法と信じ、夏は早朝4時、秋と冬も5時の水浴を欠かさなかった。そのために耳疾を悪化させ命を落としている。

この尊敬すべき人物が八王子を旅している。6月18日から20日である。原町田と八王子はいずれも当時の人口は2万。

八王子は絹の生産地で手工芸の町として有名であった。前方には常に富士山が見えていた。

休憩した豊顕寺では境内の秩序と清潔さに心を打たれている。中国のごてごてと飾り立てた不潔で退廃的な寺とは違った。そして親切で清潔な僧侶にも感心している。シナの坊主の無礼、尊大、下劣とは違った。

シュリーマンは「世界の他の地域と好対照をなしていることは何一つ書きもらすまいと思っている私」と自分の心構えを述べている。

日本では庶民も、日本男児は心づけ(賄賂)につられて義務をないがしろにしないことに感心している。また役人は最大の侮辱は現金を贈られることであり、受け取るくらいなら切腹を選ぶと驚いている。

「日本人はみんな園芸愛好家である」

「日本人が世界でいちばん清潔な国民であることは異論の余地がない」

「平和、行き渡った満足感、豊かさ、完璧な秩序、そして世界のどの国にもましてよく耕された土地が見られる」

「工芸品において蒸気機関を使わずに達することのできる最高の完成度に達している。、教育はヨーロッパの文明国家以上にも行き渡っている。」

シュリーマンの奇跡的な人生には興味が湧く。

高木桂蔵「客家 中国の内なる異邦人」(講談社現代新書)

とう小平・朱徳・葉剣英・李鵬・洪秀全・孫文・宋慶齡・宋美齡・王陽明・朱子・リーク
アンユー・李登輝、、、。

すべて客家である。

その土地に元からいる人が主であり、そこから来た人が客であり、客家はそこから来た人々である。

中国では宋代に初めて戸籍ができた。この時、土着民を主とし、流れ者を客と名づけた。

客家は全人口の 4%にも満たない少数民族であるが、中国の近代・現代史において重要な役割を果たしてきた。

客家の精神は、強い団結心・進取と尚武の精神・文化伝統保持・教育の重視・政治指向・女性の勤勉性などがあげられる。

また、タイガーバームガーデンの胡文虎は、客家の精神として、刻苦耐劳の精神・剛健不羈・創業勤勉・団結奮闘の 4つをあげている。

華僑は経済に重点を置くが、客家は警官・軍人・政治家・会計士・土匪・建築土木・教師などにつくことが多い。

客家の特徴は血のつながり・土地のつながりを中心としたネットワークである。

以下、客家のことわざ。

三兄四弟一条心 門前土地変黄金

読書耕田・忠臣孝子

人平不語 水平不流

謙者成功 誇者必敗

病由口入 禍従口出

台湾では人口 2 千万のうち 300 万人が客家人である、

シンガポールは 1959 年の自治連邦発足時 9 人の閣僚のうち、リークアンユー・ゴーケンスイなど 4 人が客家だった。

インドネシア 400 万人の華僑のうち、150 万人が客家系である。

インド、オーストラリア、タヒチ、ハワイの華僑の2割、中米、、、。

香港・マカオの650万人のうち、客家人は150万人。

この本の最後には、華南経済圏(中国南部の広東省と、1997年7月に返還された香港を基盤とする経済圏)は、香港・台湾・シンガポールをまきこんだ一大中国人経済圏を作りあげるのか、それとも北京中央の圧力に屈するのか、と二つの方向を示している。

そして高い可能性として、華南経済圏の成功が、逆に北部の大陸部分を包み込んでしまうだろうと予測している。

この本が書かれた1991年から20年たって、その予測は大中華圏として実現している。

まさに客家を語ることは中国を語ることだ。

ビル・カポダイ,リン・ジャクソン,早野依子 「ピクサー成功の魔法—大ヒットを連発する革新的ビジネスモデル」 (PHP 研究所)

ディズニー精神が消えて崩壊寸前だったディズニーを立ち直らせたピクサーの秘密を解いた書。

原題は「Innovate the pixar way」。

1995年の「トイ・ストーリー」の大ヒット以降、ピクサーは連戦連勝。

10本の興業成績は全世界で、48億ドルで、制作費は10億ドルである。全ての作品が全米と世界でヒットを続けている。そして「アナと雪の女王」も現在空前の大ヒット中だ。

ピクサーはディズニー傘下に入ったが、実際はピクサーがディズニーの主導権を握っている。そのピクサーはこの本の冒頭に「夢を見て、信じて、挑戦して、実行する力を我々にくれたウォルト・ディズニーに捧げる」と引用されているようにディズニーの後継者である。

創作集団を活性化し、芸術と技術が織り成す壮大なストーリーを完成させ、それを継続していくことは並大抵のことではない。ここでは、その秘密を創り出した数人の天才の言葉を追う。

ウォルト・ディズニー

- ・ 変化と変革が絶え間なく行われ、技術と芸術が一体になった時にこそ、魔法が起こる
- ・ 我々が生きる指針とし、作品を通して子どもたちに伝えている思想が、生き続けるか消えるかは、我々がいかに自由に自分の考えや気持ちを交換するかによって決まる。

- ・ 私は探究心の強い人間で、気に入らないもんを見ると、なぜこれはこんなふうなのか、どうしたらもっとよくなるかとかつい考えてしまうんだ。
- ・ 私は批評家たちを喜ばせることに興味はない。だが、観客を喜ばせるためなら、一か八かの可能性にも賭ける。
- ・ 不可能を実行するのは楽しい。

ジョン・ラセター(「アナと雪の女王」制作総指揮者。ピーター・パンを自称)

- ・ どんな細かい点も精査し、デザインし、形成し、影を描き込み、配置し、ライトをあてなくてはいけない。
- ・ スティーブ・ジョブズは僕に、「ピンチの時には、新しい人材を探す暇はない。身近にいる人員を総動員して、彼らを信じるんだ」。

エド・キャットムル(ピクサーおよびディズニーアニメーションスタジオ社長)

- ・ 20年もの間、僕は世界初のコンピューターによるアニメーション映画をつくるという夢を追いかけて続けた。
- ・ 映画づくりに関わる者たちには、どんなに些細な業務においても創造力を生かすための自主性を与えなくてはならないんだ。
- ・ 凡庸なチームに良いアイデアを与えても、台無しにしてしまうだけだ。だが、凡庸なアイデアを優れたチームに与えると、素晴らしい成果を上げるんだ。
- ・ 社員は「共に問題を解決し、支えあうためのネットワークを築ける人間」。
- ・ 創造的な問題解決法。
- ・ マネジメントの仕事は、リスクを防ぐことではない。失敗した時に立ち直るだけの力量を築き上げることなんだ。
- ・ プロジェクトが完成したら、「違うやり方をすればよかったと思うこと」と「このやり方でよかった」と思うことをそれぞれ5つ挙げよう。

ランディ・ネルソン(ピクサー大学学長)

- ・ 度量のある人とは「他人を増幅させることができる人のこと」。、「それはダメだ。こっちのほうがいい」ではなく、「それでいこう、その上でさらに、、、」を合言葉にする。
- ・ ディズニーのプラスング(プラスする)。「どうしたらこれに何かをプラスできるか? どうしたらもっと良い仕事をするができるか?」を考えるんだ。

ジョー・ラント(ピクサーの監督)

- ・ アイデアを、言葉だけではなく絵や図にして提示しよう。チームのメンバーの視野を広げ、何に専念すべきかを明確にすれば、彼らはその世界観を肌で感じるこ

ができるはずだ。、絵で描かれると、そこに新しい可能性が見えてくる。、絵コンテがあれば彼らは匿名で自分の考えを提示することができるんだ。

この本にはチームで創造的な仕事をするヒントが詰まっている。そのヒントを関係者の言葉で紡ぐことで成功している。こういった思想や方法は、あらゆる仕事を創造的に行うときに必要なことであり、問題を創造的に解決することにヒントをくれる。

PHP 研究所編「ウォルト・ディズニー すべては夢みることから始まる」(PHP 研究所)

入浴中に読了。

「アナと雪の女王」を観て、ウォルト・ディズニーの伝記を探した。

ディズニーの言葉とそれをテーマにした解説という本の作り方の軽い本だ。

いくつかいい言葉もあったが、次の言葉に共感した。

- ・ 「私のした仕事で最も意味があったのは、スタッフをひとつにまとめ上げたこと、そしてその努力をひとつの目標に向かわせたことだ。」
- ・ 「リーダーシップというのは、何かについての強い確信や信念だ。、ひとりの人間の信念や確信によって進むべき方向が決まられている。」
- ・ 自分で作った映画の続きなど撮りたくはない。目指すのは常に新しいもの、これまでにない構想を練り上げることだ。
- ・ 誰だって疲れるものだ。調子が落ちたら、気分転換をすればいいのさ。

川勝三「台湾を愛した日本人―土木技師・八田與一の生涯」(創風出版)

著者は 1944 年生まれ。愛媛大卒業後、教職の道を歩む。36 歳から 3 年間台湾省高雄日本人学校に勤務。

このとき八田與一を知る。47 歳、「台湾を愛した日本人」で土木学会著作賞を受賞。松山市の中学校校長を歴任した後、定年退職。今は「台湾を愛した日本人?―蓬莱米の父・磯永吉 蓬莱米の母・末永仁を取材中。

一つの峰を越えて、次のテーマが浮上した人の軌跡がここにある。

台湾を愛した日本人(改訂版) -土木技師 八田與一の生涯-

台湾はもともと無主の土地であった。

オランダ人が日本、中国、バタビアの中継貿易基地として、1624 年にゼーランド城とロビデンジャ城を建設し、以後 37 年間の植民地支配を行う。

1661 年、鄭成功が清朝打倒の基地として台湾に侵攻しオランダ人を降伏させる。子孫による支配は 22 年間。

清朝は 212 年間にわたり台湾を支配する。

1894 年、日清戦争で勝利した日本は下関条約により台湾とぼうこ諸島を譲り受け、日本初の植民地となる。

1945 年、第二次大戦で日本敗北。中国共産党から追われたた国民党が台湾に上陸し中華民国台湾省となる。

日本植民地時代の台湾は、当初は土匪との戦いに明け暮れたが、第 4 代総督・児玉源太郎と後藤新平民政長官時代に、大成功をおさめ、以後台湾は急速に近代化する。

その台湾近代化の過程での一人の若い人物が、大きな仕事をする。それが東洋一のダムをつくった八田與一である。

このダムによって洪水と干ばつと塩害の三重苦にさいなまれていた不毛の大地嘉南平原は緑の沃地に変わり、台湾最大の穀倉地帯となった。香川県に匹敵する感慨面積である。

この工事は 1920 年に開始され、1930 年に完了する。10 年の歳月を要した。総工費は現在の価値で 5000 億円以上。

計画時 32 歳だった八田與一はこのとき 44 歳になっていた。

農民の収入が増え、生活が豊かになり、粗末な家がレンガ造りになるなど衣食住は急速に改善された・

人造湖・珊瑚潭を見下ろす丘に八田與一の銅像が建っている。物思いにふける座った像である。

中華民国が支配することになった台湾では、日本人の銅像の類は撤去されたが、この八田與一だけはかろうじて残った。今残る唯一の日本人の銅像である。

八田與一は 1942 年にフィリピンに向かう途中アメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、東シナ海で死亡。享年 56 歳。その 3 年後、妻の外代樹がダムの放水路に投身自殺。夫婦の墓がある。

中国に「飲水思源」という言葉がある。水を飲む時には井戸を掘った人のことを思い感謝して飲むという意味だ。

まさに台湾に人にとって、八田與一は井戸を掘った人となった。

人類のためになる仕事をし、後の世の人々に多くの恩恵をもたらすような仕事をした。

大きな仕事は、30 代か 40 代までに行わなくては駄目だ。

過去の文献や事例を徹底的に調べ上げ、それをもとに現場に合う合理的な方法を組み立てていく。

1998 年、台湾の歴史教科書「認識台湾」に八田技師が取り上げられる

2000 年、烏山頭ダムに八田技師記念室が開館
2001 年、「台湾を愛した日本人」の台湾語版が出版
2004 年、金沢市ふるさと偉人館に常設展示コーナー

3・11東日本大震災の時に、台湾からは 200 億円を超える義捐金が届いた。この額は世界最大だった。

その陰には、八田與一のような素晴らしい日本人の貢献の蓄積の歴史があったのだ。

若干 32 歳の若き技術者が今日の金額で五千億円の巨額工事「東洋一の巨大ダム建設」を指揮した物語。

台湾における唯一の日本人の銅像が建っている。

最近入手した「台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る」の 83 ページから 84 ページにかけて八田與一の名前が出ている。台湾を知る—台湾国民中学歴史教科書農業改革の項で、「水利工事を行い、耕地灌漑面積を大きく増加させた。その中でも有名なのが、

八田與一が設計、建造した嘉南大？で、灌漑面積は 15 万甲に達した。」と讃えている。

そして「嘉南大？の水源基地工事図」として写真を載せている。

以下、参考情報。

- ・ ダムの送水駅の脇に「八田技師記念室」が平成12年に開館。
- ・ 金沢市ふるさと偉人記念館に八田與一技師を顕彰する常設展示コーナーが平成 16 年に開設。
- ・ 台湾の人のいう日本精神。「今日の台湾の発展は日本精神のおかげです」。
- ・ 嘘をつかない。不正なお金は受け取らない。失敗しても他人のせいにはしない。与えられた仕事に最善を尽くす。

八田與市は 1886 年(明治 19 年)生まれ。私の母方の祖父と同じである。

嘉南小学校(前身は日本人技師の子女教育が目的の学校。六甲尋常小学校)と金沢市花園小学校は姉妹校で、夏休みには金沢からの訪問している。

旧八田宅の前には、「良縁、健康、ノーベル文学賞、日台友好」などと書いたお札がさがっていた。台湾において八田は神様になっていた。

「お前にとって日本は狭過ぎる。ここは古くて器量の狭い人間ばかりだから、ガイチで腕をふるうほうがいいのではないか」とアドバイスされた八田は「人類に貢献できることをやる」という志を立てた。

八田與一故居は石川県から古い家具や調度品の寄付をもらい復元された。八田成

子、守、音子、澄子という名前も。

書齋は 12 畳ほどの広さ。

5 月 8 日に慰霊祭。

小村外代樹

4 年生の操行評価。

「伶俐、着実、端正、勤勉、寡言」。賢く素直で慎み深く正直、そして勤勉。

「英語が得意。成績優秀で前田公爵から銀時計」。

井上勝志「近松門左衛門『国姓爺合戦』」(角川学芸出版)

近松門左衛門「国姓爺合戦」を kindle paper white で読了。

近松門左衛門(1653-1724 年)は生涯で浄瑠璃・歌舞伎を 150 作ほど書いている。

井原西鶴と松尾芭蕉とともに、元禄の三大文豪と呼ばれている。

越前に生まれ。初めは浄瑠璃、後に歌舞伎の作に筆を染める。

元禄年間に多くの坂田藤十郎出演作に関わった。そして竹本座に専属作者として迎えられた。

300 年前の観客という近松の同時代人に向けて書いたなぐさみである。

近松は「年来作りだせる浄るり百余番。其内あたりあたらぬありといえとも。素読するに何れかしきはなし」と言っている。

読んで悪くはなくても芝居として当たるとは限らない。近松は読むのではなく、聴くものである。

父の鄭芝竜と医者 of 田川七左衛門の娘マツの間に生まれたのが福松。それが後の鄭成功(1624-1662 年)。福松は一人福建へ。後にマツも海を渡る。1646 年清軍南下、マツは自殺。母の仇を打つ 17 年間。こういう日中のはざままで活躍した台湾の英雄・鄭成功の波乱の人生を下敷きにしたのが国姓爺合戦である。鄭成功の没後 30 年ほど後に生まれた近松はこの英雄を主人公にした。それがこういう経緯を知る当時の人々に受けたのである。

リチャード・ニクソン 徳岡孝夫訳「指導者とは」(文藝春秋)

リチャード・ニクソン「指導者とは」(徳岡孝夫訳)を 30 年ぶりに再読

アメリカのリチャード・ニクソン第 37 代大統領(1913-1994 年)は、ウォーターゲート事件というスキャンダルで 1974 年に任期半ばで辞職したこともあり、高い評価はしていな

かった。この本が書かれた 1982 年直後に読んで、優れた人物であると再認識したことがある。

30 年ぶりに読んで改めて世界のトップであるアメリカ大統領の視界の広さと仕事の重要さ、その中でライバルと接触しながら自国と世界の利益を追求する姿を垣間見ることができた。

ニクソン大統領は、ベトナム戦争からの完全撤退、冷戦下のソ連とのデタント(緊張緩和)、中国との国交樹立などに尽力した。

イギリスのチャーチル首相、フランスのドゴール大統領、マッカーサー元帥と日本の吉田首相、西ドイツのアデナウアー首相、ソ連のフルシチョフ首相、中国の周恩来首相が、遡上にあがっている。ニクソン大統領のリーダー論は出色である。20 世紀リーダー論の最高峰だ。

政治家になって 35 年間でニクソンは世界 80 カ国を旅し、指導者たちと会っている。戦後の大指導者たちの中で会っていないのはスターリンくらいだった。

多くの指導者を観察したニクソンは「人間が老けるのは、みずからが老けるのを許容する人が多い」という。

戦う英国を率いたチャーチルは 66 歳だった。ドゴールは 67 歳で第五共和制をつくった。アデナウアーは 73 歳で首相になった。

そしてドゴールは 78 歳でも大統領であり、チャーチルは 80 歳でも首相、アデナウアーは 87 歳でも首相だった。

最終の章「指導者の資格について」は、ドゴールの言葉で始まる。

「偉業は、偉人を得ずして成ることがない。そして、偉人たちは偉大たらんと決意する意志力により偉大になる」。

願望ではなく決意、追従ではなく指導が、偉大さの出発点である。

ポリティシャンが多く、ステイツマンがいない。これがよく聞く慨嘆であるが、ニクソンは「ステイツマンになろうと志す者は、まずポリティシャンでなければならない」と言っている。

指導者にとって、もっとも大切なのは時間である。つまらぬことに時間を割くことはできない。自分でやることを決めることと部下を選ぶことが大切な仕事になる。また私情を殺し公益を優先しなければ成果はでない。超重要事項は自分でやり、重要事項は部下にやらせる我慢が必要になる。

ニクソンの観察によれば、偉大な指導者は偉大な読書家であった。また全員が猛烈な働き手であった。

特に、チャーチル、マッカーサーと吉田茂の章に特に感銘を受けた。

チャーチル

- ・ 「歴史を作る最良の方法は、それを書くことだ」
- ・ 「偉大な国家は、生存にかかわる重大事を他の国々に決めてもらおうとは思わ

ない」

ドゴール

- ・ 自分を指すのに三人称を用いた。シーザーやマッカーサーも同じだった。

マッカーサー

- ・ 「司令官にとって最も大切なことは、5%の必要な情報を、95%のどうでもいい情報から見分けることだ」

吉田茂

- ・ ニクソン「指導者にとって満足の最たるものは、自己が舞台を去ってからもなお、わが政策の継承されるのを見ることだろう」
- ・ ニクソン「自分が大統領を狙わず、大統領職に自分を狙わせる。これこそ大統領になる最大のコツではないだろうか」

アデナウアー

- ・ 正道と穏健を守り、準備に心がけた。不意を衝かれることはなかった。

周恩来。

- ・ ニクソン「中国革命が実を結ぶかどうかは、現在の中国の指導者が周恩来のように「共産主義者であるより先に中国人」であり続けられるかどうかにかかっている」。

知的生産のヒント。

- ・ チャーチル。戦争中も昼寝を欠かさなかった。必ず演説の草稿を書き、暗誦し、鏡の前でゼスチャーを研究し、あれこれ研究した。
- ・ ニクソン。文章を書くのにテープに口述筆記をするのが一番だ。重要な演説の原稿をまとめるのが自己を鍛える。決断の検証と思考を磨くことになるからだ。政治指導者は伝記類の熱心な読者だ。
- ・ ドゴール。まず原稿を書き、暗記してから原稿を捨てた。
- ・ マッカーサー。健康の秘訣は、仮眠とあまり酒を飲まないこと、腹八分の食事。どこでも欲する時に眠れることを挙げている。
- ・ アデナウアー。ひげをそっている間にアイデアがひらめくので、バスルームには紙と鉛筆を以って入った。

服部龍二「大平正芳 理念と外交」(岩波現代全書)

服部龍二は大仏次郎論壇賞を受賞した「日中国交正常化――田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦」(中公新書)でその存在を知った政治学者。

服部はこの本を書くために大平関係の本と資料を全部読み込んでいる。巻末の参考文献は300冊近い。

大平正芳(1910-1980)は、外交をライフワークとした哲人宰相であった。

戦後の外務大臣としては最も在任期間が長く、また実績も素晴らしかった。

盟友の田中角栄の支持を得て総理に就任したのはようやく 68 歳の時である。大平は何度も好機があったにもかかわらず、田中角栄、三木武夫、福田赳夫に先を譲っていた。大平は外遊の無理がたたって 70 歳で総選挙の最中に亡くなっているから在任期間も 2 年であった。

四国の香川県観音寺市の記念館には昨年訪問して、読書家であった大平の蔵書をのぞいたことがある。佐藤一斎の「言志四録」も愛読書だった。また大平は文章家でもあった。

座右の銘は「一利を興すは一害を除くにしかず」。

大平外相は、韓国とは経済協力によって請求権問題を解決し、国交樹立の糸口を開いた。最大の懸案は日中関係だった。日本と中国は大晦日と元旦のように近いようで遠いと発言している。

日中航空協定締結時には「幕末の井伊大老ではないが、八つ裂きにされてもやる」と言って成功している。

日中国交正常化にあたって周恩来が賠償請求を放棄してくれたことに感謝し、対中借款に力を入れた。

- ・ 均衡と中庸。だえんの哲学。物事には二つの中心があり、どちらかに傾斜することなく、中正の立場を貫くのが重要である。統制と自由、権力と国民、課税者と納税者、、、。
- ・ 生涯の節々にその支点となっている「永遠の今」、その「永遠の今」に恵まれた決意によって身を処し、その決意によって織りなしてきた自分の人生絵巻、、。
- ・ 神が「永遠の今」という時間を各人に恵み給うたことは、自分は自分としての永遠に連(つが)る寄与をするよう期待されてのことではないでしょうか。まず自分の自分なりの確立が大切です。それには、その根幹を貫くバックボーンがなければならぬ。それは自分の勉強と思索と反省から生まれて、不断に成長する自分自体の方法論であろうと思います。これなくしては、私共は歴史から疎外されてしまい、その形成に参加する資格がなくなるわけです。
- ・ 今共産主義も弾圧ではなく、大きく呑み込み解毒しつつ消化しなくてはならぬ。
- ・ 人間というものは、閑職にあるときこそ勉強できるし、人との交際も密になって、いろいろと得られるところが多い。
- ・ 栄辱は天に問い、進退は命に従ってまいるべきだ。
- ・ 立派なものはこの世の中にはないと思う。私は改革ということに対して、その点についてはややニヒルでしてね。
- ・ だまされても、それが国のためならいいじゃないか。

参考文献から。

- ・ 伊藤昌哉「池田勇人 その生と死」(至誠堂)
- ・ 「岸信介の回想」(文芸春秋)
- ・ 小宮京「三木武夫研究序説――バルカン政治家の政治資源」
- ・ 「政治とは何か――竹下登回顧録」(講談社)

村田裕之「成功するシニアビジネスの教科書」(日経新聞出版社)

過去 15 年間のシニアビジネスの体験から得た秘訣を公開した本。ヒントが満載。

村田さんとは日本総研、社会開発研究センター、東北大関係で一緒したことがあるが、高齢社会研究、シニアビジネスのトップランナーとして活躍している。

- ・ 60 歳以上の正味金融資産は 482 兆円。
- ・ 65 歳以上の高齢者人口は 3189 万人。
- ・ 60 代以上(60 代・70 代)の正味金融資産は 2000 万。60 代のネット利用率は 10 年後に 90%。ネット経由リーチが重要。
- ・ 月間所費支出は、50 代 30 万、60 代 25 万、70 代 20 万。
- ・ シニア人間学の必要性
- ・ ふっきれ消費
- ・ シニア市場は女性主導。70 代の男女比は 1:2、80 代は 1:3。
- ・ 半働半遊派が増加。週 3 日の仕事。
- ・ 情報化によりごまかしがきかなくなる。例:有料老人ホーム。
- ・ 75 差は身体の曲がり角。75 歳後期高齢者説の根拠。受診率、要介護認定率、認知症出現率が急激に上昇。
- ・ 超スマートシニア(IT/健康)と非スマートシニアに二極化。
- ・ シニアの居場所となったコメダ珈琲店。朝 7 時開店、11 時までモーニング。価格・情報・機会・友人。
- ・ シニア商品の編集という売り方(松坂屋上野、)
- ・ ウィンドウズは不便と不満の塊
- ・ 孫消費。ディズニーは 3 世代消費。親孝行消費。
- ・ ホーム・インステッド。ダスキン。在宅ケア。2 時間 6480 円。
- ・ 小型・軽量・健康・安心・手軽・高品質。一人サイズ。
- ・ 解放型消費の 3E。Excited(わくわく)。Engaged(当事者)。Encouraged(勇気づけ)。
- ・ 知縁。テーマ型旅行が代表商品。

2014年7月

岸信介・矢次一夫・伊藤隆「岸信介の回想」(文藝春秋社)

82歳で引退の後、1981年86歳のときのインタビュー。前年は大平首相死去で自民党が勝利し鈴木善幸内閣が成立の頃。

「昭和の妖怪」と呼ばれた岸信介総理大臣(1986年生れ)は、日米安保の改定を行ったことが最大の業績として知っている。5つ下の弟は佐藤栄作総理だ。

このインタビュー本は、昭和史の貴重な証言に満ちている。

岸は長州佐藤家の次男であった。祖父は幕末の吉田松陰らの志士たちと交遊があり、維新後は島根県令をつとめた、。義理の叔父は松岡洋介である。岸の長女・洋子は阿部晋太郎と結婚する。その息子が安倍晋三総理だ。

若い時代の秀才ぶり、満州での活躍、戦前の商工大臣としての活躍、戦争直後の3年に及ぶ巣鴨での戦犯としての獄中生活、保守合同と鳩山政権下の幹事長時代、政権獲得、日中・日韓問題、国論を二分した60年安保での心境、師友とライバルたちの思い出などが詰まっている。

ここでは、総理辞職以後の心境と雌伏期の獄中生活での心境の二つを追うことにしたい。

岸信介は東京帝大の1年生の時、後に民法の大権威となる我妻栄と同点で独法のトップであった。また、大学2年の時には高等文官試験をパスしており、卒業時には上杉慎吉教授から憲法講座の後継者として大学に残ることを懇請されている。それほど秀才だった。

満州国で活躍し、東条内閣の商工大臣であった岸は戦犯容疑で最初は横浜の監獄に入る。そして巣鴨に移った。

世捨て人になることをやめ、もう一度日本の政治を立て直すことに生涯をかけようと決心する。5時半起床、8時半就寝の生活で、弱かった胃腸も丈夫になった。

- ・ 獄中三楽、読書、静思、家書。
- ・ 輿論に阿諛すべからず。輿論に聴従せざるべからず。これ政治の要諦なり。
- ・ 天大任を其の人下さんとするや、まづ其の人を苦しむ。
- ・ 予は郷土を愛す。郷土の血を愛し、郷土の土を愛す。
- ・ 人が孤独に於いて、無為に閑居して退屈を感ずるといふには、其の人に思想がないからである。独りを楽しむだけの人間的内容がないからである。
- ・ 個人が自己尊敬の念を失ったときは自暴自棄であり、道徳上向上はあり得ない。

岸は歌も詠む。うまいとは思わないが、心情は理解できる。

「4年前妻娘と共に茸狩りし宇山の茸は今出づらんか」「歌詠みて寄越せ吾娘よ父は

今朝な夕なに万葉を読む」「中庭に君等を見るは今日限り幸くあれかし晴れて会はまく」「なつかしき友のたよりなど聞きてあれば話は尽きぬにときは過ぎにけり」弟の世に立つ道を塞ぐこの兄の思ひを誰か知らめやも」「弟も身をいとほしみ秋の日をひとやに独りなげきみるかも」「罪もなき人を裁きて死の刑ときめたる無法神はゆるさじ」

- ・ 東京判決は其の理由に於て事実を曲げた一方的偏見に終始してゐるばかりでなく、各個人に対する刑の量定に於ても極めて杜撰で乱暴極まるものと言はざるを得ない。
- ・ パール判事及び印度政府に吾々は満腔の謝意を表すと共に其の正義観を称賛せねばならぬ。、一部しか他の各新聞が載せてゐないことである。之れは各新聞社の卑屈かつ非国民的意図に出づるものである。之等の腰抜共は宜しくパール判事の前に慚死すべきである。

総理辞職以後。慧眼に感心した。

- ・ 二大政党が望ましい。、一度自民党が野に下る必要がある、野党になる必要があると思うんだが。そのためにも小選挙区制で二大政党を育成すべきだという意見なんですかね。
- ・ 日韓、日華あたりでは、民間でも有力な人が言いたいことを本当にそのまま言い得るような場を持つことが意味があると思うんですよ。
- ・ (憲法改正は近い時期に可能性があるものではないですよ)という問いに対して、わからないよ。世界情勢がどういう風になるかによってね。
- ・ 一番の趣味といえば書をたしなむこと。、やっぱり書ですよ。

川勝平太編「海から見た歴史—ブローデル「地中海」を読む」(藤原書店)

グローバルヒストリーの原点たる名著「地中海」(ブローデル)を対象としたシンポジウムをまとめた本である。

ブローデルは20世紀後半の最高の歴史家。

編者は「文明の海洋史観」の著者・川勝平太。

大部の本物の「地中海」を読む前に、通読してみた。

川勝平太

- ・ どこから来たのかがわからなければ、どこに行くのかはわからない。、。
- ・ 世界史を多島海という観点からとらえかえす。一つの島が自立しながら、海によってつながっている。つなげること、つながること。ネットワークである。
- ・ 梅棹忠夫の生態史観の構成要素は遊牧社会と農業社会であり、大陸に根を張った陸地史観。

- ・ 物産複合の変化による社会変容は、島国の場合、島の外部から舶来する文物によって決定的なインパクトをもって引き起こされる。
- ・ 生態史観は暴力を社会変容の主因と見るのに対して、海洋史観は押し寄せる外圧を主因と見る。
- ・ 日本は 3700 余りの島からなる島国。海洋指向の時代と内陸指向の時代を交互に繰り返している。奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代は内陸指向。奈良以前、室町時代、明治以降は海洋指向。転機は海洋指向の末期に、白村江の海戦、朝鮮出兵、太平洋戦争の敗北と失敗がある。産業革命によってヨーロッパはイスラム文明の海域圏から自立し、日本は中国文明の海域圏から自立した。

鈴木薫

- ・ 地中海世界をその広大な空間的広がり、長大な時間的広がりにおいて全体的に捉える試みを通じて、彼独自の形における「全体史」の実現を試みた。
- ・ 無数のイメージをその一片一片とする巨大なモザイク画として、巨視的な全体像を提示していく手法。

石井米雄

- ・ 日本史と東洋史と世界史。全体史。文部省未公認のアジア史。

網野善彦

- ・ 鎖国時代の 4 つの口。薩摩・琉球・東南アジア・中国。対馬・朝鮮。長崎・中国・ヨーロッパ。松前・アイヌ・北東アジア。
- ・ 和寇の実態は朝鮮半島南部と済州島、西北九州あたりの海の領主、商人たちが海を舞台に形成した商業ネットワーク。

1996 年に初版。もう 20 年近く前であるが、川勝平太はまだ 48 歳の少壮の歴史学者の時代。すでにグローバルヒストリーという視野で研究をしている。

辛基秀「朝鮮通信使の旅日記—ソウルから江戸「誠信の道」を訊ねて」(PHP 研究所)

先日読み終わった「江戸時代の朝鮮通信使」を編集した辛基秀さんが「歴史街道」に連載した「朝鮮通信使の旅日記」が本になった。辛さんの絶筆である。

ソウル、釜山、対馬、相の島下関、上関、鞆の浦、牛窓、室津、兵庫、大坂、京都、朝鮮人街道、彦根、大垣、名古屋、静岡、箱根、江戸、日光と朝鮮通信使の足跡を追っている。

江戸時代 260 年を通じて、1429 年を最初に 12 回の朝鮮通信使という外交使節が日本を訪れている。

この使節団は楽隊や儒者、文人、曲馬師、絵師、子童などを含んだ毎回 500 人規模の壮大な使節団だった。

出発地点のソウルから江戸までは 1 年の長旅であったから、途中多くのその時代の文人や庶民との交流があった。

好奇心旺盛な日本人は宿舎にむらかった。その旅のエピソードが興味深い。

江戸幕府は朝鮮王朝と琉球王朝を「通信の国」とし、オランダと清を「通商の国」と記している。

オランダ商館長の江戸参府、琉球使節団の江戸参府もあったが、もっとも大規模だったのがこの朝鮮通信使だった。

1 回から 3 階までが国交回復期、8 階までをあらたな通交関係の確立期、11 回までを恒例遵守の安定期、12 回以降を衰退期とみなす説をとっている。

第 9 回に真文役として活躍した雨森芳洲は、「誠信の外交」を「誠信と申候は実意と申事にて、互いに欺かず争わず真実を以て交り候を誠信と申候」と力説している。雨森芳洲は釜山の倭館(10 万坪)で 36 歳から命を 5 年縮めるおもいで 3 年間朝鮮語を学び、日本人として初めての日朝会話集「交隣須知」を著した。

田能村竹田。狩野探信。菅茶山。与謝蕪村。葛飾北斎。英一蝶。鳥居清信。喜多川歌麿。

森鷗外「佐橋甚五郎」(岩波文庫)。

上関

- ・ 一般の漁民や町人も熱狂的に朝鮮人の書を求めた。この書を得ておけば何事でも願い事がすべて成就すると信じていた。

牛深

- ・ 儒者、文人、医師たちとの夜を徹した交歓。食事もとれず、疲労困憊して「文字の厄」だとシン(申)ユハンは述べた。筆談で支分を唱酬するなど夜のふけるのを知らなかった。「群倭(日本人の群集)が雲の如く集まった」。

大坂

- ・ 大坂は文を求める者が諸地方に倍してはけしく、あるときは鶏鳴のときにいたっても寝られず(シンユハン「海遊録」(平凡社東洋文庫))

名古屋

- ・ 詩文の唱酬、書画の揮毫を求めてやってくる日本人のために混雑し、通信使の文人たちは一睡もできず、筆を置く暇もない有様であった。

江戸

- ・ 見物する男女が纏塞充溢して、一寸の空隙もない。
- ・ オランダ人医師ケンペル「わが一行のことは、彼らの好奇心をそそるには、あまりに微々たる存在であったためだろう」と記しているのと比較すると熱狂ぶりがわかる。
- ・ 江戸市中の道路は見物客で埋まり、塀を築いたようだ。
- ・ 行列が通り過ぎるのに約 5 時間かかった。

通信の国との通信には、「信(よしみ)を通じて、交わる」という深い意味がある。

滋賀県伊香保郡高月町雨森: 東アジア交流ハウス雨森芳洲庵。

広島県安芸郡下蒲刈町: 朝鮮通信使資料館(御馳走一番館)

岡山件牛深: 海遊文化館。

対馬: 対馬歴史民俗資料館。

映像文化協会編「江戸時代の朝鮮通信使」(1979 年刊) (毎日新聞社)

日本と韓国の関係において、「一人ひとりが小さな通信使になり得ないだろうか」という貴重なメッセージ。

- ・ 江戸時代の朝鮮通信使
- ・ 朝鮮通信使と雨森芳洲
- ・ 唐子踊り
- ・ 対馬藩の倭館貿易
- ・ 朝鮮通信使と鞆の浦
- ・ 朝鮮通信使と歌舞伎
- ・ 朝鮮通信使の絵画
- ・ 日光と朝鮮通信使
- ・ 朝鮮通信使と遺墨

1607 年から 1811 年まで 12 回の朝鮮通信使。2回目は京都で応接。最後の 12 回目は対馬で応接。

鶴田啓「対馬からみた日朝関係」(日本史リブレット) (山川出版社)

- ・ 対馬の語源: 停泊地となる島(津島)。朝鮮の馬韓に相対する位置。
- ・ 雨森芳洲の「誠信」。「送使(船の派遣と貿易)を尽く辞退し、少しも挑戦に負担をかけないようにしなければ本当の誠信とはいいがたく、、、朝鮮側の本心(朝鮮が対馬を軽侮している)がどこにあるか、、、。現在まで別条なく連続しているのは、

日本人の荒々しい性質を恐れたことから始まったのである。」

- ・ 宗氏は外様大名。10万石以上格。華族制度では伯爵。

対馬藩の歴史。

- ・ 1274年・1281年の蒙古・高麗軍の日本攻撃。
- ・ 1389年. 高麗政府は倭寇の根拠地として軍事攻撃。
- ・ 1491年. 応永の外寇。朝鮮政府の対馬攻撃。
- ・ 浦所。倭館。
- ・ 1510年. 三浦の乱。
- ・ 朝貢の色彩。
- ・ 1592年から1589年の秀吉の文禄・慶長の役。
- ・ 1607年に朝鮮使節来日。秀忠、家康と会見。対等の地位。
- ・ 1609年. 己酉条約。日朝貿易再開。
- ・ 1631年. 柳川一件。「日本国王」の無断使用。幕府は宗氏を支持。

申維翰，姜在彦訳注「海遊録—朝鮮通信使の日本紀行」(平凡社東洋文庫)

徳川吉宗の將軍職襲位を賀すために朝鮮から派遣された朝鮮通信使に製述官として随行した申維翰の日本紀行。

1719年4月にソウルを出発し、翌年正月に復命するまでの「死生冥海の役に身を駆ることとなった」著者の261日間の詳細な記録である。

朝鮮と日本とは抗礼という対等の礼を行う対等外交ということになっていた。

日本は国号を大和としたが、梁の武帝が大和を改名して野馬台(邪馬台)にしたという世伝を記している。

日本の風俗、景色、人情、社会の有様などが日々余すところなく記されており、読者も江戸時代の様子を眼に浮かべることができる。著者は「眼で見、足で踏んだものは、何一つとして、世間の奇異にあらざるはない」と述懐している。日本人とのやり取りは朝鮮語を操る翻訳官以外とは筆談であった。

- ・ 日東の俗は、たいてい人に克ことに務め、克ちえないなら死あるのみとする。
- ・ 女は艶やかな黒髪に花簪、鼈甲の櫛を挿し、顔には脂粉をほどこしている。そして紅緑彩画の長袖を着て、宝帯を腰に束ね、腰は細くて長い。
- ・ 観衆のざわめきは林の如く、往くほどにいよいよ盛んとなり、我が目境の接すること、煩わしさに堪えられない。
- ・ 日本の官職は、世襲をもってするゆえに、人を択ばず、怪鬼の如き輩がいくんどぞその任を能くなしえようか。笑うべきことだ。
- ・ 器が不潔であっても食わず、主を見てろう色(いぶせく醜い)であっても食わない。

列店に美女が多い所以である。

- ・ 結構は新浄にして、一点の塵もなく、
- ・ 医学は、日本でもっとも崇尚するものである。
- ・ 女性の容貌は、多くのばあい、なまめかしくて麗しい。
- ・ 家々では必ず浴室を設けて男女がともに裸で入浴し、白昼からたないに狎れあう。
- ・ 日本の男娼の艶は、女色に倍する。

朝鮮通信使一行は 400 人を超える異国からの大代表団であり、毎日のように士人、文士、庶民が怒涛のように押し寄せて「書」をねだる姿に驚愕しつつ、眠る時間や食事の時間を削って対応している。

- ・ 遠近から詩を求める者跡を絶たず、紙幅を積み上げて書を乞う。書き終われば、薪を積むが如くにまた集まる。
- ・ 詩を乞う群倭が環立して人垣をつくっている。
- ・ 海外の所山を考えうるに、富士山に並ぶものはないであろう。
- ・ 大坂の書籍の盛んなること、じつに天下の壯観である。
- ・ 我が国の事をどうしてかくも詳細に聞いているのか、、、けだし、彼らは、自国の故事については曖昧である。

朝鮮出兵を行った豊臣秀吉に関しては厳しい。

- ・ 秀吉は、大阪に居て兵を苦しめ、貨を汚し、人の髓を剥ぎ、人膏を、、、その奢侈欲にあき、手遅延や草木も範金、布金の観あるにいたった。
- ・ 平賊秀吉が、奴隸から身を起こして源信長に代わり、王となった。、、家康は、、けだしまた人傑である。吉宗は、人となりか精悍にして俊哲、、、気性が魁傑にして、かつ局量あり、武を好んで文を喜ばず、儉を崇んで華美を斥ける。
- ・ 雨森「(秀吉)は、少しの功德もない。」

雨森東(芳洲)とは同志であり、かつ好敵手であった。

- ・ 顔面は藍色で語は重く、胸中を吐露しない。、、ときに年 52. 毛髪は半白であった
- ・ 狼人である。、、獅子の如く吠え、針鼠の如く奮い、牙を張り、、、
- ・ もし彼をして国事にあたらしめ、権を持せしむれば、、、。名は一小島の記室にすぎぬ。
- ・ 傑出した人物である。よく三国音(日本・朝鮮・中国)に通じ、よく百家書を弁じ、、、

三浦雄一郎「65歳から始める健康法」(致知出版社)

三浦雄一郎(1932年生)は、70歳、75歳、そして80歳でエベレスト登頂を達成した。

85歳での目標は、チョ・オユーというヒマラヤで6番目に高い8201mの高峰に登り、その山頂からスキーで滑ることだそう。

三浦によれば肥満の原因の大本は大きな目標がないことだそう。

大きな目標を持つと有酸素運動と規則正しい生活という現状維持の守りの健康法から攻めの健康法に転ずる必要がでてくる。

- ・ 両足首に1キロのアンクルウェイトをつけて10キロの重さのザックを背負って歩くトレーニング。
- ・ 一日二度、全力で壁を押し。
- ・ 階段を上り下りする。特に下りは歩く。
- ・ 舌出し運動を一日100回。噛む力。
- ・ 主食は少し残す。
- ・ サプリメント(セサミンか?)。
- ・ 30から50回ほど、よく噛む。
- ・ 「人生いつも今からだ」という生き方。
- ・ 新しいジャンルに挑戦。
- ・ 「今の私にとっては、自己ベストの更新を目指すというのがそのまま人類の限界突破につながります」。
- ・ 「あなたのエベレストを探しましょう」

2014年8月

竹下登「政治とは何か―竹下登回顧録」(講談社)

伊藤隆と御厨貴という二人の教授による2年間のロングインタビューをまとめた書物。

日本の戦後政治を知り尽くした政治家の貴重な証言録である。

内容は、政策の話はほとんどなく、政局に偏っている。

ほとんどは、「気配りの竹下」よろしく、政治家同士の人間関係と人事の話題である。

自分の意見よりも、他の政治家の言葉の解説も多い。

質問の時に、私も読んだ「佐藤栄作日記」からの引用がよく出てくる。

佐藤栄作日記は、総理時代の記録だが、事実と率直な感想が簡明に書かれている。

竹下登は、1924 年生れ。早稲田を出て中学校教員を経て、27 歳で島根県議会議員に当選。

34 歳、自民党から衆議院議員。39 歳、通産政務次官。40 歳、佐藤内閣の官房副長官。

47 歳、佐藤内閣の官房長官。50 歳、田中内閣の官房長官。55 歳、大平内閣の大蔵大臣。58 歳、中曽根内閣の大蔵大臣。60 歳、創政会会長。62 歳、経世会会長、自民党幹事長。63 歳、総理大臣。65 歳、総辞職。76 歳、引退、死去。大勲位菊花大綬章。

業績としては、消費税の導入と「ふるさと創生」か。

本書のタイトルは「政治とは何か」だが、竹下の答えは「調整」ということになるのだろうか。

竹下には、うなるような語録がない。それが特徴のようだ。

- ・ 国際経済摩擦は、当面それによって打撃を受ける国内対策だなどしみじみ感じました。
- ・ ハーモナイゼーションもガバナビリティの一つだ。
- ・ タフ・ネゴシエーターは、相手の立場まで下がる、あるいは相手の立場を引き上げていく能力があるということだ。
- ・ 「相手に屈辱感を与えないで、間違っておったなという「ことに、そこはかたなく気づくような答え方をしてあげなければいかん」(椎名悦三郎)

田中角栄「大臣日記」(新潟日報事業社)

「田中角栄という生き方」というムックについて書いた。

その時に、「この人に関する書物は、家族・親族、秘書、記者・ジャーナリストなどが書いたものは多いが、残念ながら自伝や回想録はない。」と書いたが、ある読者から、3 冊ほどあるとの指摘を受けた。

それらをさっそく注文した。その一つが「大臣日記」である。

田中角栄が池田内閣の大蔵大臣の 44 歳からの 3 年間を回想したものだ。

著者略歴の項。

- ・ 座右の銘:石の上にも 3 年
- ・ 家訓:和して流れず
- ・ 信条:明朗闊達
- ・ 「3 年間を振り返って悔いだけはなかった」と記してある。

内容は生々しい政局の話はなく、大蔵大臣としての仕事に取り組んだ話題だ。
ケネディ大統領。ケネディ司法長官、娘の真紀子、、、などが登場する。

岸信介,福田赳夫,後藤田正晴,中曽根康弘,田中角栄,河野一郎 「保守政権の担い手—私の履歴書」(日経ビジネス人文庫)

1896 年生まれの岸信介。1898 年生まれの河野一郎。1905 年生まれの福田赳夫。1914 年生れの後藤田正晴。1918 寝年生まれの田中角栄。1918 年生まれの中曽根康弘。戦後の自民党政権を担った大物政治家たちの独白集だ。

96 歳でまだ元気で政治への提言を続けている中曽根康弘以外は、すでに鬼籍に入っているが、彼らの動静は私の歩んできた時代と重なることもあり、興味深く読んだ。

それぞれ人間味があって面白いが、田中角栄の 28 歳で代議士になる前の履歴書は出色である。

越後の農村、幼い日々、校訓、競馬と借金、派遣所生活、上京、星の夜、書生になる、五味原夫妻、夢との訣別、大河内先生、共栄建築事務所。雪の夜、徴兵検査、新平生活、九死に一生、朝鮮に工場建設、代議士立候補。この波乱万丈の話が、まだ 20 代のことである。

具体的な事件、師たちの言動や訓戒、実らぬ恋など小さなエピソードの連続で、その都度ホロリとさせられたり、苦笑させられたりするが、その最後に必ず自分自身への戒めを述べている。そういった小さな成長の積み重ねが人間・田中角栄をつくっていったことがよくわかる。受け止め方次第なのだということがよくわかる。厳しい目線を持つ評論家の小林秀雄が日経への連載中に文章を褒めていたということを娘の真紀子が伝えたそうだが、小林秀雄って誰だ、と聞いたというエピソードも田中角栄らしくいい。この文章は自伝や自分史のモデルだと思う。角栄は、一時は小説家を目指していたこともある。

妖怪・岸信介の秀才ぶりはよく知られているが、本人の口からは意外な事実が語られる。

一高の入学試験で我妻栄が一番で、田舎から出てきた岸は都会で映画や芝居にはまり、最後から 2, 3 番であった。一高では旧制高校の寮生活を満喫するが、勉強にも励み東大では後に民法の大権威となった我妻栄と同点同分の一番であった。

卒業後、農商務省に入り官僚生活が始まるまでの履歴書である。まだ自叙伝を書く時期ではないということから、戦犯として巣鴨刑務所から出るまでの第一の人生の青春部分を書いた。第二の人生はもうけものであり、栄辱はなんら問うところではない、と冒

頭に記している。

党人派政治家の代表である河野一郎。

大学を出てからの10年、20年、二十代、三十代をどういうふうにして送るかということが、人間をつくる上において一番大事なことだと思う。

福田赳夫。

書架に100冊以上の小さなノートが並んでいるそうだ。政治家になってからの折々のメモの集積である。その福田メモが私の履歴書の骨格になっている。福田は造語の名人だったように記憶している。昭和元禄。日本経済は全治3年の重傷症。昭和の藤吉郎。福田ドクトリン。

- ・ 身を殺して以て仁を為す。是上州人。
- ・ 孫は全員「先生」と呼んでいる。
- ・ 総理・総裁は推されてなるもので、手練手管の限りを尽くしてかき分けてなるものではない。
- ・ いずれ近い将来日本国がこの福田赳夫を必要とするときがなからずやってくる。
- ・ さあ働こう内閣

田中角栄。先生と父親、母、妻、友人などから得た人生訓に満ちていて、信条がよくわかる構成になっている。

- ・ 二田尋常小学校の校訓「至誠の人、真の勇者」「自彊不息」「去華就実」
- ・ こんな不正は世の中から断固追放しなければならない
- ・ 状況時の母親「大酒は飲むな。馬は持つな。できもせぬことは言うな」
- ・ 母「働いてから休む方がよい。悪いことをしなければ住めないようになったら郷里へ早々に帰る事。金を貸した人の名前は忘れても、借りた人の名は絶対に忘れてはならない」
- ・ 母「男は腹巻に必ず十円札一枚入れておきなさい」
- ・ 相手の「ものさし」にあわせて考えないと失敗するぞと、強く感じた。
- ・ どんな人のことでも不注意による過失については、絶対にこれをとがめずの原則を立てたし、妻や子供にも強くこれを求めている
- ・ 覚えなければならぬものは全て暗記する主義
- ・ 新婚の妻から3つの誓いをさせられた「出て行けといわぬこと。足げにしな。将来二重橋を渡る日があったら必ず同伴すること」。、、この3つの誓いを守って、こととして25年目を迎えるのである。、、彼女の方が私より一枚上手であったようだ。

中曽根康弘。

- ・ 政治家の場合、「私の履歴書」に登場することは、読者を裁判官とする歴史の法廷に被告として立つことである。
- ・ 人生には栄辱がつきものだが、我々の場合は、栄は妻が作り、辱は私が起こした。その意味でこれは「私の履歴書」ではなく、「私と妻の履歴書」である。
- ・ 仲人は小学校の入学式で「この子は西郷隆盛のようになる」と頭をなでてくれた落合達二先生になってもらった。
- ・ かつて「風見鶏」と批判された。しかし風向きを知ることは操艦の第一歩である。風によって身体は動かすが、足は一点にしっかり固定している。これが風見鶏である。
- ・ 取得可能なあらゆる戦力を体系の中に組み入れ、現状を積極的に打はする決戦体制をしく以外にない。
- ・ 父「代議士になるなら佐倉惣五郎のようになれ」
- ・ 徳富蘇峰「大陸に手を出す時はよほど慎重にならねばならない。神功皇后、豊臣秀吉、大東亜戦争、すべて失敗の歴史だ。将来もおおやけどをしますよ。」
- ・ 真に欠乏しているのはパンではない。魂の糧なのである。
- ・ 二十世紀最大の発見である原子力の平和地用を講和条約で禁止されたら、日本は永久に四等国に甘んじなければならぬ。
- ・ それから 7 年間、私は閣僚にも国会の委員長にもならず、すべて他人に譲り、時間を殺す工夫をした。趣味を豊かにし、将来の勉強になることを心がけ、本線を外れて、引き込み線に入った。
- ・ 人事は恐ろしい。
- ・ 政治哲学「政治家は実績であり、内閣は仕事である」
- ・ ようやく手に入れた政権である。その権限を余すところなく駆使して、思い残すことのないようにやる決意であった。、、中曽根内閣は猛烈なスタートダッシュでいく。半年で勝負をつける。それで倒れてもいい。
- ・ どう小平「楽観」
- ・ 結局、親密に往来する仲間は親戚、同窓、職域、地域などのせいぜい 5、60 人に過ぎない。

伊藤昌哉「池田勇人 その生と死」(至誠堂)

この本は、本来「安保からオリンピックまで 在職 4 年 4 か月」という題で池田勇人総理の回想録として出版されるという約束になっていた。

一度も約束を破ったことのない池田総理ではあったが、ガンで退陣を余儀なくされ、1 年を経たずして亡くなった。

秘書として仕えた著書の伊藤昌哉は、ずっとつけてきた日記をもとに、この書を完成

させた。

伊藤昌哉は、後には政治評論家として時折テレビで鋭い情勢分析をする人として記憶している。

伊藤は池田総理が発するすべての文章を書くようになった。

もともとは、西日本新聞の政治記者だったこともあり、池田勇人の総理時代の様子があますところなく描かれている出色の本である。

池田勇人(1899－1965 年)は 1960 年に安保改定を断行した岸信介首相の後を受けて政権を担い、1969 年の東京オリンピックまで長い期間政権を担当した。

安保改定による国内の対立という政治の季節を、「所得倍増論」で経済の季節にテーマを大転換した。事実、日本は池田の後継となった佐藤内閣の時代を含め、高度成長の黄金の 60 年代を迎えたのである。テレビで「寛容と忍耐」を政治姿勢とする池田総理のダミ声はよく覚えている。

伊藤によれば、池田はものごとを関連させてみるがあった。関連させてみる力に伊藤は「アソシエート」という英語のカタカナのふり仮名をつけている。数字を関連付けていく能力があったのだろう。

池田はよく勉強した。そして生活は簡素にだんだんなった。

毎日全力投球で仕事に没頭し、週末は箱根の別荘で庭と石に没頭し、気分の転換をはかった。

熊本の五高で教えていた夏目漱石の「育英の基本は師弟の和熟にあり」という手紙の文句に心を動かされていたそうだ。

- ・ 池田は総理在職中、一度も待合にはいかなかった。ゴルフにもいかなかった。
- ・ 「自由陣営の国ぐにから親しまれ、共産圏職からは畏敬される国となることが望ましい」
- ・ 「憎しみとたたかいは破壊への道」であり、「寛容と忍耐をもって、話し合いを通じて解決するという、正しい民主主義の慣行」の確立を強調した。
- ・ 「私心をなくして、薄氷を踏む思いでやって、なおかつたりない。そのたりないところは偉大なものにおぎなってもらいよりしかたがない」
- ・ 池田は自分が努力し、成長しつづけることによって、政権をとった後でも、みんなを求心的にひきつけ、つねに新しい刺激をあたえていった。
- ・ 「統制は人の心を委縮させてしまう。国民の活力をあふれさせることによるのみ、国は栄えるのだ」
- ・ 「国づくりとは人づくりである」
- ・ 「自分が生を受け、そこで生きている国を他の国にまもってもらっている状態では、愛国心は生まれようにも、生まれえない」

- ・ 「大衆というのは、一所懸命かどうかということをよく見ているものです」
- ・ 「これが政治家の本当の死だ。俺もできるなら短刀のひとつも突きさされて、弾丸の一発もうちこまれて、死にたい。それは政治家池田の本望じゃないか」

最後に、鎮魂歌として伊藤は「私が本当にあなたのなかに生きれば、こんどは私のなかにあなたが生きてくる。池田あての私から、私あての池田にきつとなる。私はそう思ったのです。」と書いている。

人の影響力は死後も残り、その人の精神は生き続けるということだろう。

鳩山一郎「鳩山一郎回顧録」(kindle 版)

ライバルの吉田茂との確執、戦後間もなくの政界の人間関係とゴタゴタが率直に書かれている。

終戦、吉田茂との約束、公職追放、脳溢血、吉田内閣打倒、鳩山内閣誕生、保守合同、日ソ交渉、引退、。。

kindle 版のハイライト機能を使って傍線を引きながら読んだ。

偉い人の父親は偉い場合と偉くない場合とあるのだが、母親は総じて偉い場合が多い。

この鳩山一郎の母親の教育観と努力には感銘を受けた。

早朝の 3 時半から登校前の 7 時まで約 3 時間乃至 3 時間半の間に英漢数の三種目を母から教わっている。

- ・ 子供に自発的に学問をしようとする欲が出てくるまでは勉強を強制して人後に落ちないようにさせなければならない。しかし、一たん欲が出てくれば自分自身で勉強できるからそうなった時には自分は干渉しない。
- ・ 私がお前に働きたいという意欲を残してやる事が出来れば、それ以外に何物も残さなくとも十分な贈り物だ。それが無限の贈り物である。

父の言葉。

- ・ One thing at one time. 自分のやっていることそれ自体に全身全力を集中しなければ目的の完成を期することは出来ない。

鳩山という人は、ゴルフ、囲碁など趣味も多彩で、それぞれ真剣にやっているから何に対しても独特の考えを持っている。追放の時代には、軽井沢で百姓生活を身につける。そこで天地自然に対する感謝の念を持つようになった。この百姓生活も細かに回想している。

吉田茂との確執。

- ・ あれこれ思い合わせると私の追放解除は吉田内閣の手で阻止されて引き延ばされていたことは確かであった。
- ・ 事実は吉田内閣が色々と小細工をやっていたのでおいそれと解除にならなかったのは当然である。

鳩山は脳溢血で倒れるが、この病をなんとか克服して政界に復帰する。

「闘病生活は一つの精神闘争なのである」という言葉には納得した。

「昼寝の習慣が、私をここまで持ちこたえさせてきた一番大きな原動力であると思っている」。

谷口雅春「生命の実相」。漱石「草枕」、。

鳩山内閣の大仕事は、日ソ交渉である。

ハボマイ、シコタン両島までは、日本に譲ってもよいという態度を示したが、エトロフ、クナシリ島となると、ガンとして承知しない。

モスクワに行くことを決心した日に「日ソ交渉を果たし終えたならば引退しよう、これが私の念願であった」と書いている。そのときの心境は、明鏡止水だった。

鳩山は「明鏡止水、熱腸冷眼」とよく揮毫した。

鳩山はクーデンホフ・カレルギ氏の著作に影響を受けている。

平等と自由のための革命はあったが、友愛のための革命はない。しかし民主政治のためには、この友愛革命が必要だという。民主主義は自分と同時に他人の自由や人格も尊重する思想が基盤として必要だからとという理屈であった。

引退後。

「年寄りにとっては、長生きすることはむしろ苦痛でさえある。一切の希望や、すべての楽しみがなくなってから、まだ長く生きなければならない。というのだから、それには、よほど人生に対する考え方を変えなければ、耐えられるものではない。

漱石の「虞美人草」の一節がこの回顧録の最後だ。

「人一人真面目になると、当人が助かるばかりじゃない。世の中が助かる。」

佐々木俊尚「自分でつくるセーフティネット」(大和書房)

FacebookなどのSNSは「人間関係を気軽に維持していくための道具」であり、「自分という人間の信頼を保証してくれる道具」である。

すべて丸見えの「総透明社会」になっているから、全部見えてしまう。丸裸のメディア

だ。

過去の蓄積が、その人の人間性を雄弁に語ってくれる。

社会的な肩書きで判断されるのではなく、人間としての生き方や内容、中身が丸見えになっており、それで判断される時代になった。

初めての人もフェイスブックを見たり、ブログをみれば、出自や仕事歴や日々の生活を知ることができる。

だから人に対する信頼できるか否かは今までよりはるかに判断しやすくなってくる。

シェアハウスなどのブームにもこのSNSが一役買っている。どのような人かは、その人のSNSをみればわかることになる。

また、クラウドなどのランクをみればSNS社会での存在感のレベルもわかる。

日々のSNSの蓄積は、名刺以上の履歴書的な証明書になっているということだろう。

時代と向き合うためには、価値のあることを書き続け、表現することで、信頼のレベルを常時高めていかねばならないのだろう。

このSNS社会に参加していなくても生きてはいけるが、いつの間にか信頼を失い、黙殺され、存在しないことになっていくだろう。

ソーシャルメディアは、「人間関係と信頼保障」の道具である。

つまり生存のための安全保障の武器なのだ。

斎藤清明「今西錦司伝」ミネルヴァ書房

今西錦司(1902-1992年)は、私の師匠の梅棹忠夫先生の、その師匠である。

「長い一生のあいだなにをしてきた、そしてなにをのこしてゆくのか」と今西は自問し、「終始一貫して、私は自然とはなにかという問題を、問いかえしてきたように思われる」と述べている。

科学があつかいする現象は氷山の一角である。氷山全体を論ずる立場が自然学であった。

そして今西は「今西自然学」を確立する。柳田民俗学、梅棹人類学と同様の偉大な学問体系の創立者であった。

今西錦司という名前は、京都学派の棟梁として燦然と輝いていた。

ところが、今回この本を読んで驚いたことがある。それは、今西は遅咲だったことだ。

従来の学問の枠にはまらずに研究をしたため、不遇の時代が長かったのだ。

「万年講師」と言われるほど、講師時代が長かった。しかも無給だった。この点は梅棹忠夫先生も自著で「万年助教授」だったと述べているのと同じだ。

57歳でようやく京大人文研の社会人類学研究部門の教授に就任する。定年は63歳だから教授在任期間はわずか7年に過ぎない。

定年後は岡山大に移るが、65歳で岐阜大学の学長に推され、6年の任期を全うする。

自然学の業績の素晴らしさで、文化勲章をもらうのだが、私は「山岳学」を打ちたてようとした今西の山行の記録が目にとまった。

62歳で400に達していたが、いつか達成しようと夢見ていた「日本五百山」を66歳で達成。

岐阜大学学長を退官した71歳の時に、日本山岳会会長に就任し、山行のペースがあがり、「日本千山」を達成するのが76歳である。10年で500山を踏破している。77歳で文化勲章を受賞。その後も山行は続く。そしてとうとう「日本千五百山」を83歳で達成する。この間7年だった。

その後は、数を数えずに楽しみの登山に変え、85歳の山行を最後とした。

この本の著者は「生きている限りはいつまでも山に登りつづけたい、巡礼者の姿のように、筆者にはおもえた」と書いている。

今西錦司の山行も「巡礼」だったのだ。

今西は地図上に、登った山道や車で走ったところもすべてに赤線を入れていく。赤線が入っていないところに行きたいのだ。

90歳で、老衰で大往生したときの葬儀委員長の吉良竜夫は、「先生に接すると、新しいことに挑戦しようという意欲をかきたてられる。その存在だけで影響を与えることができる稀有の人だった」と述べている。影響を与える人が偉い人だという私の定義によれば、次代の梅棹忠夫、川喜田二郎などのそうそうたる高い山脈をつくったこの人の偉さは格別である。

大興安嶺探検を決定した時の言葉が素晴らしい。

「君たちがいる。そして、わしがいるではないか。われわれにやれなくて、だれがやるのだ」。

今西の文章を読んで思うことは、梅棹先生のひらがな多い、わかりやすい文体は、今西錦司からもらったものではないだろうか、ということだ、

ダーウインの進化論に今西は挑戦した。

ダーウインは進化を自然現象とみて、生物進化の法則を求めようとした。

今西は進化を歴史としてみたから法則性には拘泥していない。

種というものには自己同一性(アイデンティティ)が具わっており、それを維持しながら変わってゆく。主体性の進化論である。

ランダムに変異して進化するのではない。環境変化に対応するために、突然変異の頻度を高め、次に現れてくる突然変異を適応の方向に沿うようにして、小刻みに変異を重ねてゆくうちにあたらしい適応型が変わってゆく。そして新しい種にまで変化していくこともある。これが多発突然変異による進化である。ダーウインのいうような自然淘汰ではない。

- ・ 自分の目でみて、自分の頭で考えよ。
- ・ 陰謀を持ち大目標を秘めて生きてゆく人生のいかに生きがいあるかを、私は身をもって経験してきた。

佐藤雅美「知の巨人」—荻生徂徠伝（角川書店）

柳沢吉保に 31 歳から仕え、8 代将軍徳川吉宗の知恵袋として活躍した儒学の大家・荻生徂徠の伝記。

荻生徂徠は、朱子学を乗り越えようと奮戦した。朱子学を奉じた江戸の新井白石、室鳩巢など木下順庵の木門、朱子を批判した京の伊藤仁斎、東涯の古義堂などを敵として、自らの壮大な学問を構築していった。

この人も遅咲だった。「50 までに名を挙げよ」と吉保から激励を受けている。

世の俊秀が集まってきたのが、46 歳の頃。その後、著述を通じて大家になっていく。不帰の客となったのは 63 歳。

朱子学。

- ・ 世界は理(真理)と気(実体)できている。万物はこの混合体である。理が強い人が聖人、気が強い人が小人。

徂徠の学。

- ・ 方法:どのような場面でどう使うかを考えながら読んでいく。華と和を合すのが吾が譯学、古今を合すのが吾が古文辞の学。学問はみずから学ぶものであって教わるものではない。
- ・ 格物致知:「物」は聖人の教えの具体的な内容、それを習って「格」(まね)き寄せること、つまりわがものにすることが「格物」。そうなれば「知」が自然に明らかになって「知」が至る。それが「致知」である。「人みな聖人たるべし」という者(朱子)は非。
- ・ 道:先王の道は天下を安んずるの道なり。礼楽刑政を離れて道はない。礼とは、儀式、儀礼、宴会などをそれぞれの階級に応じ、それぞれの形式で実演すること。道は天下国家を平定するために聖人が制作したものである。政治を道徳や仁義から切り離れたことで儒学の世界を根底から覆した。身を修めれば天下はおさまるといのは仏教や道教の悪影響を受けているのだ。吾国の神を敬うことが聖人の道である。
- ・ 業績:足高の制、上げ米の献策によって、幕府の財政を建て直した。

今後の課題。

- ・ 徳川吉宗は江戸期を通じて抜群の政治家だったようだ。吉宗という人物と政治の研究が必要である。
- ・ 江戸時代は儒教が盛んであったが、明治になってあつという間に消えてしまった。この本では知と知を競い合ったことが明治維新を準備したとある。つまり脳力を磨いたのが儒教という学問であったという結論である。それでは同じく儒教を奉じた清や朝鮮はなぜ近代化遅れたのかが説明できない。

2014年9月

青木雄二「ゼニの人間学」(ロングセラーズ)

漫画「ナニワ金融道」で多くの読者の人気を呼んだ青木雄二。

漫画というメディアを使えば、わかりやすくなる。、日本の国語教育なんて、けっきょくのところ、そんなレベルでしかなかったということである。

44歳、デビューとしてけっして早くはなかったが、、さまざまな人生経験がなければ難しいだろう。

僕はずっと1DKのマンションを仕事場兼住宅にしている。

お見合いを50回くらいしている。、49歳で結婚した。、職業を30回以上も変えてきた。、。

僕は、世の中の裏側を、もっとどんどん暴露していくつもりである。

理想の世の中をつくりだすためには、一歩でも半歩でも前進するべきだと思っている。

僕は、漫画によって、社会の矛盾を見つめていこうと考えている。

青木雄二「青木雄二金言集—ゼニ一日一言 365日」(廣濟堂出版)

本当のことを教えない日本の教育は北朝鮮と同じ洗脳教育やで。

客の話は値千金。タクシーの運ちゃんみたいにアンテナをはれ。

ギャンブルは、損する仕組みなんや。

労働がともなわんものはいつまでも続かんで。

ツキのある奴とつきあうようにするのが成功の秘訣や。

人が言わんこと、やらんことをやれば仕事がやってくる。

森光子「人生はロングラン—私の履歴書」(日本経済新聞出版社)

1920年生まれの国民的女優。89歳で「放浪記」2000回を達成。

一人の役者が主演し続けた舞台としては最長。

幸せはいつも目の前でユーターンする。

あいつよりうまいはずだがなぜ売れぬ

休めば忘れられるだけなのです。

私は人との企画にかかわると長くなるのです。

私は若いころから、すこしずつ齢をとっていく役の多い女優でした。

ヒンズースクワット毎日 150 回。

最初の結婚;日系二世の米軍人。入籍後 1 週間で別れ。ハワイに行かなかった。

二度目の結婚;テレビのディレクターの岡本愛彦。4 年で離婚。年齢を 3 つ偽る。

池井戸潤 「銀翼のイカロス」 (ダイヤモンド社)

半沢直樹が主役のビジネス痛快小説。

経営危機に瀕する巨大航空会社「帝国航空」を巡る人々が織りなす波乱万丈のストーリー。

「債権放棄」を巡る日本航空の破たん時のごたごたを思いだしながら読んだ。

主役の半沢の勤める東京中央銀行の中野渡頭取は、政治家と政府系銀行、帝国航空再生タスクフォースとの駆け引きの中で決断を迫られる。その時の述懐が読者の心に響く。

「信用は一日にしてならず。しかし失墜するのはあっという間だ」

「我々が間違わなければ、必ず気持ちはひとつになれる。そのためには、決して逃げてはいけない。他人に転嫁することなく、真摯に全てを打ち明け、そして責任を果たしていくことが重要だ。若い行員たちの将来のために。この銀行の未来のために。それこそが我々経営者たる者の覚悟の在り処であると思う。」

「頭取でなくなっても、私はバンカーであり続けるだろう。バンカーである以上、常に何かと戦っていなければならない。我々に休息などない」

作者の池井戸は、銀行に働く人々や、帝国航空にも愛情を持って、書き進める。

「搭乗ゲートまで客室乗務員が誘導に出ていましたよ。変わってきているんじゃないですか」

「帝国航空を政治の道具にし、挙げ句。10 億円のタスクフォース費用まで同社につけ回す。こんなバカな話がありますか」

「OBの企業年金問題もカタがつきそうだし、社員や経営陣の意識だって変わってきて

いる。帝国航空は変わるはずだ」

「おもしろい、銀行員人生だったなあ。愉快地に働かせてもらった」という先輩に、「オレも、いつか最後に、そういつてみたいですよ」と半沢は本気で言う。

「ひっそりと銀行を去ろうとも、この男が生きてきた道のりは尊く、そして光に輝いている。そのことを半沢は知っている。かくてまたひとり、勇者は消えゆき、後に伝説が残る。それを引き継ぐのがオレの使命だ。いま半沢は、はっきりとそう胸に誓ったのであった」

池井戸潤のビジネス小説は、組織で真面目に働く人々や、彼らが属す組織そのものに愛情を持って描き出す。

不正と保身に走る、どこにでも巢食っている人間には鉄槌を下すが、基本は日本のビジネスマンを応援する。

それがこの人の小説が心を打つ要因だから、読後感が爽やかになる。

麻生晴一郎「反日、暴動、バブル——新聞・テレビが報じない中国」(光文社)

先日会った麻生晴一郎さんは、どこに住んでいるんですかという私の問いに、ごく自然に「東アジアに住んでいます」と答えた。その麻生さんの著作を 2 冊読んでみた。「反日、暴動、バブル——新聞・テレビが報じない中国」(光文社新書)は、実に興味深い本だった。

発刊は 2009 年であるから、反日暴動を経て、北京オリンピックが終わって、次の大規模イベントである上海万博をそろそろ見据える時期だ。

体制からはみ出しているアーティスト、サークルやサロンで語り合う人々、ロック村の様子、人権弁護士の活躍、四川大地震で登場したボランティア、農村を作りかえようとする NGO、など市民とでも呼ぶべき人々が様々なテーマで台頭している様子がみえてくる。

「本当に愛国運動を展開するのだったら、なぜ学生だけでなくわれわれ庶民も仲間に加えないんだ」という庶民の声(北京芸術村 抵抗と自由の日々。1999 年)、そして本書の指摘にあるように、日本による戦争犠牲者とはまったく関係のない反日運動でしかない、など中国の動きは既成概念では理解できない。

全体をつかもうとする目ではなく、ミクロの動きに身を投じ、それを丁寧に積み重ねていこうという方法論は興味深い。そして彼の描く中国像はメディアにはお目にかかれないうリアルな中国像である。

最後の方で、「反日」の本当のメッセージは「民を見つめろ」だ、という彼の指摘には納得した。

以下、「中国への接近の方法論」と「みえてきた中国の本質」という視点から大事なところをピックアップ。

中国取材の方法論

- ・ 新しい出来事に正面からあたり、これを軸として可能な限り「中国」像を修正していく。
- ・ 中国において少しずつ台頭してきた新しい現象や人と共に歩もうとすることが必要
- ・ 中国を知ることは仮説(予想)→違和感(現実)→新たな仮説づくり(修正した予想)の連鎖。
- ・ 探し始めると対象が自然に見つかっていくのが中国取材。
- ・ 取材中はノートを片手に一語も漏らさぬ気持ちで相手の話を書き写す。
- ・ 中国で人や集団を出来事に会うためには「探す」ことが大切である。そのためには友人・知人を数多く作り、その上で今自分が差置gしていることをことあるごとに話す。
- ・ フリーのライターとして活動する上で、あらかじめ出版社に企画を通して取材することを原則として行わない。、、、闇の記者で、闇の存在である辺縁を取材しよう。
- ・ 対象と出会うためには、会うよりも先に会いたいと思わなければならない。探すことは疑問から始まる。
- ・ 一部分にすぎないのではなくて、一部分でありうるということなのではないのか。一部分であることは、特定の立ち位置を持った主体だということである。
- ・ 広い視野を持ちつつも、あえてその中の一部分に収まろうとする態度である。それが結局、中国と関わるということなのではないか、。
- ・ サロンを通じて、人権や環境などいろんな分野で活躍する民間人と出会うことができる。政府を通じては会うことができない、。
- ・ 繰り返し訪ね、新たな出来事に会うたびに過去を振り返ることで、理解が深まってくる。
- ・ 常に一つの態度を持つようにしなければ相手の言い分に引っ張られて頭がこんがらがってしまい、相手にされなくなる。
- ・ 情報がきわめて不透明な中で統計や客観的論証にこだわりすぎることは、ともすれば誰も触れたがらぬ闇を膨らませていくことに「なりかねない。
- ・ 中国と交流する上では、党も含めて無数に存在する行動主体のいずれかに身を寄せ、それらと自覚的に交流をしていきながら中国を見ていくことが必要
- ・ 漠然と中国を相手にするのでは、中国のいかなる価値観とも触れ得ない。、、、立ち位置の設定の必要性である。
- ・ 中国の何かを好きになること。全体に目を配りつつも、あえてその中の一部分に身を投じ、一部分たりうることから社会に働きかけようとする。
- ・ 大切なのは小さな価値を突きつめること。、、、少数との絆に立って日中関係の世論に働きかけ、別の絆との連帯を探ること。その相吾が真の民間交流に違いな

い、、、壮大なテーマは卑小な一つ一つを包括するのではなく、ともすれば壮大であるがゆえに卑小な一つ一つにすらなりえない。したがって、卑小な一つ一つの挿話がいつまで経っても増えないのである。

- ・ 認識とは、いくつもの事実を経ながら一枚一枚とベールをはいでいかななくては到達しない。

中国像

- ・ 人民とは異なる種族の人たち。自由業、経営者、ホワイトカラーや、あるいは職種にかかわらず多くの若年層が中心であるこうした人たちのことを、本書では市民と呼ぶことにする。
- ・ 「でも日本が好きか嫌いかわれば、個人的にはまあまあだ」、、、、つまり、彼らの行為は、日本への理解・感情を超えた何ものかだったのである。
- ・ デモをすることが楽しい、といった雰囲気があちこちから出ていた。、、、反日というよりはノリとでもいうべきものだろう。
- ・ 日本の民間と中国の政府・人民の交流、すなわち一方通行の民間外交であったと言ってよく、国交のなかった日本の草の根に親中派を築く狙いがあった-愛国教育が「反日」を生み出したかという、まったく影響がないわけではないにせよ、ストレートには結びつけにくい
- ・ 「愛国教育、そんなこと関係あるものか。ぼくは学校を出てからネットで日本のことを知ったのだ」。
- ・ 「反日」の前後の北京で頻りに聞かれたのは、日本批判でなく中国批判だった。
- ・ 愛国教育が大々的に行われたとしても、その一方でもっと多様な日本情報が流布されていたとしたら、、、「反日」はもう少し違った形になっていたはずだ。
- ・ 若手の有名作家・余傑は「多くの人が不満を持つ中で合法的にそれを爆発させる対象が日本しかなかった」
- ・ かつては今ほど民間人が権利を主張することはなかった。、、、中国のある種の発展を示すものに違いない。
- ・ 21世紀に入って台頭してきた権利・自由・平等を求める新しい民間の動きは、、、民主化と言うよりは民間化、市民社会化と言うべきかもしれない。
- ・ 「政府ができないことは私たちでやっていくしかない」、、、、政府の力を見限っている点において、官方に対する醒めた市民感覚にきわめて近い意識だ。」
- ・ 少数派とは一党独裁に収まりきれない存在のことであり、人口が少ないことを意味しない。
- ・ 今の中国で確かに市民と呼びうる新しい民間勢力が台頭し、自由に物を言い始め、保身よりも民主や公益を大切にしている人が出てきている
- ・ 「反日」の本当のメッセージは「民を見つめろ」だと、ぼくはいま考えている。

麻生晴一郎「北京芸術村—抵抗と自由の日々」(社会評論社)

水野和夫「資本主義の終焉と歴史の危機」(集英社文庫)

資本主義が終焉する。世界を覆うゼロ金利時代(利子率 2%以下)は利潤率ゼロ時代のことであり、ゼロ成長となる。それは資本主義の死を意味する。

200 年間の長い 16 世紀の封建社会を終えて、17 世紀以降の近代国民国家を支えてきた資本主義が終焉に向かい、中間層の没落によって民主主義も崩壊していく。その原因はフロンティアの消滅である。空間フロンティアの限界に突き当たった資本主義は電子空間(ITと金融の結婚。1971 年から)にフロンティアを求めたが、それは延命でしかない。シェールガス革命も同様だ。日本は資本主義の最終局面に立っているから、延命のための経済政策を卒業して次のシステムへの移行に全精力を傾けるべきである。時間は迫っている。預金が増えなくなる 2017 年以降は金利の上昇で財政はクラッシュし、日本は壊滅する。財政の均衡を取り戻し、借り換えを続けて借金を 1000 兆円で固定し、国内での豊かな生活を享受していくのがいい。定常状態を実現するには人口 9000 万人、安いエネルギーで石油高騰の影響を避けるべきだ。

以上が著者の主張である。きわめて説得力のある、そして遠大な歴史観である。

利子率の低下は 1974 年から始まった。そのためアメリカは 1971 年からフロンティアとして「電子・金融空間」を創出し、1995 年には国際資本が国境を自由に超えることができる金融帝国を完成させる。インターネットブームと住宅ブームを起し 2008 年までの間に 100 兆ドルのマネーを創出した。それは市場を盲信する新自由主義の流であり、企業は労働者の賃金を下落させて、格差を拡大させ、中間層を没落させた。

グローバリゼーションとは、中心と周辺とからなる帝国主義的資本主義のことである。強欲と過剰の資本主義だ。この時代には貧富の二極化は国内でも現れる。

リーマンショックを経て、またバブルが巨大化し、余剰マネーは 140 兆ドルとなり、レバレッジを高めた数倍から数十倍のマネーが徘徊している。実物経済は 74.2 兆ドルしかない。その投資先はIT空間とBEICSなどの新興国(必要な資本は 9.3 兆ドル)であり、それは新興国の過剰設備になり日本以上のバブルを生む。そして資源価格の冒高騰を生み出す。この状態でマネーを増やせば資産価格の上昇というバブルになる。バブルの後始末は金融システムへの公的資金投入となり、ツケは結果的に国民が負う。

1945年から1973年までに実現した福祉国家は減びつつあり、資本は法人税率の低下や雇用の流動化によって、延命を図ろうとしている。

中国の一人当たりGDPが日米に追い付く 2030 年代初頭まで資源価格の上昇と新興国のインフレは収束しない。世界全体のデフレが深刻化、永続化していく。中国バブルの崩壊は甚大な影響が日本と世界に及び世界恐慌状態となる。その先には、新しい政治・経済システムが必要となる。次の覇権は、資本主義とは異なるシステムを構築した国が握るだろう。

日本は1992年の宮澤内閣以来の総需要対策で200兆円以上の外注需要を発生させたが、飽和点に達した日本では内需中心の持続的成長軌道には乗せられなかった。非正規雇用者を増やし、浮いた社会保険や福利厚生費のコストが企業の利益となった。

世界で見ると、収奪の対象はサブプライム層、ギリシャなど南欧の人々だ。

2013年の非正規雇用者は約2000万人、年収200万以下の給与所得者は約1000万人、生活保護受給者は200万人。

過剰労働、超過勤務の解消、労働規制の強化による正社員としての雇用の義務化などが必要だ。

2014年10月

アラン「幸福論」(岩波書店)

「幸福論」と銘打った本がいくつかある。古典もあるし、現在の賢人の書もある。

その一つ「アラン 幸福論」(岩波文庫)を読了。

アラン(1868-1951年)は、フランス人で高等中学校の哲学教師。

新聞に20年以上にわたって「プロポ」(哲学断章)を毎日書き続けた。その量は日本語換算で、400字詰で4.5枚前後(1800字)になる。プロポというのはアランがつくりだした文学形式だ。執筆時間は2時間。書きたい日も書きたくない日も毎日書いたそうだ。総計は5000。アランは現代のブロガーのようだ。

この中から幸福に関する93を取り出して「幸福論」としてまとめた本は、フランス文学の傑作と言われ、日本でもよく読まれてきた。

「いらだつこと」「憂鬱」「医学」「悲劇」「宿命」「運命について」「心遣い」「夫婦」「賭け」「エゴイスト」「労働」「大げさな言い方」「とんまな人間」「ストア主義」「友情」、、、など幸福に何らかの関係がありそうな項目が並んでいる。

アランは、読者は「幸福概論」を期待しているが、幸福は細切れに分けられているものと言う。この中から、共感を感じるものを取りだしてみたい。

・ 人間が幸福であるというにおは、何かを欲する時と、作り出す時だけである。、、

仕事というものはすべて、自分が支配者であるかぎりはおもしろいが、支配されるようになると、おもしろくない。

- ・ 自分でつくる幸福、、、それは学ぶことだ
- ・ 自由に働くのはもっとも他の紙が、奴隷のように働くのはもっともつらい。
- ・ あの仕事に専念した幸福な人びとをごらんください。みんな始めている仕事に精を出している。
- ・ 憂鬱な人に言いたいことはただ一つ。「遠くをごらんください」。
- ・ 上機嫌療法
- ・ 脳細胞にマッサージを与える方法、、、考えを変えるだけでよいのだ。
- ・ 愛の情念は健康によいものであるが、憎悪は反対に、悪いものだ
- ・ しあわせだから笑っているのではない。、、笑うからしあわせなのだ。
- ・ 仕事を規則正しくすること、そして困難を、さらなる困難をも乗り越えること、これがおそらく幸福に至る正道である。、、、幸福とは、報酬など全然求めていなかった者のところに突然やってくる報酬である。
- ・ 幸福になる方法、そのための第一の規則は、自分の不幸は、現在のものも過去のものも、絶対他人に言わないことである。
- ・ 悲観主義は気分によるものであり、楽観主義は意志によるものである。

アランは自分自身を「あのわざとらしい楽観主義、あの盲目的な期待、あの自己欺瞞」と非難した男の言葉を紹介している。意志の所産である楽観主義が幸福を招くようだ。

バートランド・ラッセル「幸福論」(岩波書店)

20世紀最高の知性と呼ばれたイギリスのバートランド・ラッセル(1872-1970年)は、98歳の長寿だった。哲学者、思想家、平和活動家であり、さらに80歳で4度目の結婚をし、核廃やベトナム戦争反対運動を展開し、89歳のときには核兵器反対の座り込みをして7日間の抑留にもあっている。クールヘッドとウオームハートを兼ね備えた一流の人物だったということだろう。

そのラッセルが58歳の時に書いたのが1930年の「幸福論」を読了。

人はみな周到な努力によって幸福になれるという信念に基づいて書かれている。

経験と観察によって確かめられた「常識」を述べている。

第一部は「不幸の原因」をあげている。競争、退屈、疲れ、ねたみ、罪の意識、被害妄想、世評、、、などである。

第二部は「幸福をもたらすもの」として、熱意、愛情、家族、仕事、興味、努力とあきらめをあげ、最後に幸福な人という章を設けている。

- ・ 仕事を面白くする主な要素は、技術の行使と建設である。熟練を必要とする仕事はすべて楽しくすることができる。このとき必要な技術は、変化に富むか、無限に向上させうるものでなければならない。建設は次の性向へと続いていくから行き詰まることはない。偉大な建設は最大の満足を与えてくれる。
- ・ 仕事以外の興味をたくさん持って、仕事を忘れるべきときに忘れよう。
- ・ 中庸は面白くないが真実の教義である。極端を避けよ。努力とあきらめのバランス、釣り合いの感覚を保とう。
- ・ 幸福は外部と内部に依存している。食と住、健康、愛情、成功、尊敬などが不可欠の条件だ。

この本の中で感銘を受けたところを抜き出す。

- ・ 教育は楽しむ能力を訓練することにある。文学、絵画、音楽などに見識のある楽しみを見いだせるのが「紳士」のしるしの一つだった。
- ・ 幸福には二種類ある。地味なものと凝ったもの、動物的なものと精神的なもの、感情的なもの、知的なもの、。
- ・ 安心感をいだいて人生に立ち向かう人は、不安をいだく人よりも各段に幸福だ。この安心感を生み出すのは、人から受ける愛情である。

優れた言葉を抜き出そうとすると、そのために線を引いた箇所は多くなかった。唸るような名言は少ない。淡々と幸福への処方箋を書いている。「偉大なるコモンセンス」と呼ばれたラッセルらしい。

ヒルティ「幸福論」(岩波文庫) 三部作

ヒルティの「幸福論」は学生時代に手にしたことがある。
改めて読み直して、その内容の豊かさに感銘を受けた。
「幸福論」では出色の高峰である。

ヒルティ(1833－1909 年)は、スイス人で、医師の父と陸軍将校の娘の母との間に生まれた。6歳で小学校、11歳で州立のギムナジウムに入り宗教教育を受けた。18歳でドイツの大学に入り法律学を中心に哲学や歴史を学ぶ。翌年ハイデルベルグ大学に移り、22歳でドクターの称号を得て卒業。地元のクール市に帰り弁護士を開業し、正義感にあふれた有能な弁護士として18年間を過ごす。そしてスイス陸軍の裁判長、陸軍司法の指導者となっていく。

35歳の時に「民主政治の理論家と理想家」という論文で学界に認められて、40歳で首府ベル大学の正教授に招かれる。法律を講じながら、多年の実務経験から得た人間に関する知識と、読書から得た優れた見識を示した。

57歳から代議士に選ばれて、20年近く、死ぬまでその職にとどまった。

66歳、ハーグの国際司法仲介裁判所の初代スイス委員に就任。

73歳、静養先のジュネーブのホテルで心臓麻痺のため絶命する。享年73歳。

学者、政治家、陸軍法務官、歴史家でもあったヒルティは、老年に至るまで元気な勉強家だった。多方面な読書と旺盛な著述家であることも特徴である。また公職の傍ら、婦人参政権運動、禁酒運動、婦女売買防止のための闘いなど、公益事業にも貢献している。

世界的に有名な古典となった「幸福論」は、学問体系としてではなく、エッセイ風に自由に書かれている。第一巻の好評を得て、その後の寄稿や講演をもとに第二巻、第三巻を書いている。

ヒルティの「幸福論」は、幸福に向かう実務家らしい仕事の手引きでもあり、そして翻訳者の草間平作の言うように「精神的健康」に向かう書でもある。

第一部。

- ・ 仕事の上手な仕方は、あらゆる技術のなかでもっとも大切な技術である。
- ・ 働きのよろこびは、自分でよく考え、実際に経験することからしか生まれない。
- ・ 絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最上の幸福な状態なのである。
- ・ 真の仕事ならどんなものであっても必ず、真面目にそれに没頭すれば間もなく興味がわいてくるという性質を持っている。人を幸福にするのは仕事の種類ではなく、創造と成功の喜びである。
- ・ 我を忘れて自分の仕事に館完全に没頭することのできる働きびとは、最も幸福である。
- ・ 何よりも肝心なのは、思い切ってやり始めることである。
- ・ 毎日一定の適当な時間を仕事にささげることである。
- ・ 一番よいやり方は、比較的せまい範囲を完全に仕上げ、そのほかの広い範囲については本質的な要点だけに力を注ぐことである。
- ・ 仕事を変えることによって、必要な休息と同じくらいに元気が回復するものだ。
- ・ 繰り返すこと。輪郭がつかめ、細部が視、理解が精密になっていく。
- ・ 教育の秘訣は、仕事(勉強)に対する愛好心と熟練を得させ、一方で適当な時期に偉大な事柄に生涯をささげる決意をいだかせるように仕向けることだ。
- ・ 教師の職業には、その最下級から最上級にいたるまで、すべて充分個性の発達

した、いきいきとした人格が最も必要である。

- ・ 人格は、自己教育と模範によって養われるのであって、自ら獲得すべきもので、教え伝えるものではない。
- ・ 自分をも他人をも責めないのが、教養者の、完全に教育された者の、仕方である。
- ・ 善行に必ず付随する主な報酬は、善は常に善を生み、おうしてその全行者にいつまでも続く利益を与えるのである。
- ・ 真面目に、一途に、そしてこれと相容れない他の一切の努力を犠牲にして得ようとするならば、何によらず必ずそれを得ることができるものである。
- ・ 自己教育はすべて、ある重大な人生目的をおぼろげに追求し、これに反する一切のものから遠ざかる意志、断固たる決心とともに、始まるものである。
- ・ 手早く仕上げられた仕事が最も良く、また最も効果的だ。
- ・ 学問と行動を交互に行うことは、一般に人の精神を最も健康に保つ方法である。
- ・ きみの学んだもの、きみに托されたものをどこまでも守りなさい。
- ・ 精神的自由
- ・ 他人を憎んではならない。他人を崇拜してもいけない。、彼らを裁いてもならず、裁かせてもならない。
- ・ その生涯はたとえ辛苦と勤労であっても、なお尊いものであった。これこそが幸福なのである！

第二部。

- ・ 人間の真の誠実は、たとえば礼儀正しさと同じように、小さなことに対するその人の態度にあらわれる。
- ・ どうしても自分の業績について語らねばならない場合は、平静に、ただ事実にして語るということは、一つの大切な心得である。
- ・ ひとはそれぞれ自分の型を完成しなければならない。どこの国の人間か、まるでわからないような人は、不愉快な現象である。
- ・ 悪と出会ったら、それを赦すよりも忘れる方がはるかにまざっている。
- ・ 教養とは、形のない生の状態を、それが可能なかぎり最上のものへ進展した状態、あるいは少なくともそれに向かって妨げなく成長しつつある状態に仕上げることをいうのである。
- ・ 最高のものをめざして努力しなさい。
- ・ 教育が、若い人々の心に理想を求める精神を植えつけ、なお若干の良い習慣を身につけさせ、あらゆる卑俗なものに対する嫌悪の心を養わせることに成功すれば、それで教育はその最も本質的な任務を果たしたことになる。
- ・ 人生のほぼ半ばごろに、これまでなしとげた一切のことに対して不満を覚える瞬間がやって来る。

- ・ 老年は、たいてい突然はじまるものである。
- ・ 年老いた人たちの生活には 3 つの考え方がある。一つは生活享樂者、二つ目は晩年を上品な無為のうちに過ごす悠々自適の老人、第三は、より高いのちへの前進者だ。それは常に鍬から手を離さず、決して後ろをふりかえらず、絶えず眼をこれからと歌うすべきものに注いでいる生活である。
- ・ 「うしろをふり向くものは、あと戻りしなければならぬ」。老年期の生活目的は実を結ぶことであって、休息することではない。回顧に停滞するのは退化であって、真にすぐれた人たちには決して認められないことである。、このような老年の特徴は、その円熟である。
- ・ 若さを失わない精神的方法としてもっとも大切なものは、「常に新しいことを学び」、とにかく何ごとかに興味を持ち、たえず何か前途の計画を立てていることであろう。

第三部。

- ・ 質の低い幸福へいたる道。財産、名声、仕事、力、健康、権力、高貴な生まれ、。
- ・ 導き。必要な、適当な時期に、書物や、個々の言葉(ときには人間にも) 出会うことである。
- ・ 仕事中に倒れるのが最も望ましい。老年には以前にもまして、日々の思いも行いも、現在と未来に向けられていなければならない。
- ・ あらゆる国々、時代、階級、の差別なく見られる聖徒たちの共通の特徴。謙遜、親愛、恐れないこと、仕事。
- ・ 教育の目的は 3 つ。有益な知識を修めること。喜んで仕事をする道を習うこと。釣り合いのよくとれた性格を養うこと。
- ・ 苦しみに出会ったら、まず感謝するがよい。、こぼしたりせずに、この道を進み給え。、これこそ、高きをめざす一番の道である。
- ・ 過去を回顧することは、ほとんど常に退歩を意味する。
- ・ 最後の息をひきとるまで精神的に澁刺として活動をつづけ、ついには神の完成された器となって「仕事のさなか」に倒れること、これこそ正常な老年の正しい経過であり、また、およそ人生の最も望ましい終結である。
- ・ 使徒パウロ「滅びるものではなくて、滅びないものに目を注ぐ人々にとって、肉体はしだいに朽ちても、精神は日ごとに新しくされてゆく」
- ・ われわれの地上生活の最後の時期は、およそ下り道ではなくて、はるかに高い存在の可能をめざすのぼり道でなければならない。
- ・ より高きをめざして進め。

曾野綾子「辛口・幸福論」(新講社)

- ・ 幸福になる道は、理不尽なものだ。自分自身で泥だらけになって探るほかはない。
- ・ 私は大人になって死にたい。それゆえにこそ、簡単に人を非難せず、自分の考えだけが正しいとも思わず、短い時間に答えを出そうとは思わず、絶望もせず落胆もせず、地球がユートピアになる日があるなどとは決して信じず、ただこの壮大な矛盾に満ちた人間の生涯を、実に面白かった、と言って死にたいと思う。
- ・ 人間は、老年になったら、いかに自分のことを自分でできるか、ということに情熱を燃やさねばならない。
- ・ 仕事が道楽になった時、初めて、その人はその道で第一人者に近くなれるのである。
- ・ 都会には実にたくさんの方がいるから、少くくらい得意なことがあっても思い上がる隙がないからである。

川村元気「仕事。」(集英社)

映画製作者で小説も書く川村元気が、各界の著名人にインタビューしたものをまとめた本。仕事術と人生論を対談形式でまとめている。読みやすいのでざっと読んでしるしをつけたところをピックアップ。

- ・ 山田洋次:批判する頭のよさよりも、いいなあと惚れ込む感性が大事。
- ・ 沢木耕太郎:3年間歯を食いしばって名刺の代わりになるような仕事を完成させれば、そこから自由が拓ける、。
- ・ 杉村博司:自分に飽きないことが大事。30代前半までにやることが見つからなかったら、人生やることないよ。
- ・ 倉本聡:下積みをしておかないと、長続きしない。
- ・ 秋元康:嫉妬も中傷も受け止めて、仕事でオセロをひっくり返す。
- ・ 宮崎駿:何でも自分の肉眼で見る時間を取っておいたほうがいい。
- ・ 糸井重里:これからのテーマは「人」です。
- ・ 篠山紀信:仕事を学ぶには、昔話を聞くより一緒にやったほうがいい。
- ・ 谷川俊太郎:注文があることはすごく大事だ。他者から求められているってことは本当に幸せなことだ。
- ・ 鈴木敏夫:西洋の作家はみんな最初にラストから考える。日本は、つれづれなるままに話をすすめていく。これは日本の伝統。
- ・ 横尾忠則:ジャンルを超えた仕事をする、自分の中の既存価値が崩れる。それはある種の快感。
- ・ 坂本龍一:下を見ちゃいかん

彼ら 12 人はクリエイターでインタビュアーもそうだから、クリエイティブに仕事をする方法や考え方が主題となっている。

この本のオビにそれぞれの人の一番大事と思われる言葉が載せてあるが、私の心に響いた言葉とはかなり違う。

渡辺京二「無名の人生」(文藝春秋)

エッセイや人生論などは、その人の「幸福論」であるともいえる。

渡辺京二「無名の人生」(文春新書)も、自分の一生の主人であろうとした地方在住の男の幸福論だ。著者名とタイトルに惹かれて読了。

この渡辺京二氏が書いた「逝きし世の面影」(平凡社)という文庫版600ページの大部の書物を読んだことがある。この本の記述の美しさにひかれて一気に読み終えるのが惜しくなり、毎日少しずつ読み進めるとい読み方をしてみた。一ヶ月ほどは朝の短い時間、心が洗われる様なすがすがしい気分を味わった。正真正銘の名著である。

この語りおろしの本は、好きなことだけをやってきて、それでもなんとかやれると、励まされる人がいれば幸いというタッチで書かれている。

章立てのタイトルは、「人間、死ぬから面白い」「私は異邦人」「人生は甘くない」「生きる喜び」「幸せだった江戸の人々」「国家への義理」「無名のままに生きたい」「成功」「出世」「自己実現」などはくだらない、というメッセージで、生きるのがしんどい人々への応援歌である。

- ・ 人間の生命に限りがあるのは、退屈さにピリオドを打つためではないでしょうか。
- ・ 人間にとって大切なのは、「自分中心の世界」、コスモスとしての世界です。
- ・ 地方にいて知的ディズアドバンテージを感じたことは、一度もありません。
- ・ 自分が何をやりたいのか、何が向いているのかが分かったら、一人前になるまで辛抱してやればいい。
- ・ 清潔な生き方を目指したほうがよほどいい。、、心の安定が得られるし、澄んだ気持ちで生きてゆける。
- ・ 人間が生きていくうえで何が大事か。どんな異性に出会ったか、どんな友に出会ったか、どんな仲間とメシを食ってきたか、これに尽くされると私は思います。
- ・ 私の理想は、無名のうちに慎ましく生きて、何も声を上げずに死んでしまうことです。
- ・ 「陋巷に生きる」というのが好きで、理想の生き方だとさえ思うのです。

人生観、幸福論というのは、やはりその人の性格に大いに影響を受けていると思う。自分とは違う人生観ではあるが、共感するところもある。

「評伝 宮崎滔天」「北一輝」「もうひとつのこの世 石牟礼道子の宇宙」など、渡辺京二の本を読むことにしたい。

伊集院静 「ノボさん 小説・正岡子規と夏目漱石」 (講談社)

伊集院静が正岡子規全集を2年簡にわたって読み込んで、それからおもむろに筆をとって小説に仕立てあげた作品である。この全集は素晴らしい出来だったそうで、子規の魅力が満載だと伊集院は別のところで語っていた。

わずか36年の短い生涯の中で、俳句と短歌の革新を成し遂げた偉人、ベースボールの導入者、そして人が自然に寄ってくる魅力を備えた人物、それが正岡子規だ。その子規と同年生まれの日本小説の原型をつくった文豪・夏目漱石との肝胆相照らした友情の物語でもある。

子規という人物の魅力が細かいエピソードを通じて伝わってくる本だ。

子規という号は、結核という病を得て赤い血を吐く自分を、時鳥(ホトトギス)が血を吐くまで鳴いて自分のことを知らしめるように、自分の血を吐くがごとく何かをあらわそうと決意し、その別名をつけたものだ。

また漱石という号は、唐代の「晋書」にある「漱石沈流」に因んだものだ。石に漱(くちす)ぎ、流れに枕す、という意味で、負け惜しみの強い変わり者を意味している。もともと、百ほどの号を持っていた子規が使っていた号だが、漱石に譲っている。

さて、この小説の中では、子規が行った俳句や短歌の革新のために勉強した方法の興味が湧いた。

- ・ 「俳諧年表」と題して俳諧の歴史を研究した。同時に「日本人物過去帳」と題して俳人の研究をした。そして、「俳諧系統」と題して、俳人の系統を一枚の大紙面に罫線を使って系譜としてまとめる作業を行った。年表、人物、系統表はすべて連動していた。
- ・ 分類の基本は手に入る古い句集を片っ端から読み、傾向をつかみ、そして四季に分類したり、題材別にしたりした。丁寧な作業だった。子規は分析、分類において並はずれた能力を持っていた。
- ・ 半紙を糊でつなぎ合わせた大紙に俳書年表、俳諧師たちの人物過去帳、俳諧の系統、血統を分類した。在野の句集の一句一句までも丹念に書き写し、分析した。

この本の中に、俳句や短歌がときおり出てくる。

短いが故に読者の心に直接届いてくる。寺山修司が亡くなる前に「しまった。俳句を

もっとやっておけばよかった」と叫んだことを思い出した。俳句や短歌は「残る」のである。

- ・ 漱石が来て虚子が来て大三十日(おおみそか)
- ・ 有る程の菊なげいれよ棺の中(漱石)
- ・ 筒袖や秋の柩にしたがはず(漱石)
- ・ 手向くべき線香もなくて暮の秋(漱石)

イギリスから帰国した漱石は 2 年後に、子規の創刊した「ホトギス」に最初の小説「吾輩は猫である」を発表し、翌年には「坊ちゃん」、「草枕」を発表した。子規がいなければ、文豪漱石も誕生してはいなかっただろう。

東浩紀「弱いつながり—検索ワードを探す旅」(幻冬舎)

ネットは強い絆をさらに強くしていくメディアであり、ネットは階級を固定する。そこから逃れるために旅をしよう。新しい検索ワードを探すそう。ネットを離れる旅ではなく、より深くネットに潜るために旅に出よう。

以上がこの本の主旨である。

逆説的だが、正しい。新しい体験に身をさらすことが大事ということだ。

- ・ 日本語だけで検索するのをやめて、アルファベットで検索することが重要。
- ・ 経験や知識よりも、顧客の要望に応じて検索する能力が重要。
- ・ 歴史認識を共有できないという認識の共有
- ・ 弱い絆は偶然性の世界。偶然に身を委ねよう。それで情報の固定化を乗り越えられる。

グーグルの登場以降、私たちを取り巻く知的環境は、個人個人にカスタマイズされてしまった。

自分の知識、欲望、友人などは、グーグルからの情報提供によって、自分と思われるものを知らないうちにより強化していく。だから自分を取り巻く世界はむしろ狭くなっていく。

新しい驚きからしだいに遠ざかっていくことは危機である。思いつく検索キーワードはマンネリになっていく。必然の世界に深化である。強い絆の世界だ。

これを突破していくには、新しい体験が必要だ。偶然を大事にすることが自分らしく生きることにつながる。弱い絆で自らを囲む。そして旅に出ることだ。

もともと旅の効用と言われていた「五感をフル動員した驚きと発見と自己認識」は、今も、いや今だからこそ有効ということだろう。グーグルとソーシャルネットワークからの

逃亡、主体性の回復がこの本のテーマだ。

中村修二「考える力、やり抜く力 私の方法」(三笠書房)

2000年あたりに書かれた本の緊急再出版。

冒頭の「ノーベル賞に最も近い男」というマスコミ評、最後は「ノーベル賞は通過点」という記述。そして2014年に本当に受賞。

この人の魅力は、「独学」という点だ。独力で学び、自分の頭で考え、試行錯誤して問題を解いていく。この姿勢に学ぶべきである。地方の小さな企業の片隅で努力し、それでノーベル賞もとれることを示したのが素晴らしい。

他の人たちのことを勉強することはむしろ害が大きいと私も思う。自分で考えることこそが大事なことなのだ。

- ・ 一点突破、全面展開、宇宙遊泳
- ・ 自由を求めてアメリカへ行く。
- ・ すべてを自分でやる
- ・ 自分にとってわかりやすし方法で物事を理解していけばいい。自分なりの方法で理解する。これが自分流。
- ・ 自分でやればさまざまな創意・工夫が生まれてくる。
- ・ 人真似を避けて、実験結果を深く考え抜き、自分のノウハウが詰まった装置を駆使することで、独創力を発揮できた。
- ・ 他人の論文や参考文献は一切読まない。自分の実験結果だけから考えて研究を進めようと決意した。
- ・ やりとげること、完成させることが大切。小さなことでも、人の目にとまるからだ。
- ・ 百の未完成品よりも、一つの完成品をつくる。
- ・ 実験結果を深く深く考えることこれがものを理解する道具だ。
- ・ 幸いなことに私には常識などというものがなかった。
- ・ 自分で器具や装置を作り、自分だけのやり方を編み出していく。それが創造への第一歩。
- ・ 自分でものを作らないから人生がつまらなくなる。
- ・ 物を作る、という仕事は人間だけに与えられた特権だ。
- ・ コンチクショー精神
- ・ 自分の流儀は、あることを徹底的に最後までやり遂げるところから生まれてくる。
- ・ 井戸は水が出るまで掘れ。

独力で、独学で目の仕事に挑戦してきた私には共感する言葉が多い。

また一人で「図解コミュニケーション」という分野を切り拓いている私と同じやり方だと

確認できた。2005年に「勉強してはいけない！」という本を出したことがある。その主張と中村修二さんの軌跡は同じだ。

「たまたま偶然」の連続の仕事人生と中村さんは言う。自分の目と頭を信じ、強い心で、偶然に置かれた場所で、問題を解こうということだ。右顧左眊する必要はない。自分の仕事に迷いなく取り組もうという精神こそが大事なことなのだ。

日本人初のノーベル賞受賞者・湯川秀樹博士の「アイデアの秘訣は執念である」という言葉にも納得する。

中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社)

中根千枝「タテ社会の人間関係」(講談社現代新書)を久しぶりに再読。

1967年に発刊されて、すぐに話題になり、ベストセラーとなった本だ。

当時の日本人論ブームの中心に位置していた書物である。

東京オリンピックを控え、その後の高度成長の予感に満ちていた時代の本である。

「リーダーシップ」を論じたあたりでは、日本的リーダー像を明示している。

日本ではリーダーの権限が非常に小さく、直属の幹部を操縦するのではなく、逆に引きずられることが多い。リーダーはカリスマであるというよりも、ある集団の代表者という場合が多い。

このような構造のため、リーダーと部下の相対的力関係によって、リーダーのあり方が決まってくる。能力よりも人間に対する包容力があることがリーダーの資格で。部下に自由を与えるリーダーという意味では世界でも特殊である。リーダーの成否は直属幹部の把握と統率にかかっている。子分を人格的にひきつけ集団を統合し、彼らの全能力を発揮させることが最重要任務だ。

極論すれば「リーダーはバカでもいい」というこの考え方は一般的に文化人類学者の中根先生の分析で説明できると思うが、リーダーのあり方というのは、固定的なものではない。

平時のリーダーシップと有事のリーダーシップは違うし、組織風土のあり方とも関係している。

どのようなタイプのリーダーシップを選ぶかは、その時々組織の状況と力量、そしてリーダーたる自分の資質、参加時期、年齢などによって大きく変わってくる。

自分のことを振り返ってみる。

大学の探検部でのキャプテン時代、日航の課長・次長時代、宮城大時代の研究科長や総合情報センター長時代、知研の理事長時代、そして現在の状況、、、あり方は若干違うが、スタイルは一貫しているような気がする。

理念やテーマを明確にし、部下を巻き込んで問題をスピード感を持って解決する、その過程で本当の仲間と結果を喜び、強くなった絆で次の課題に向かっていく、そういうスタイルか。

この本の「まえがき」では、論文を発表すると読者からの反響に加えて、大学・研究所・企業経営・人事管理・教育研修などの帰還からセミナーや講演の依頼が多くあり、有益な意見を聞くことができ、それがこの本の内容を豊かにした、とある。

やはり作品を世に問うということは、世の中の反応と反響によって、自分がさらに進化することを意味している。作品を作り、発表し続けることが成長の源である。

河合敦「豪商列伝—なぜ彼らは一代で成り上がったのか」(PHP研究所)

この本の眼目は一代でのし上がった江戸時代の豪商たちの起業の物語である。

欧米のビジネスモデルが全盛の今、日本で、一代で成功した豪商たちのすばらしい生き方と商売の成功のヒントが満載だ。

古河財閥の創業者・古河市兵衛。大倉財閥の設立者・大倉喜八郎。藤田財閥の創立者・藤田伝三郎。浅野財閥の創業者・浅野総一郎。世界の真珠王・御木本幸吉。新宿中村屋の創業者・相馬愛蔵・黒光夫妻。大阪一の両替商・鴻池善衛門。商人資本家・本間光丘。廻船問屋の勤皇商人・白石正一郎。海運の政商・河村瑞賢。伝説の豪商・紀伊国屋文左衛門。北海の豪商・高田屋嘉兵衛。伊藤忠財閥の伊藤忠兵衛。三井財閥の租・三井高利。松坂屋の投手・伊藤次郎左衛門。、、、など 28 人の波乱の人生と商売の極意がつまっている。

「大志」「志」という言葉が頻繁に登場する。高田屋嘉兵衛。白木屋の大村彦太郎。大丸の下村彦右衛門。近江商人・中井源左衛門良祐。古河市兵衛。大倉喜八郎。高津伊兵衛。こういう人たちを筆頭に「志」を立てた人々がそれを実現させている。

彼らは、精神や信条などを、言葉で残しており、それが理念となって組織が長く続くことになっている。

- ・ 住友政友:「他人の保証人になってはいけない」「掛け値をつける商売をしてはならない」「勤勉、誠実、謙譲」。-三井高利:「商は的のごとし。手前よく調るときは、当たらずといふことなし」
- ・ 大村彦次郎:「商いは高利を取らず、正直によきものを熟れ、末は繁盛」
- ・ 下村彦右衛門:「商売において、義を先にし、利を後にせよ」「律儀ほど身のために能き人はなし」
- ・ 広瀬幸平:「我営業は确实を旨とし、時勢の変遷、理財の得失を計りて之を興廃し、いやしくも浮利にはしり軽進すべからざる事」
- ・ 伊藤次郎左衛門:「人を儲けさせることで、自分も儲かるものだ」と心得なさい」「どん

なおお客様にも同じ対応を心掛けよ」「人より早く起きなさい」

- ・ 中井源左衛門良祐:「人生は勤むるに在り。勤むれば則ちとぼしからず、勤は利の本なり、」
- ・ 浅野総一郎:「決心」「勤勉」「根気」「節儉」「健康」「信用」

これら豪商たちの生き様と、苦闘の末に得た商売の極意は、日本人である私たちの心に響き、頭を活性化する。

若い人たちの心に火をつける書である。

2014年11月

李御寧「縮み志向の日本人」(講談社)

李御寧「縮み志向の日本人」(講談社学術文庫)を久しぶりに再読。

1982年刊行されたこの本の原本は、あまたある日本人論の中の最高傑作と言われた名著だ。

「知的生産の技術」研究会で、著者が情熱を込めて語った姿をいまでも覚えている。

そのメッセージは、「日本人よ。鬼になるな、一寸法師になれ！」というものだった。

縮みの想像力で世界を縮め、具体的に簡便な形にして手に握れるようにし、引き寄せて手で握る、そういう認識の方法が日本人の特徴だ。それが茶室、庭、マンダラ、トランジスタラジオ、カメラ、時計、VTR、コンサイス英和辞典、豆本、豆辞典、となっていく。

図解はまさに究極の要約であり縮み志向の極致だ。マンダラは限界まで世界を縮めた世界観ともいえる。

縮み志向で具象的な「内」なる世界に生きている時に日本は繁栄し、拡がり志向となって自信過剰で抽象的な「外」なる世界に乗り出していった時に日本は壊滅する。

「縮むから拡がる」というパラドックスからいかにして逃れるか。

極小主義から巨大主義への転換の時に、日本人の繊細さが残忍さに変わる。いつも第一の犠牲者になったのが朝鮮半島だ。この本はその犠牲とならぬよう韓国から日本人に向けての渾身のメッセージだ。

刀でもソロバンでもない、琴のような楽器、万人に共感を与える生命の響き。それが真の文化が持つ力だ。と述べて、最後に李御寧は言う。

「鬼になるな、一寸法師になれ！ 船を焼いて琴を作れ！ 海よりももっと深く海よりももっと広い生命の空間に響く、枯野の琴の音を、、、。」

石川文洋「日本縦断 徒歩の旅」(岩波書店)

65歳の著者が北海道の宗谷岬から沖縄の那覇まで3300キロを五か月(総日数150日)、徒歩日数126日の時間をかけて歩いた記録。

ルートは日本海側。2003年7月15日に宗谷岬をスタート。稚内、豊富町、遠別町、留萌市、新十津川町、札幌(8月4日)、小樽市、岩内町、長万部町、森町、函館市。青森市(8月19日)、千畳敷、能代市、秋田市(9月1日)、象潟町、酒田市、鶴岡市、新潟市(9月12日)、柏崎市、上越市、糸魚川市、富山市(9月25)、金沢市、小松市、美浜市(10月5日)、舞鶴市、網野町、香住町、青谷町、宍道町、大田市、浜田市、益田市、長門市(10月31日)、下関市、小倉(11月4日)、福岡市、久留米市、武雄市、島原市(11月18日)、八代市、水俣市、川内市、鹿児島市(11月30日)、沖縄・国頭村奥(12月2日)、辺戸岬、沖縄市、喜屋武岬、那覇市(12月10日)。

この旅を終えてどのような心境になったかが、「終章」に書かれている。

「日本再発見の旅だった」「旅をして本当に良かった」「徒歩の旅は感動の連続だった」「いろいろな風景を観て、良い人たちと出会い、新鮮な魚を食べ、旨いビールを飲んだ。まさに天国へ行ってきたような気持ちだ」「日本は美しい国である」「終わってからも精神的、肉体的に疲労感は残らなかった」

この人はカメラマンなので、日本列島の景色と出会った人々を撮りまくっている。36枚撮りフィルム333本を使っている。総計1万2000カット。

桜前線を追って沖縄から北上する旅も検討にのぼっていた。沖縄八重岳は1月18日に桜祭り。北海道・宗谷岬公園の桜は5月中旬が見頃。ソメイヨシノは九州から北海道まで4月1日から5月中旬過ぎの二か月足らず。

紅葉前線を追って北海道から南下する旅はどうか。

私なら、温泉、人物記念館、知研、車、SNSとなるだろうか。

桐島洋子「人生はまだ旅の途中」(大和書房)

第3回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した「淋しいアメリカ人」、「聡明な女は料理がうまい」などの痛快なエッセイを若いころから読んできた。

住まい、アンティーク、気功、美術、美食、酒器食器、川上澄夫美術館(鹿沼市)、箱根の美術館、宇陀の又兵衛桜、世界家族生活卒業旅行、牛蒡茶、寺子屋「森羅塾」、健康特等席、「リラクゼーション・進盟」、東大寺ミュージアム、乗馬・水泳・スキンドайビング・グライダー・カヤック、天山湯治郷「羽衣」、姥子温泉、愛知湯谷温泉、、、、。

1937 年生まれだからもう喜寿だろうが、相変わらずのお転婆で、50 代からバンクーバーの林住庵を拠点に世界中を遊びまわっており、70 代になってから始めた自宅の私塾「森羅塾」を主宰して楽しんでいる。

人生はワクワクする冒険であるとの人生観で、新しい経験、激しい体験を求めて旅をし、愉快的なエピソードをふんだんにまき散らす。このような生き方も素敵だ。

星浩「官房長官 側近の政治学」(朝日新聞出版)

側近、女房役、番頭、内閣の顔、と呼ばれる官房長官を政治家者が分析した書。

1985 年以來 30 年間の政治記者生活で直接取材した官房長官は 30 人を超えるというから、任期の平均は 1 年。

官房長官の強さの秘密、仕事の中身、首相との距離、支える組織、機密費、側近の政治学などが縦横に語られている。

官房長官の 3 傑は、情報の後藤田、バランスの福田、ペースチェンジの大平だそうで、この人選には納得できる。

興味深いのは、現在の安倍政権を支える菅官房長官のロングインタビューだ。

- ・ 全部私の手元に集まってきます。、、権力もそれなりに集中してきます。そこに気をつけてやっていたら、いろいろなことができる
- ・ 役所の利害調整は、意外に楽です、政権与党との調整が大変です。
- ・ 方向性をきちっと出したら、それに基づいて役所も動いてもらう
- ・ 役所は本当のことを言わないことが結構ある
- ・ 総理に判断を仰ぐケースを、できるだけ少なくしよう、、、。「総理、こうしたんですけど、よろしいですか」という言い方にしています
- ・ 危機管理が一番神経を使います
- ・ 国民から見ると当たり前のことをやれば、まったく怖くない

太田昌克「日米(核)同盟—原爆、核の傘、フクシマ」(岩波新書)

日米核同盟の実態を深掘りしたノンフィクション。

核の傘(軍事)と原子力の平和利用(経済)という表と裏を持つ日米同盟は、実は「核の同盟」であることがよくわかる本だ。

- ・ 日本の軽水炉原発(普通水)はウラン燃料を使って発電する。使用済み核燃料である燃え残った「ウラン 235」と臨界反応で生じた「プルトニウム 239」を「再処理工場」で回収する。抽出されたウランとプルトニウムは「混合酸化物(MOX燃料)」にして軽水炉で再利用する。この発電のやり方を「プルサーマル」と呼ぶ。(プルトニウムのプルとサーマルニュートロン・リアクター(熱中性子炉)のサーマルを繋げた

和製英語)

- ・ 将来的には軽水炉ではなく、「高速増殖炉」を実用化し、燃やした以上のプルトニウムを増殖させる目標がある。(夢のエネルギーへ)
- ・ 使用済み核燃料の再処理事業は国が青写真を描き、民が従う形で進められてきた。(国策民営の構図)
- ・ 青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場(1993年着工、2014年未完成)に日本原燃が投じた建設費は2兆円以上。このつけは「総括原価方式」で電気料金として国民負担。再処理工場の閉鎖・廃止には19兆円のコストがかかる。(官民とも、やめると言いだせない構図)
- ・ 再処理で抽出したプルトニウムは45トン。核爆弾5000発以上をつくれる。国内9トン、英仏に半分ずつ保管中。(短期間で日本は核武装可能)
- ・ 米国は日本に特別に再処理を認めている。これは特権である。インドは平和利用を隠れ蓑として核開発を行った。(日本にも疑いの目が注がれている。)
- ・ プルトニウムを抽出する民生用再処理技術と商業用のウラン濃縮技術は、核兵器開発とコインの裏表の関係にある。(IAEAの予算の3割は日本の監視)
- ・ 日本では、東芝は米国ウェスティングハウスを買収、三菱重工は仏ノアレバ、日立製作所は米GEと提携関係にある。日本製鋼所室蘭製作所の原子炉圧力容器は高い競争力を持つ。(世界の原子力産業の中核は日本)
- ・ 日米同盟は「核」というきびきにつながれた「核の同盟」である。(ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ。アメリカの核の傘。原子力平和利用。)
- ・ 2018年7月に日米原子力協定は有効期限を迎える。(アメリカ新大統領)

向田邦子「思い出トランプ」(新潮社)

ホームドラマの脚本で一世を風靡した向田邦子の初めての短編小説集。

この中の「花の名前」「犬小屋」「かわうそ」は、直木賞受賞作となった。

13篇の短編の人生はそれぞれが一枚の思い出トランプである。

誰もが見過ごしている日常の情景を切り取り、人間模様を散りばめ、共感を引き出しながら、人生を考えさせる本だ。

このように人間心理を深く読み取ることができるので、彼女が書いたホームドラマが圧倒的な支持を得たのだと納得する。

岡田斗司夫「僕たちは就職しなくてもいいのかもしれない」(PHP研究所)

お金を神とする貨幣経済の時代から、尊敬を神とする評価経済の時代へと移行中であるというのが岡田斗司夫の時代認識。

今は評価経済の高度成長期という面白い時代に遭遇しているのだそうだ。

評価経済においては、人間の値打ちが重要になる。それは「いい人」になるということ。最小単位は「注目」。次の単位は「評価」(ほめ)。

それは3つのCで決まる。コンテンツ:キャリアに近い。仕事の総和。コミュニティ:仲間関係。キャラクター:人柄、人格。もっとも重要。

平たくいうと、何ができるか、仲間がいるか、人柄はいいか、ということになりそうだ。

コミュニケーションの下手な「関係弱者」へのアドバイスは「毎日5つ、人をほめる」ことを提唱している。

ほめてツイート(ツイッター。LINE)。リアルでほめて紹介する(人と会ったときにほめながら紹介する)。ネットでほめて語る(ブログ、FBでの誰かの発言にほめる)。けなす、批判、アドバイス、提案がしない。人にほめられたら、自分や相手以外の人をほめて、「ほめ」を流動させる。これが評価経済市場で生き残るポイントだとのアドバイスがある。

評価という言葉には緊張が伴う。人事評価という言葉には正確性などの面での反論が俟っている。評価には数字などが入ってくるので評価される側は緊張する。そしてその評価には納得しない可能性がある。

ということで、岡田のいう評価経済は「評判経済」という柔らかな言葉に変えたらもっとと広がりをもつのではないかな。評価を高めようから「評判」を上げようへの転換。これもアドバイスだから、よくないのかもしれないが、。

富岡幸雄「税金を払わない巨大企業」(文藝春秋)

税の専門家が「日本の法人税は本当に高いのか」、というテーマを徹底的に追求した本である。

こういう素朴な問いに対して、個別企業の納税情報を追って、時間と労力と高度な専門知識が必要とされる困難な作業の連続で答えを見つけたのである。そういうことが簡単に分からないほど「税制」は複雑らしい。

- ・ 法人税納付額を起業利益相当額で割った「実行税負担率」というスケールで、税引き前純利益が一期で600億円以上の大企業のう、32.3%未満の企業は35社あった。(平均以下の低い数字)。以下1位から。金融、商社、自動車が多い。
- ・ 三井住友FG(純利益1479億円に対し実際に払った法人税等は300万円。0.002%)。ソフトバンク(788億円・500万円。0.006%)。みずほFG(2418億円・2.26億円)。三菱UFJ(1886億円・5.7億円)。みずほコーポレート(2577億円・67億円)。ファーストリテイリング(756億円・52億円)。オリックス[1752億円・210億円)。三菱東京UFJ(8774億円・1093億円9.1%)。麒麟ホールディングス(959億円・1190億円。12.5%)。以下、ANA。住商。三菱重工。小松製作所。富士重工業。丸紅。ニコン。日産。サントリー。阪急阪神(22.03%)。

- ・ 利益があっても課税所得として参入しなくてもいいような優遇制度があるからこうなっている。
- ・ 外国子会社配当益金不算入制度(商社)。特別試験研究費(自動車)。「受取配当益金不算入制度」、、、、。
- ・ 世界的規模で「ゼロタックス化」戦略を追求する無国籍ローバル企業に有効な防御措置がないため、先進国は税収確保が困難になっているのだ。
- ・ 2014年度の消費税増額分は、国と地方を合計すると5兆円。このうち社会保障の充実には5000億円。大半は、既存の年金・医療・介護などの経費に充当。消費税増税関連法の附則では、財政にゆとりが出た際は「成長戦略及び事前防災・減災に重点的に配分する」と規定されていて、国土強靱化に1.5兆と予算をつけた。

著者は、消費税は低所得者に対する過酷な増税であり、高所得者に対する減税であるという。

消費税を10%にあげても、2020年度のプライマリーバランスは11兆円の赤字になる。

その原因は、大企業が税金を払わなくていい税制のゆがみにあるというのが、増税はデフレを招くと従来から主張してきた著者の主張である。

この本は衆院解散という時期に大きな話題になるだろう。

夏目漱石「吾輩は猫である」(角川書店)

あまりにも有名な本なので知っている気がするが、今回時間をかけて初めて読み終えた。

随分と長い長い物語だ。文庫本で515ページの大著である。

驚くような滑稽と辛らつな風刺が、気の遠くなるような深い教養がにじみ出る連続した言葉の文体の中で踊っている。漱石は言葉の魔術師だ。猫の目でみた人間世界の表現が実に面白い。

写生。タカジアスターゼ。猫族の言語。小泉八雲。上田敏。高浜虚子。バルチック艦隊。葛根湯。伊藤博文。韓国統監。ソクラテス、、、。この小説には明治の風が吹いている。

漱石自身と思われるこの猫の飼い主の珍野苦沙弥先生についての猫の視線は厳しい。

彼(主人)は性の悪い牡蠣の如く書斎に吸い付いて。何をやっても永続きしない男裏表のある人間。牡蠣先生。太平の逸民。慢性胃弱。横になって本を二頁と読んだ事はない。送籍という男。如何に馬鹿でも病気でも主人に変わらない。主人はかくの如

く愚物だから厭になる。智慧の足りない所から湧いた子子のゆなもの。おれが神経病じゃなく、世の中の奴が神経病だと頑張っている。学士とか教師とか号するものに主人 苦沙弥君の如き気違のある事を知った以上は、。主人は愚物である。教師は鎖で繋がれておらない代りに月給で縛られている。そんな人の悪い男ではない、悪いというよりそんなに智慧の発達した男ではない。例の如く竜頭蛇尾の挨拶をする。主人は鏡を見て己の愚を悟るほどの賢者ではあるまい。何に寄らずわからぬものをありがたがる癖を有している。むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。彼らは徹底的に考える脳力のない男である。細君にさえ持てない主人が、。奥行きのない、薄っ片の鼻っ張だけ強いだっこだ。陽性の癩癩持ち。元来不人望な主人。

最後の方の議論は平成の時代を予言しているようだ。

昔の人は己を忘れろと教えたが、今の人は己を忘れるなと教える。文明が進むと自覚心が強くなって心は穏やかにはならない。苦しいから自殺者が増加する。中学校では倫理のかわりに自殺学を正科として教えるようになる。個性中心になるから生きているのが窮屈になり親子は別居し、結婚しても夫婦は分かれることになる。自由を得た結果不自由になる。神経衰弱になる。

内田樹「街場の憂国論」(晶文社)

国民国家が解体過程に入ったこの時代にグローバル企業と言われている無国籍企業は、当然のことながらコストを国民国家に押しつけて利益だけを確保する戦略で自由にふるまっている。日本の政権は排外ナショナリズムを喚起しながらグローバリズムに対処しようとしている。これは国民国家の末期の姿である。

国政の不採算部門である医療、教育、保険、福祉などを切り捨ててスリム化し、労働慣行を変えて、国全体を機動的にするというのが現在の国家戦略だ。アメリカには農産物以外に売る工業製品はない。ノウハウだけはある。農業はTPP、そしてノウハウである司法、教育、医療、教育などは日本国内の制度変更を迫るという構図である。

「同一労働・同一賃金」という心地よい言葉は、実は高い方にあわせるのではなく、いずれ低い水準に合わせようという流れになると著者はいう。正規労働者の賃金は非正規労働者にあわせて減らすベクトルが働く可能性がある。

一部の人は栄え、ほとんどの人は没落する。中間層の貧弱な国になる。少数の支配者と大多数の被支配層に二極分解していく。格差社会である。国民を飢えさせないということが国民経済の使命だ。それが脅かされようとしている。

以上が著者の時代認識だ。

以下は、ヒント。

- ・ 処方箋「世界は縮まる。贈与経済の復活。NPOとしての報道専門組織。自分のた

めではなく人のため」

- ・ 教育「自学自習のスイッチ。自己教育が続く」
- ・ 現場の人の話は新書一冊分に相当。

2014年12月

田中康二「本居宣長」(中央公論新社)

江戸中期に生きた国学の大成者・本居宣長(1730-1801年)は72年の生涯をたくそして長く生きた。

この本では20歳代を学問の出発、30歳代を人生の転機、40歳代を自省の歲月、50歳代を論争の季節、60歳代を学問の完成、70歳代を鈴屋の行方とし、それぞれを章にあてている。

神学という道である古道学を学ぼうとする人は、漢意(からごころ)儒意による汚れを洗い落として大和魂を堅固にすることが肝要であると述べている。仏教と儒教が日本をダメにしたという没落史観である。儒教・仏教が入ってくる前の日本を取り戻すために、記紀、とりわけ古事記を聖典としたのである。

そして国学を志す者は歌を詠み、歌書を研究すべきとする。詠歌と歌学の両立が必要である。万葉集で古代人の心を知り、古代の道を知る。

20代の5年半の京都留学では、本来の医学修業に加え、師の掘景山を通じて国学の始祖・契沖の書に親しむ。契沖学は文証という証拠を重視する文献実証主義を学んだ。

歌は二条派歌学を体得した。

有名な「松坂の一夜」で宣長は開眼する。賀茂真淵67歳、本居宣長34歳で、実に33歳の年齢差であった。この後の書状による質疑応答は真淵が亡くなるまで6年に及んだのである。

宣長の代表作の「古事記伝」は30有余年を費やした大著である。これは古事記を忠実に訓読する作業ではなかった。古事記の翻訳される前の口承で伝わっていた原・古事記を復元する作業だった。それは失われた大和言葉を取り戻すための膨大な作業の連続だったのだ。

物のあはれ、とは五感で感じ、物事の本質を体得するということである。仏教の因果応報説、儒教の勸善懲惡説とは違う。これが日本の国柄なのである。源氏物語などの物語は、物のあはれを知るために書かれたと宣長はいう。歌を詠むのも物のあはれを知るためだ。

日本の神の道は、老荘思想の天地自然の道でもなく、儒教の聖人の道でもない。連綿と続いてきた嘯みながらの道である。

30 歳。

もろこしの人に見せばやひの本の花のさかりのもよしの山

44 歳の自画像。

めずらしきこまもろこしのはなよりもあかぬいろかは桜なりけり

61 歳の自画像。

しき嶋のやまところを人とはば朝日ににほふ山ざくら花

宣長は 39 歳の処女作以来、旺盛な仕事量であった。研究成果の公刊という視点で見ると 60 歳代がピークであった。生前の刊行の半数が 60 歳代であった。

1798 年の 69 歳で「古事記伝」を完成させた。松坂の一夜から 35 年、初稿を仕上げた年から 32 年という歳月がかかっている。

6 月に最終巻の清書が完成し、9 月に「古事記伝」終業慶賀の月見会が鈴屋で盛大に行われている。この「古事記伝」のすべて 44 巻が刊行されたのは 1822 年であり、没後 20 年以上が経っていた。

70 代に入って宣長は死に支度を始めて、72 歳で没する。起承転結のある見事な人生だと感服する。天寿を全うしたのだ。

江戸時代の正学であった儒教の儒者に「よる拝外思想から、宣長の日本中心の排外思想へのコペルニクス的転回は、明治維新の原動力になっていく。

夏目漱石「こころ」(集英社)

夏目漱石の「こころ」の朗読本を購入し、耳で聴き終わった。

あらすじは知ってはいたが、本物を読んだ(聴いた)のは初めてだ。

大学生の私と世捨て人の「先生」の物語から始まり、自殺する先生からの長い手紙での告白で終わる物語。

明治の時代の世相、家という重い存在の中で生きる人々、当時の東京の様子などがよく描かれている。

先生は友人を裏切ることでその友人を自殺に追い込んだことを後悔し、自分は世に出る価値がないとして静かに日々を送る。

いつかはこの世からいなくなろうとしていたが、明治天皇の崩御と乃木大将の殉死をみて、みずからも明治の精神の死に殉じるという名目をもって自殺してしまう。

書物で読むとは目で文字を追うことだ。書物を聴くとは耳で肉声を聴くことだ。

通勤や散歩のときに、ヘッドフォンでずっと聴いてみたのだが、この「こころ」のような独白型の小説は、主人公たちの声で聴く方がこころに沁みこんでくるような感じがあ

る。

水上勉「作家の自伝 (74) (シリーズ・人間図書館)「冬日の道・わが六道の闇夜」 (日本図書センター)

日本図書センターが出している「作家の自伝」というシリーズがある。

1998年時点で90冊ほど刊行している。

今回は作家の水上勉「冬日の道・わが六道の闇夜」を読了。

水上勉(1919-1997年)が直木賞を受賞する42歳まで、貧乏と波乱の人生の荒波を過ごした人だった。

ある編集者が「文壇へわらじ履きで登場してきた観がある」といったそう。

中学をやっと出て、後は多くの職業遍歴を重ねている。

日本農林新聞、報知新聞、学芸社、三笠書房、日本電気協会、小学校助教、虹書房を起業、文潮社、日本繊維新聞、東京服飾新聞、洋服行商人。

「霧と影」「不知火海沿岸」「海の牙」を経て中山義秀から「お前、人間を書け。人間を書くしかないぞ」と諭されて、「雁の寺」を書き、直木賞を受賞する。

自伝の後半の「わが六道の闇夜」は、53歳の時点で「私という人間が、どういう育ち方をして、今日のようなひねくれた心の持ち主になったのか、そこらあたりの事情を、出来る限り書いてみい」と思い立って幼少からの体験をつづっている。

20数年間電燈がなかったほどの貧乏。禅寺へ小僧として出家。食べ物の差別と兄弟子たちからの隠微な集团的いじめ。脱走。禅宗坊主の虚偽世界。京都府庁の雇として満蒙開拓少年義勇軍の募集と自らの応募。奉天で中国人虐待の生活。肺病となって帰国。多くの女たちとのこと。

まことに不幸な日々であり、たどり着いたぼは「西方浄土などはなくて、永遠にここは地獄である。それなら、地獄の泥を吸って滋養となし、私は長生きしたい」という心境になっている。壮絶な前半生の記録だ。

先日訪問した世田谷文学館では「水上勉のハローワーク 働くことと生きること」展をやっていた。

このテーマは不思議な感じがしたが、水上の人生の遍歴をみると、その資格はある。

- ・ 仕事から教えられる。仕事が人を磨いてくれる。
- ・ 職業というものはそれにたずさわる側の人の側で、ずいぶんちがうものであり、いかえれば天職にもなるし、ならぬこともある。
- ・ 生き死について対立的に考えなくなり、ただ今、ここにあることが生命の全体だ、という考え方が深まってきた。

並んでいる資料を眺めていて気がついたのだが、就職のための履歴書には立命館大学を卒業したことになっていた。実際は入学したもののすぐに退学しているから、学歴詐称だとおかしくなった。

荒又宏「すごい人のすごい話」(イースト・プレス)

博物学者の荒又宏が、各界のすごい人にインタビューしたものをまとめた本である。

土地の竹村公太郎、ウイルスの高田礼人、歌謡曲の船曳建夫、映画の町山智浩、オランウータンの鈴木晃、生命の福岡伸一、救急医療の浜辺祐一、中国の街づくりの迫慶一郎、四国巡礼の早坂暁、。

それぞれの世界は驚きに満ちているが、特に面白かったのは竹村公太郎さんと福岡伸一さんだ。

竹村公太郎。

関東平野をつくったのは徳川家康で、河川に手をつけて洪水から救った。

家康は抜群のフィールドワーカーで鷹狩と称して関東を歩き、肥沃な関東平野を生み出した。

大阪の梅田は埋田。江戸のインフラ第一号は飲み水確保のための溜池。よし原に向かう日本堤を歩かせて踏み固めさせた。日本人の小さいものはいいという美意識は旅の文化から来ている。すべての物を持ち運びに便利のようにコンパクト化していった。スモール・イズ・ビューティフルの価値観へ。

福岡伸一。

自分のことを知りたい。どこから来てどこへ行くのか。自身のアイデンティティへの問いかけ。分子生物学はそれを新しい文体で語ろうとする学問だ。生命の部分はない。

全体の連なり。生命とは分解と合成を繰り返しながら流動的に動いている。鴨長明の「ゆく河の流れは絶えずして、」、仏教の「縁起や因果、」。生命は耐えず中身を入れ替えながら流れている「流れ」そのものだ。自転車操業。こぐ速度が衰えてエントロピーに追い抜かれる、それが死である。

堤未果「沈みゆく大国 アメリカ」(集英社)

オバマ大統領によってアメリカ版皆保険制度が成立した。

「患者保護並びに医療負担適正化法」であるが、通称はオバマケアである。

国民全員の加入義務がある。オバマは公約をなんとか守ったということになるのだが、実際はそうではないことを明らかにした新鋭の力作ルポだ。

アメリカには二つの医療保険がある。

高齢者と障害者・末期腎疾患患者のための「メディケア」と、最低所得者のための「メディケイド」である。

一見素晴らしい理念のもとにできた制度の恐るべき実態をえぐっている。

2014年11月の中間選挙でオバマの民主党が大敗北したのは記憶に新しい。

その敗因のひとつは医療制度だった。年間150万人の国民が自己破産する。その理由のトップは医療費である。

- ・ がんとなって10か月後になくなるまでに払った医療費の合計は9000万円。うち保険会社から支払われた保険金は400万円。残りは自己負担。最貧困層に提供されるメディケイドを受給する。
- ・ アメリカの大学では1970年代に4割だった非常勤講師は、今は7割以上。大半は貧困ライン以下の生活者だ。アメリカは非正規労働者国家にシフトしつつある。
- ・ オバマケアは労働組合と組合労働者を危機的状況に陥れている。組織率は13%にまで低下した。
- ・ オバマケアは大増税政策だった。20年間で50兆円。保険会社は増税分を保険料や薬価に上乗せし消費者に押しつける。医療費支出は家計の35%だが、2024年には50%、2030年には63%となっていく。
- ・ オバマケア保険を扱う医師が見つからなくなっていく。年収2000万円の外科医、訴訟保険料が1750万円、手取りは250万円。医師はワーキングプアになった。専門職の中での自殺率のトップは医師である。医療までファーストフード化した国になった。
- ・ ホスピス、病院、老人ホームはビッグビジネス化し、その所有権はウォール街の投資家が持った。営利事業でありコストカットが進む。
- ・ どれだけ値上げしても薬は税金でかってくれる仕組みができた。医薬品・保健関係のロビー費用は他の業界より突出している。この金でザル法にし、保険と薬の業界が大儲けしている。(日本の電力会社と同じ構図。経営上のマイナスは電気料金に上乗せし国民に負担を回し、値上げの際は献金している政権与党が総承認する)。

日本。

- ・ 2014年10月に東京証券取引所で国内初の「ヘルスケアリート」が承認された。リートは福祉ではなく投資商品である。利益があがらなければ施設は売却、廃止されてしまう。巨大医療法人の誕生によって利益率の高い心療・循環・整形を中心に儲け、貧乏な患者は見ず、過疎地には開設しない。
- ・ 国家戦略特区で企業天国が誕生する。40兆円という生命保険市場に外資は魅力

を感じている。混合医療の拡大で特区内の医療費は高騰していく。アメリカと同じ構図になる。

- ・ 厚生年金と国民年金を運用するGPIF。運用業務の委託は14社のうち10社は外資系金融機関になった。ゴールドマンサックスなど。国民年金を国家レベルで株式運用している国は少ない。失敗したら保険料の引き上げや給付削減で国民がツケをかぶる。バクチに失敗しても莫大な手数料をとる人々は責任をとらず去っていく。

まさに無知は弱さになる。

11月19日が第1刷のこの本は評価が高い。話題の書として日本人を啓蒙していくことになるだろう。

この著者はまだ若い。2006年以降の著書で、黒田清日本ジャーナリスト会議新人賞、日本エッセイスト・クラブ賞新書大賞、早稲田大学理事長賞を連続して取っており、力のあるジャーナリストだ。

続編「沈みゆく大国 アメリカー逃げ切れ！日本編」を読まねばならない。

山本兼一「利休にたずねよ」(PHP 研究所)

オーディオブックで「利休にたずねよ」(山本兼一)を聴き終えた。読了というのか、どうか。

febe で 1296 円。14 時間 4 分。製造はオトバンク。ナレーターは芥川亜郎。

<http://www.febe.jp/product/164580>

直木賞受賞作品のオーディオ版。

権力と美の葛藤を描く力作。

茶聖・千利休が秀吉の不興を買って切腹する日を軸に、少しずつ年月を遡っていくという鮮やかな構成に感心した。

「侘び・寂び」の本質が見事に説明されている。

利休の「利」とは利益ではなく鋭さの意味。それを休めて押さえ丸くして鈍くせよという意味でもらった名前だ。

「侘び・寂び」とは、侘しい、寂しいというマイナスの状況に美を見出すという日本の感性をあらわすという理解をしていたのだが、この本でその中に新しい命の躍動を感じるという高い境地を言うということがわかった。

このオーディオブックでは、朗読の背景に湯茶のわく音、戸の閉まる音などが入っており、ドラマ仕立てになっていて、心に沁みってくる。

ミステリー、恋愛小説、歴史小説、という様々な面が組み込まれている傑作だ。

こういう小説を耳で聴くのはなかなかいい。

北大路魯山人「春夏秋冬 料理王国」(筑摩書房)

北大路魯山人(1883-1959年)の「春夏秋冬 料理王国」を読了。

天下を制覇した赤坂の星岡茶寮の料理人募集広告が魯山人の志の大きさを語っている。

この星岡茶寮は、日本の貴人・2000人以上が会員となっていたという伝説の料理屋である。「星岡の会員に非ざれば日本の名士に非ず」と言われた。

「日本料理と限らず、美的趣味を持っている人。絵画、彫刻、建築、工芸等、芸術に愛着を持ち、今日まで食物道楽で変人扱いを世間から受けるくらいの人。そうして非常に健康な身体を持った人」

これはまさに魯山人そのものではないかと思う。

料理人とは本来これくらいの人を呼ぶのだ。

料理というものは他の芸術と違って、再現性が乏しい。写真で料理を撮っても、味を言葉で語っても、食べた本人以外はなかなか真髄を味わうわけにはいかない。

魯山人は、食器は料理のキモノであると言い、良いものがないからとって自分で作陶し見事な雅陶をつくる。

魯山人には全生活を美に染めた千利休と同様の嗜好を感じる。料理は芸術であり、魯山人は芸術家として一つのジャンルを極めていった。芸術の革新者だった。

日本は中国やフランスと違って、材料が豊富で山海に美味が満ちており、食材が段違いに優れている。だから美味不味は十中九までは材料の選択にある。食器の美しさ、盛り方のデザイン、居室の美しさなども世界無比である。

中国は明代の食器が一番美的に優れているかた、料理がすすんでいた証拠だ。

フランスは明治時代の若者が日本料理を知らぬまま留学などで味わってほめたのだが、魚介も肉も材料が悪いから大したものではない。

「今に諸外国の人間が日本に来ることは、日本の刺身が食いたいためである、と言われるまでに至るであろうことが想像される」と1960年段階で書かれたこの本に書いてある。日本食が注目され、世界遺産となった時代を予言していたのだ。

魯山人は独学独歩で芸術の頂点を極めた人だった。

- ・ 志を高くもって、料理を味わい、人間を高くしたものです。
- ・ 身銭を切って食ってみること。本気でそれを繰り返してこそ、初めて味が身につく、おのずとわかって、真から得心がいくのである。

池波正太郎「日曜日の万年筆」(新潮文庫)

怒涛の仕事量をこなした稀代の仕事師である池波正太郎の日常生活と心がけを知ることができる本。

- ・ 行楽の季節に自分の楽しみで旅行はしない。6月の梅雨どきか、12月に旅行する。5日か、一週間で仕事をすっかり忘れてしまう。日曜日は平日よりも忙しい。
- ・ まず書いてやめてしまう。寝てしまう。別の仕事をする。そうすると何をしても内容が頭の中で膨らんでくる。
- ・ 夕飯までの1時間が大事。少しでも書いておけば、夜半からの仕事が気分的にずっと楽になる。夕食では酒を二合飲むので眠くなる。1時間半か2時間。目覚めてから少し書いておく。夜は11時に入浴。蕎麦などの夜食を食べて、テレビをみたり調べもの。本格的に机に向かうのは午前1時頃。2時間を集中して書く。10枚ほど。日中から夕方の方を含めて15枚書ければ上等。それからウイスキーを飲みながら水彩画を描いたり、書斎のベッドで本を読んだり、眠ったりする。
- ・ 小説を書く仕事をしていると、適度の酒がなくてはストレスも疲れもとれない。夕食は二合のサ酒か、ウイスキーのオンザロックの2、3杯。
- ・ 「男の小遣いに余裕がなくなれば当然、その国の余裕も消える。、、その余裕が、世の中にうるおいをあたえていたのである。
- ・ 3年連続日記。日記には、日々、食べたものだけを書いておく。
- ・ 年末の大掃除と大整理で、書斎が、いくらかでも清らかになっている。
- ・ 生活の単純化、簡潔な暮らしを自分に強要していこう。生涯を終えるまで自分のすべきことはほとんど決まってしまった。そのことがむしろ私を落ちつかせてくれる。